女鑑

明治三十四年六月二十日發兌

（九年三月十二日第三種郵便物認可）

第貳百柒拾壹號



女鑑第貳百參拾壹號

目録

定價
一册　金拾錢
六册三ヶ月分　金五拾五錢
十二册半年分　金壹圓
全國無遞送料

明治三十四年六月十九日印刷
明治三十四年六月二十日發行

編輯兼發行人　川崎直衛
印刷人　並木眞雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　國光社
東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地
發賣元　靜思館
（電話本局一千三百七番）

日本赤十字社篤志看護婦人會講師 正五位勲三等 足立寛先生著作

育兒談

總振假名付 正價金貳拾五錢 郵稅金四錢

通俗救急處置

總振假名付 正價金貳拾五錢 郵稅金四錢

日本赤十字社篤志看護婦人會教程

總振假名付 正價金四拾錢 郵稅金六錢

看護學教程（看護婦教科書）

正價金壹圓 郵稅金拾錢

日本赤十字社看護人教科書

正價金六拾五錢 郵稅金八錢

日本赤十字社藏版

富國の策は國民の身體健康を保つより先なるはなし身體の健康は育兒衛生に始まり一家衛生に中にし公衆衛生に終る此理は世人知らざる者なしと雖も之を行ふに法ありて其法を教ふるの良書世に乏しきが爲め知らず識らずの間に生を害ひ身を危くするもの擧て數ふべからず是啻に個人の不利のみならず抑亦國家の一大不幸といふべし

本書は前の陸軍醫務局長陸軍々醫監足立寛先生、日本赤十字社篤志看護婦人會に講師として會員に講授せられ或は看護人、看護婦の教科書として著作せられたるを上版せるものにして何人にも容易く衛生の要法を了解するを得べし自ら進みて子を愛し家を重んじ世に務むべき道を衛生上に求めんと欲する者は座右缺くべからざる珍書なり

本書は從來日本赤十字社部内のみに頒たれしが今般汎く希望者に布くことゝなり弊所其取次賣捌を許可せられたれば多少遠近を問はず大方の求めに應ぜんとす請ふ陸續愛讀せられんことを

取次大賣捌所

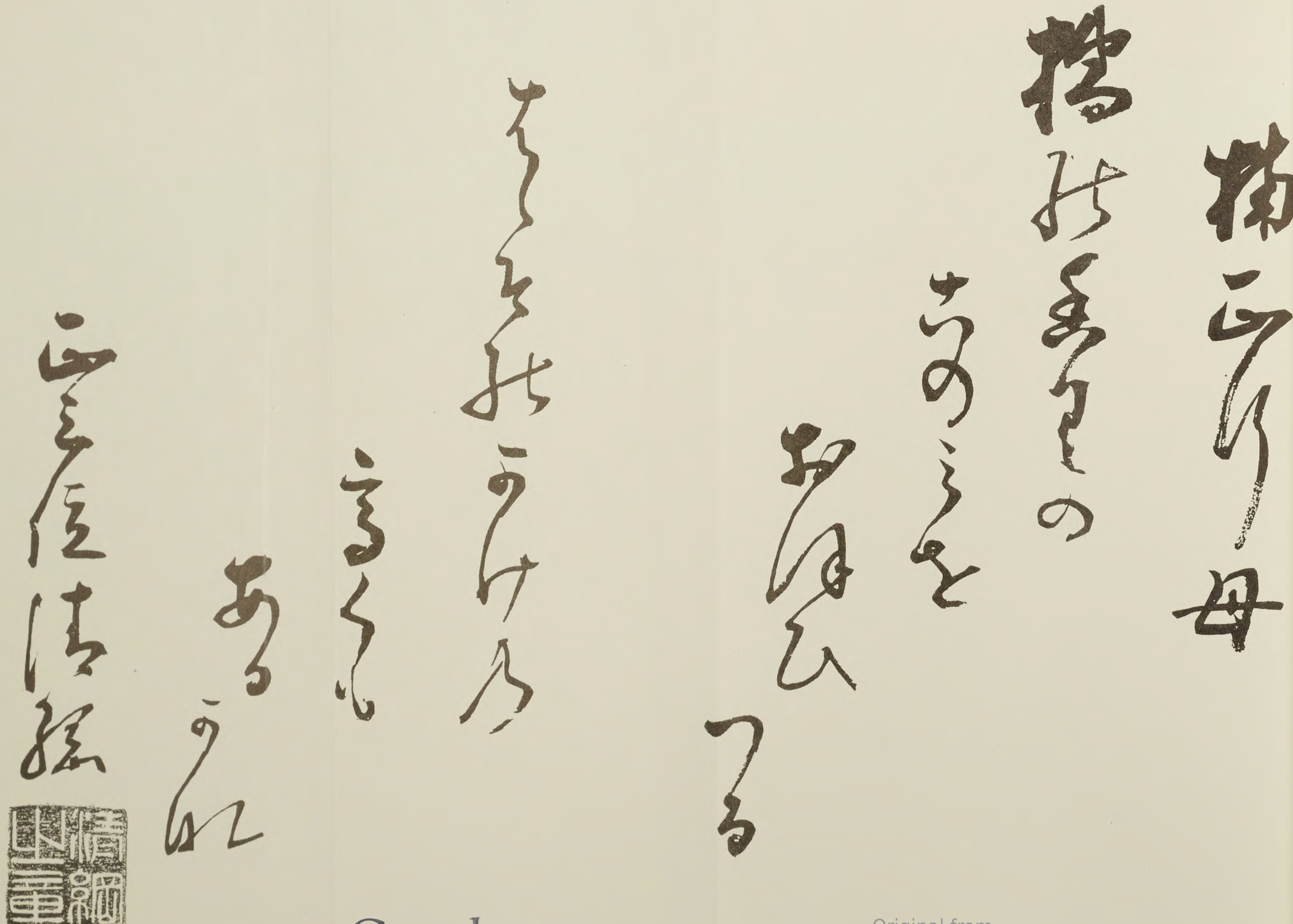
東京京橋區南傳馬町一丁目七番地

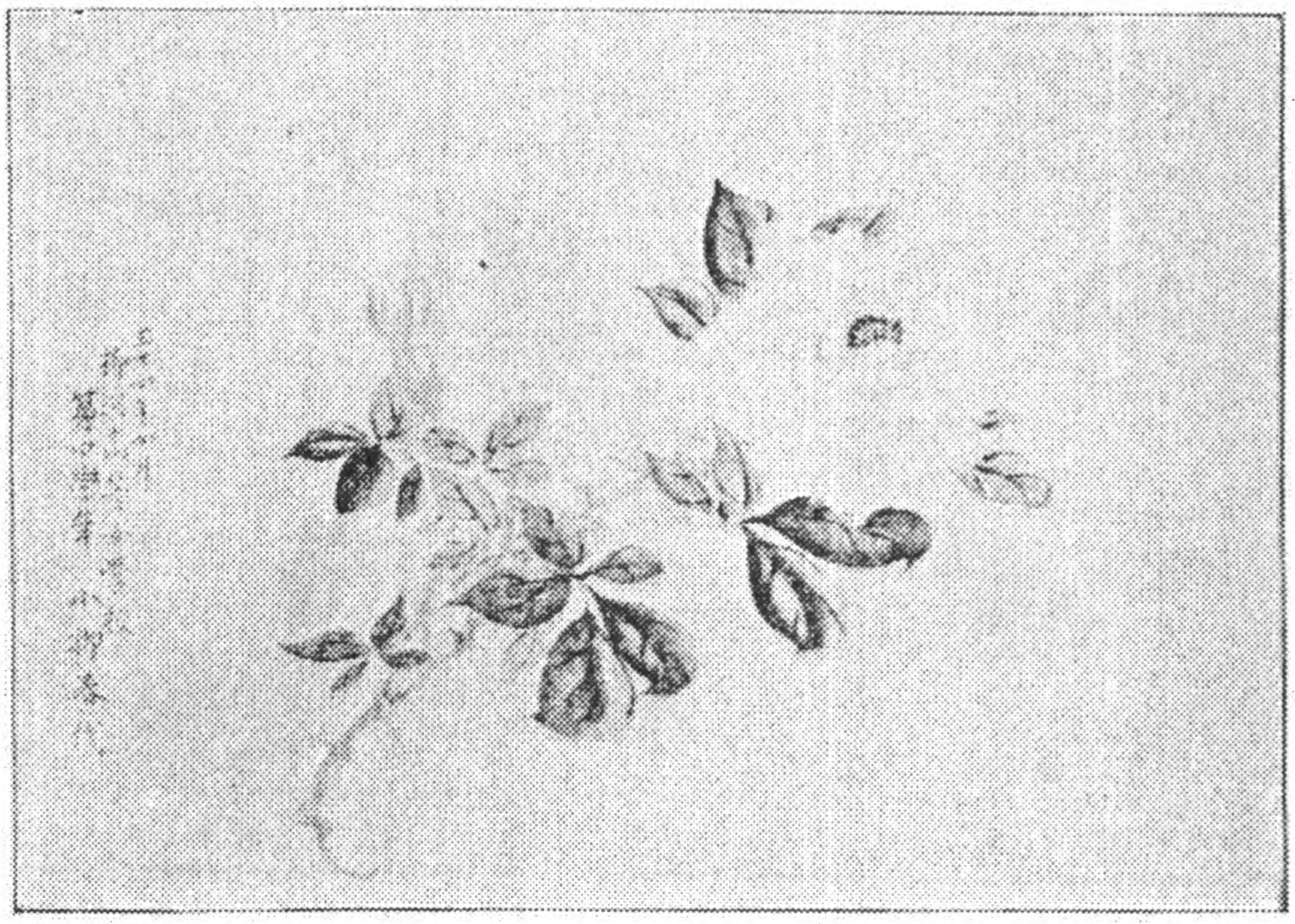
日本赤十字發行所

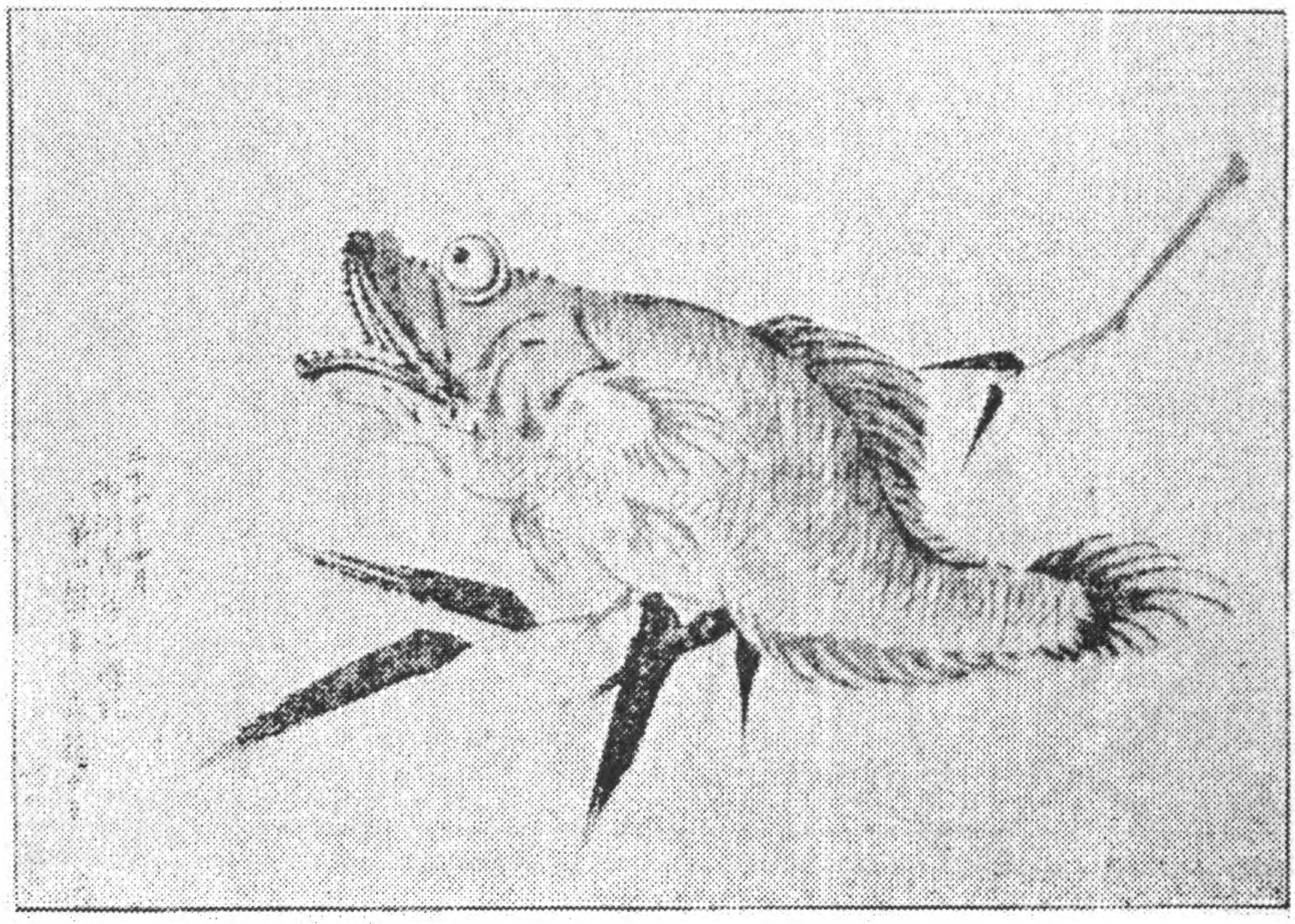
電話本局千三百七番

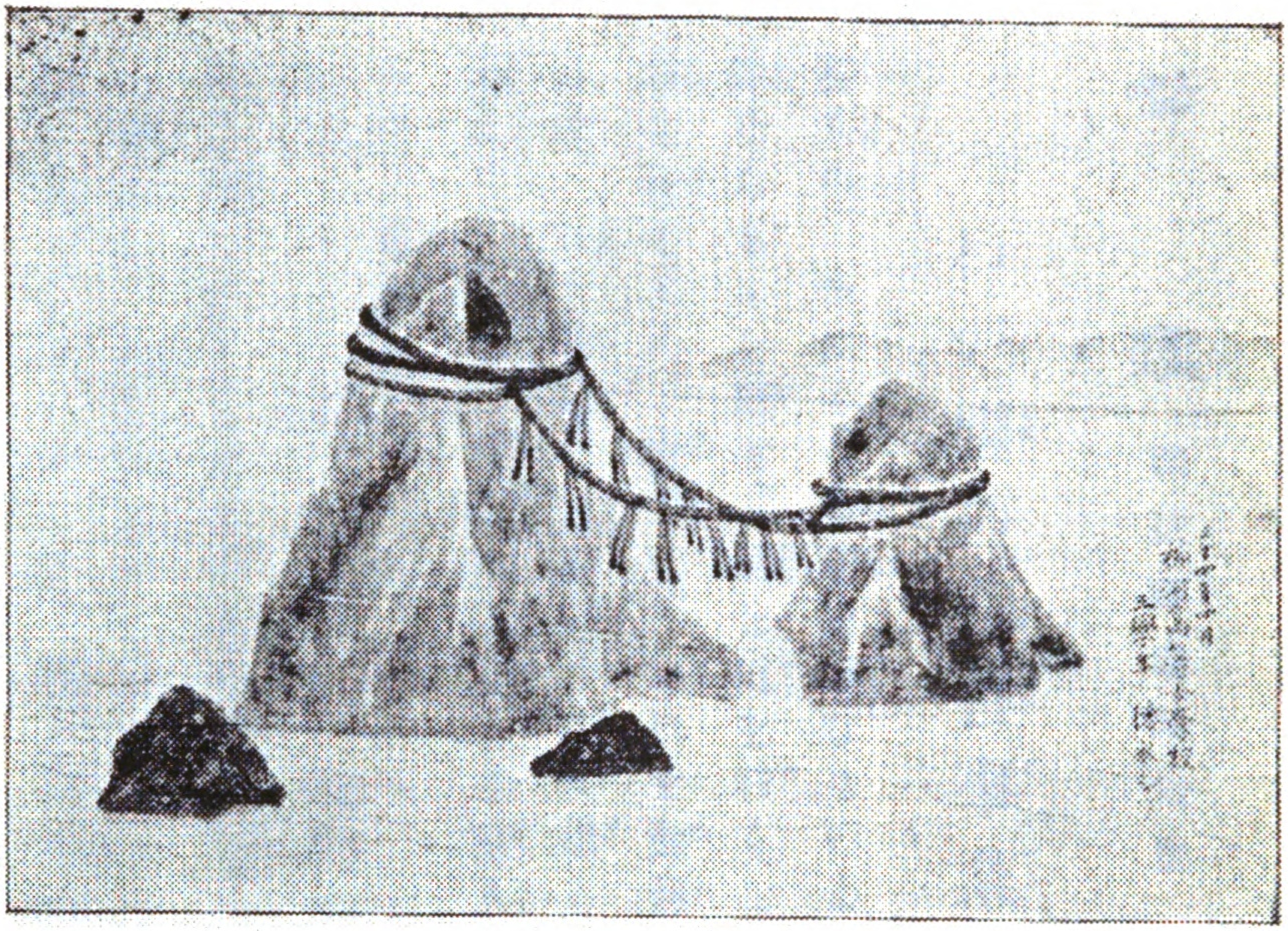
夏げしき

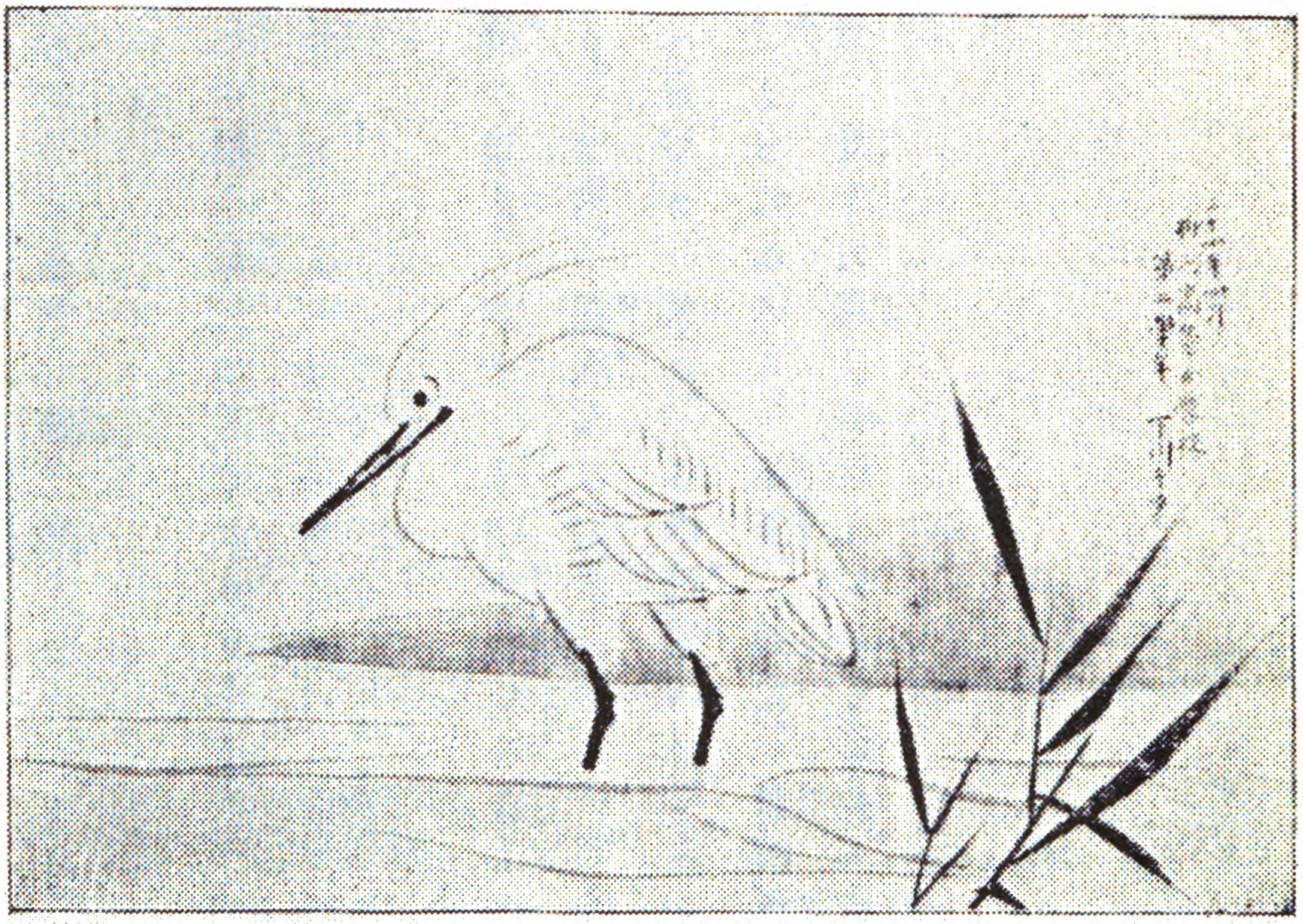



楠正行母









わが國の慈善事業

富人の、いたく、貧者を賤むものあり。彼は、貧者に話しかけらるゝを耻ぢ、挨拶せらるゝを耻ぢ、同じ道を行くをだに快しとせざるなり。畢竟、彼は、彼の貧者を友とせば、世人は、われを如何にか言ふらむと、たゞ、その毀譽のおそろしさに、之を耻ぢ、之を避くるに過ぎざるなり。また、他意あるにあらず、といふ。吾人は、もし、實際に、斯かる富人ありと聞かむも、たゞ、その小心をわらふのみにて已まむ。

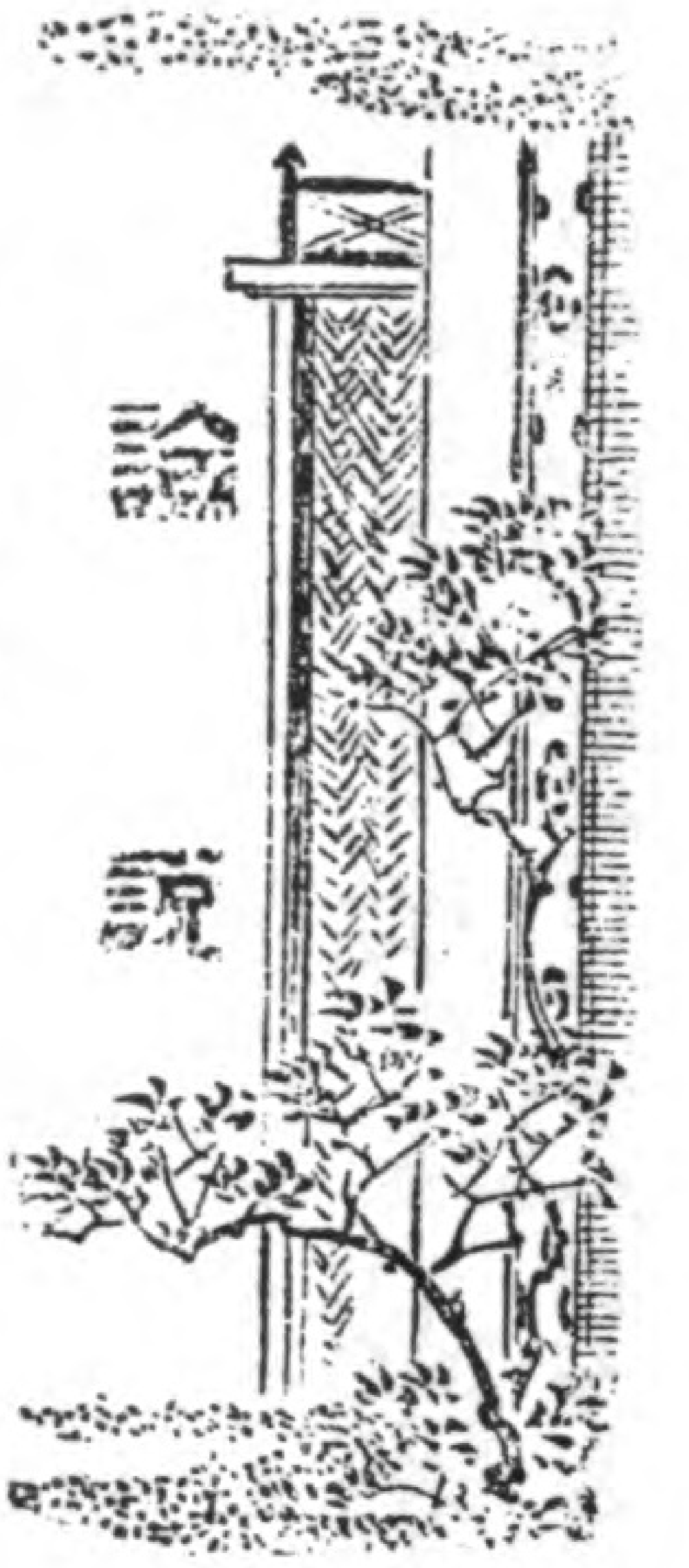
もし、かゝる富人の、なほ、貧者の善行を敢へてするを快からず思ひ、一切の善行を廢せむとするものあらば如何。豈に、其の愚を笑ふのみにて可ならむや。之を警醒し、之を反省せしめざるべからざるべし。

之を譬へて斯く言へば、殆ど、實際に在り得べからざるが如く然りといへども、

わが國に於ける慈善事業の如きは、全く、この譬喩と其の帆を同じうするにはあらざるか。勞働者に對する計畫、貧民のために企てらるゝ事業、孤兒不具者を救濟する方法等、彼の耶蘇敎徒、佛敎者の外に、絶へて、意を用ゐるあることを聞かざるは如何なればぞ。要するに、彼の佛耶兩敎徒が各々慈悲博愛は我が敎にのみ存せりと、方便のために、常に誇言するを聞くを厭ひて、遂には、全く其等の事業に、手を下すことを避くるに至りたるものにあらずや。

由來、わが國の人は、全く勞働者に對して、同情を缺きたるか。衣食住に窮せる人々に對して、少しも顧みる所なかりしか。又、彼の養はるべき人を失ひたる孤兒について、信切を盡さゞりしか。

東方君子國の名譽を擔へる國民に對して、吾人は、今更に國史を繙きて、一々實例を示すの煩を爲ざるべし。たゞ、慈悲博愛の好名を以つて、彼の憐むべき人々を、自己の宗旨に誘拐し去るところの、所謂慈善家にのみ慈善事業を委するが如きは、わが國の不面目なるのみならず、國家將來のために甚だ憂ふべきことなるを警告せざるを得ざるなり。



婦人の早衰（八）

三輪田眞佐子

偉人西郷南洲は、佐藤一齋翁の著なる言志錄中より、自ら、坐右の箴とすべきもの百數十字を抜き、書して、以て、朝な夕な熟讀玩味せしとかや。凡そ、一世に名あるものゝ、志すところを見るべきなり。これを以て、苟も、讀者にして、良妻賢母の實を擧げんとあらば、つねに、最も、適切なる女訓を左右に置き、家事の說あるごとに、幾千度となく、繰返し〳〵讀むべし。されば、精神の早衰する患を免るべし。孔夫子は、韋編三たびたつばかり、易經を讀みたまひしかど、なほ、數年の月日ありて、それを味ひしならば、大なる過はなかるべきかと歎かせ給ひけり。

然るに、世人は、學校を出でゝ、家事のまに〳〵、終身讀書して、精神の修養をつとむるもの少きは、遺憾ならずや。なほ、讀書は、聖賢の書に限らず、時々發行の、有益なる雜誌類を讀むことも必要なり。雜誌は、時勢と事變につれて、人を啓發するものなれば、つねに、身邊を離れしめざるべし。されば、絶えず、女訓と女智との兩者に欠乏することなくして、精神の早衰を免るゝを得ん。如何となれば、精神の食物は、讀書になればなり。

惜哉、雜誌を、永く續きて見る婦人は、極めて、稀にして、兩三ヶ月若しくは、半年一年ばかり見る女子は、就中、勉强家に屬するがごとし。彼の、稍々年長の婦人にて、雜誌などに親むものゝ殆どな

し。故に、雑誌は、概ね、女學生の鬱を散ずる具となりて、主婦の友とならざるものといふべし。おもふに、女學生は、日々、學科の課程あるを以て、雑誌などを見ざるも妨なしといへども、精神の修養に機會乏しき一家の主婦たるものは、必ず、雑誌などを見て、婦人の天職を老と共に、全ふすべき必要あり。

若し、老に向ふ婦人にても、つねに、新刊雑誌、又は、著作を手にするを怠らざれば、決して、若年者より、侮を受くることなかるべし。如何となれば、老者は、たとひ、老衰して事に堪へざるも、過去に積みし徳行は、衆を御するに足るのみならず、道徳の順序よりも、老年長者を尊敬するは、年少者の分なり。所謂、長幼序ありてこそ、社會の秩序正しくなるなれ。況んや、年長者は、比較上、多くの年月間に集めし、少からざる經驗を有するを以て、後進者の企て及ばざる實力あるべし。既に、老者は、かゝる上位を占むるを以て、この上、更に、研學の方法にて、新智識を吸收するものとせんか。道理上、高位に居るのみならず、智識上にも、高度に居るものといふべし。中務卿宗良親王の御歌に、

　杣山やしげきいばらのなかを見よ
　　老木は人のひかぬものかは

とあり。實に、人は、如何ばかり、高齢とならんも、一家に於ても、國家に於ても、老人の必要大なり。それは、過去の經歴と餘德と、及び若輩より尊敬せらるべき位置を有すればなり。さればにや、一家に老人なくば、その家風亂れ、一郷に老人なくば、その郷風齊はざるべし。故に、目的こそ異なれ、社會に、老人の必要なるは、恰も、少年の必要あるがごとし。偏廢すべからず。されば、老

人は、たとひ、精神早衰するも、棄つべきにあらず。されども、早衰せざるは、良の良なるをいふなり。

女子の學問（一）

岸田松一郎

近來、女子教育の隆盛に赴き、教育機關日に月に備はるに隨ひ、世人の、之を喜ぶものと、又、之を憂ふるものとの、二派あるが如し。教育の道の、年と共に勃興するは、昭代の慶事として、大白を擧ぐるは、萬口一致と思ひきや。窃かに、之を憂ふるものありと聞く。豈に、咄々怪事と謂はざるべけんや。然り、洵に、怪訝の事に屬す。然れども、世に、此の聲を聞くを如何にせん。

客あり。來つて、弊廬を過ぎり、談、教育の事に及ぶ。曰く、近來、女子教育の道益々開け、洛陽の紙價之が爲めに昂騰し、帝都の學舍之が爲めに充溢して、入學競爭の試驗、今、適さに、女子の腦漿を搾集するの時期酣なり。嗚呼、東洋の盟主たる我國にして、奈何ぞ、無學の女子を容るゝの地あらむ。噫、是、我が國光の八表に輝き、郁々たる文華の瑞祥として慶し、且、賀せざるべけんやと。昂聲壯語して去る。

旁午にして、更に入り來れる客あり。鬚髪稍霜を帶び、風貌沈重にして音吐輕からず、寡言端壯にして禮あり。時令既に了るや、先づ問ふに、前客の氏名を以てす。余、答ふるに、舊知にして泰西の學に通じ、將に、大に、世道に裨する所あらむとするを以てせり。客、一咳して、襟を正して曰く、前者の、所謂、女子教育の隆盛、果して、之を賀すべきか。將た、之を憂ふべきか。余は、未だ、

之を慶すべきを知らざるなり。今の、所謂女子教育なるもの、果して、眞正の教育なるか。將亦、智識の傳授なるか。余に、二人の娘あり。一人は既に、學校の教を卒へたるを以て、今、適さに、婚を求めんとす。然るに、學校にありて學びたるの結果は、普通智識の備はりたるが爲め、婚嫁を求むるに、種々の希望を懸くること高く、而して實際の家事に當りて、無智無識の老婦に及ばず。勤儉敬讓の德に至りては、遙かに、姑嫜の下風に立たざるべからず。故に、既得の事を、人に傳ふるの器械たるに足るを得んも、妻となり、嫁女となりて、婦人の天職を盡さしめんこと、甚だ、疑はしきものなり。今や、第二女も、亦、前轍を蹈襲して、高等の教育を受くるに熱中し、春陽駘蕩の時に際り、閑窓に閑居して、只管、地理歷史の諳誦に耽り、又、讀書算術に腦漿を注ぎて、受驗の準備に忙殺せられんとす。嗚呼、夫、試驗の競爭に勝ち得て、數年の螢雪を積み、卒業の證書を受得して、頑冥無智と呼ばるゝ老媼に及ばざることあらば、豈に、亦、教育の價値を見出するを得んやと。言終て、慨然たるもの之を久うせり。

余は、二客の言を聞き、全然、後者に左袒するものにあらずと雖ども、世間、此の種の異論を耳にすること屢なるを以て、大に、諸嬢の警戒せられんことを希望して止まざるものなり。

抑、學問の弊は、男女を論ぜず、古今を問はず、輙もすれば、陷り易きものなることを忘るべからず。孔子は、數千年の昔にありて、專ら、實學を唱導し、實地に益なきものは、學問にあらずと謂れたり。即ち、未だ學ばずといふと雖ども、予は、之を學びたりといはむとは、實際の用に適するを以て、主とせるに非ずして何ぞや。星移り物變り

て、孔子を學ぶの徒も、遂に、世道人心を益するを思はず、偏へに、意を詞藻の間に馳せ、或は、進士及第の資料となすに至れり。然れども、其の間、二程陽明等の如きもの出で丶、專ら、終身治國の實學を闡明して、大に廻瀾の力を致し丶と雖ども、遂に、陵夷衰頽して、今日の現況を呈するに至れり。我が朝にありても、古來、世道人心を益せしもの、一として、學に依らざるものあらじ王朝時代の文學に於ける、鎌倉時代の佛學に於ける。德川初世の儒佛に於ける、皆、是、天下國家を治め、一家一身を律するもの、之に資らざるはなし。彼の徂徠、春臺の經世に資する、藤樹、仁齋等の德教に於ける、眞淵、宣長、篤胤等の皇室尊崇に於ける、山陽、松陰等の尊王開國の思想に於ける、一として、學問の功によらざるはなし。然れども、此の間、亦、區々として章句の詮索に一生を送り、孜々として、靈辭の解釋に生涯を終りしもの少からず。此等は、所謂、迂儒と呼ばれ井蛙と嗤はる丶の蠹蟲に過ぎざりしが故に、敢て齒牙に掛くに足らずと雖ども、要は、只、古今の別なく、學弊あることを證するに足れり。歐米の學と雖、亦、全く、實學を以て誇稱するに足らざるものあり。然れども、專ら、之を實驗に徵し、實用に用ゐて、其の當否得失を甄別するが故に、月鼈の差を生ずるに至らず。彼のカントが疑問は智識を開くの階梯なりと謂れたるを以ても、人世の實事に遭逢し、天然の現象に逢着して、疑問を氷釋し、實地に應用して、造化の妙用定理を案出せしことを知るに足れり。其の他、フランクリンの電氣に於ける、ニユートンの重力發見に於ける、ワットの蒸氣發明に於ける、コロンバスの大地探見に於ける、一として、怪訝より、實業に進

人せざるものなし。是を以て、之を觀れば、古今東西、皆、均しく、學問を以て、活世界を渡るの好伴侶となさゞるなく、亦、之を以て、處世の具となさゞるなきこと明かなり。然るに、學問の道他岐に渉り、其の種類の多きがために、專心一意、學問の奴隷となり、書籍の僕婢となりて、數多の歲月を糜し、既定の時期に到着して、卒業の證書を得れば、乃ち、之を以て、社會を渡るの能事了れりとなすが如きは、大なる謬見と謂はざる可からず。是、所謂、迂儒蠢蟲の爲を學ぶものにして、學問の弊竇、此にありと思惟せざるべからず。蓋、人の學問する所以のものは、己より勝りたる智識を得、我より優れたる人の德行を學びて、自己の生涯に於ける參考となし、之に、多年の經驗を加へて、又、之を後人に傳授せんがために外ならず。然らば、則ち、書籍にのみ眼を晒すを以て、學問といふべからず。講義演說を聞くのみを以て、智識得たりと謂ふべからず。凡そ、耳に聽き、目に觸るゝものにして、自己の參考となるべきものは、皆、是、實學とならざるなし。故に、大家博士の著書を讀み、亦、其の講演を聽くを以て、學問とのみ思ふべからず。古老の談話、口碑を以て、陳腐とのみ考ふべからず。同輩同儕の知る所を以て、學ぶに足らずとなすべからず。古人も、三人行へば必ず我師ありといへり。然るに、自己の、直接に傳授せられたることを以て、無上の智識となし、學問の終局目的の、實用にあることを遺るゝ時は、即ち、前陳、老客の慨嘆悲聲を發せしめ、遂に、自己の眞價を失墜するのみならず、併せて、學問其の者をして、寃枉に泣かしむるに至る所以なり。

川崎先生に呈して婦道の一端を論ずる書（結）

永潜生

第四　婚姻の事

婚姻は、實に、人生の始めにして、至重の大儀に候へ者、御高説の如く、志想未だ確固たらざる青年男女の、敢て、之を和すべきものにては無之、父母の手に待つべきは、吾邦に於ける、一つの良き風習と存候。去れど、哀かな。此の良風も、一面に於ては、非常に忌むべき弊害を流し居らずやと存候。双方共に、只だ、一片の所謂媒人口なるものを信じて、僅かなる時日を費やして、匆匆に聽合をなし、やがて、嘗て見もしらぬ者が、互に相逢うて、百年の心事を委ねばならぬ様に相成候事故、其の危險あることは、實に、想像の外にして、吾邦に於て、離婚の多く行はる丶も、畢竟するに、半ば、此の制度の罪にはあらずやと存候如斯き制度によりて成れる夫婦にして、眞に、意氣相投じ、琴瑟和合の樂を完全にせらる丶人すらも幸運と申すより、寧ろ、僥倖と申すべく、之を、己れの親戚知人に求むるも、如斯きは、果たして幾人か候べき。甚だしきに至つては、去ることの不面目ある爲めに、涙を飲んで之に随ひ、否らざれば、子供が出來し爲め、止むなく之れに繋がる丶など、見るもいたましきもの尠なからずと存候。如斯き冷かなる夫婦によりて、いかで、春風の如き長閑かなる家庭を造くれ申べき。又た、如斯き憂鬱なる家庭の裡に、いかで、強健なる第二の國民の生ひ立ち申すべき。固より、花月には、風雲の伴ふあり、何事も、理想通りに行かぬは世の常とは云へ、去りとは、また、餘りに甚しう

候はずや。殊に、男子に寛にして、女子に酷なる從來の風習は、一段、破鏡の不幸を見んか。男子に於ては、深く之を咎めざるにも關らず、女子にありては、之を以て一生磨滅すべからざる汚耻となす。婦人の位地も、亦、愍むべきものには候はずや。小生は、敢て、自由結婚を主張する者にはあらざれども、今後の父母尊長たらむ者は、宜しく、意を用ゐて、好き機會を失はざる樣、例へば數多の靑年子女の集合する會あらば、母は、親から、娘を引き具して、之れに臨み、また、己れの家に客を招くことあらば、娘をも其の席に侍らし、或は、諸共に花の莚に、歌の會を催するも面白かるべく、月の宴に、琴の調をかなづるもよかるべし。凡そ、是等のよき折を見計らひて、其の間に、純潔なる交際をなさしめなば、男は女を、女は男を、互に、相識り相信じて、自然、其の間に、高尙なる欽慕の情も起るべく、兩親も、亦、徐ろに、其の間に立ちて、兩者の性行、如何を察し、事を計りなば、珪の樣なる美はしき家庭を造ることも、決して、難からずと存候。加之、斯樣なる交際を致し候事は、啻に、結婚の媒をなすのみにあらずして、相互に、他性の心を理解し、人情の機微を察することも出來、向後、處世の上に於て、莫大なる利益を與へらるゝものと存候。徒らに、子を大切にするの餘り、深窓の裡にのみ籠らしめ、箱入に致置候事は、智識の門なる耳目を塞ぎ候と同樣にて、決して、眞に、子を愛する次第にては無之事と存候。勿論、右樣なることは、吾邦、現時の有樣にては、迚も、急に決行する譯にも參り申間敷とは存候へ共、斯く申居候のみにては、果して、いつの日にか、行はれ申すべきや。小生は、今より、心ある父母、少なくとも、現時の

教育を受けられし人々の、將來、自ら、父母となられし日には、是非共、右樣の傾きを以て、其の子女を指導せられんことを切望して止まざる者に御座候。よし、又、一歩を讓りて、從前の例に倣ひ、ひとへに、父母の撰擇に任ずることゝ致候にもせよ、父母たる者は、之に對して、是非ある注意を要すべきことゝ存候。現今の通弊として、其の選擇の標準となるべきものは、第一資産なり、第二門地なり。而て、最も重んずべき、本人の性格如何の如きは、却つて、第三位にあるが如きは、冠履轉倒も亦、甚しきものかと存候。成る程、門閥も大切なり、資産も無かるべからざるものには候へ共、若し、其の本人の性行にして、とても、濕たかき家庭を造ること出來ざるものとせば、是等のものは、果して、何の甲斐か候べき。其の富も、其の位も、偶ま以て、身を責むるの道具に過ぎずと存候。若し、父母たる者の輕擧よりして、無垢花の如き乙女をして、終生告ぐる所なく、訴ふ地なき不幸の淵に沈め候樣のことあらば、慈親の名の下に、惡魔の行ひを爲すと申しても、宜敷事と存候、殊に、女子に對する注意は母たる者の責任に有之べき事と存候につき、此の點は、呉れ〴〵も、中編に於て御啓示被成下樣奉願の至に存候。

以上は、眞に、半文の値なき愚論と存候へ共、平常の孤懷、誰れに愬ふる所も御座なく、敢て、尊威を冒瀆して、一書を左右に呈せし次第に御座候。幸に、御垂教を忝ふするを得ば、望外の幸に存候。尚、盡せぬ無禮の段は、近日參趨、重々、御詫び可申上候。頓首。

四月初旬　潜

重陽先生　台下



御坤徳

西澤之助

今日は、申すも畏き　皇后陛下の御誕生あそばされました、御目出度き日で、彼の、天長の御大節と共に、吾人臣民は、滿腔の誠心を捧げて祝奉るべき地久の佳節で御座りますから、本校に於いても、かく奉祝の式典を擧ぐる次第であります。

皇后陛下には嘉永三年の、即ち、五月廿八日に御誕生遊ばされましたから、本年までに、五十一年の春秋を御重ね遊ばされました。御父君は、故從一位一條忠香卿にて、その第三女でいらせられます。御名は、美子と申奉り、明治元年十二月二十八日、女御にて御入内、時に、從三位であらせられましたが、その日に、直に、皇后に御立ち遊ばされました。これは、十九歳の御時でいらせられます。

御坤徳についての委細の御事は、もとより、吾人の伺知ることを、得ざる御儀では御座りますが、御聰明にて、學の道にすぐれさせ玉ひ、靜淑温良の御徳を備へさせ玉ひ、わけて、仁慈の御心深くあらせらるゝ御事は、万民の、夙に、洩承りて畏み仰ぎ奉るところで御座ります。

明治六年、宮城御炎上の後、紀州家の私第を、しばしの皇居とさせ玉ひし時の御事で御座りました。

皇太后の宮の座しまさせ玉へる御わたりのみは、

さすがに奇麗で堅固で御座りましたけれども、兩陛下の御座します御所は、雨降るごとに、それ盥よ、それ桶よと、近う仕へ奉れる人々は、高津宮の古へありとも、斯くまでにはと畏さに、涙をおとす方も御座りましたさうですが、兩陛下には、一向、事とも思召さなかつたと申すことで御座ります。

この時、皇后陛下には、八疊の一間を、常の御座所と遊ばされ、入側と申す、端近き所を圍うて、御假裝の間に遊ばされたさうで御座りますが、御髪上の女官の參りまする時には、明障子に、ひたと御寄添遊ばしていらせられましたさうで御座ります。御側の女官達も、あまりの御不自由を心憂きことに思ひまして、折々、畏多きことなりとつぶやき合ふのを御聞き遊ばされて、

世の諺にも、岩の上にも三年といふこともあるのに、言甲斐なきことよ。みづからは、不德ながら、國母と仰がれ、常は、玉の臺にありながらも、賤が伏屋を見る度に、如何ばかりぞと、心苦しう思ひやらるゝに、

と仰せられて、御料紙召させられて、

こゝにわが占めしむしろは狹くとも
ひろくたづねむ文のはやしを

と遊ばされましたので、御心の忝さに、この後は、こゞとがましきことも聞えぬやうになりましたと申することで御座ります。

また、嘗て、天皇陛下の御靴を御みがき遊ばされたと申すことも承つて居ります。この御事のみを以つても、御坤德の例類なき御事が恐察せられます。然ばかり尊き御身にて、斯る事をも御手づから遊ばさるゝことは、まことに、ありがたき御心掛と、畏さに涙もこぼれます。是は、正しく、

世の人の妻たるものに、儀表を御示し遊ばされたもので、天下万衆、いづれも、この御心を以つて心といたさなければならぬ事で御座ります。毎年、女官を督して、御手づから、蠶を御養ひ遊ばさる由に御座りますが、太古、雄略天皇の后宮の、御養蠶遊ばされましてから以來、多く聞き奉らぬ、御事で御座ります。

勤儉は、誰も誰も、守らねばならぬことで御座いますが、とりわけ、婦人は、よくこの事に注意すべきことで御座ります。彼の仮宮におはしましゝ頃の御事、また、この御養蠶の御事等を、朝夕、尊き亀鑑と仰ぎ奉りて、瞬間も、反省を怠つてはなりませぬ。

また、一周の中、たいてい二回に、十首づゝの御歌を御詠み遊ばされて、御歌所長の高崎正風子の許に御下げ遊ばさるゝといふ御事を承りました。學の道に深くおはさるゝ御事は、夙に、仰ぎ奉るところで御座りますが、猶、斯の道に御心づくしの一方ならぬ御ことを伺ひ奉りては、學校に通學しつゝある人は勿論のことで御座りませう。斯く、教養の任にあたつて居るものには、殊に、ありがたく感ぜられます。彼の華族女學校も、即ち、　皇后陛下の御思召によつて、建てられたと申すことで御座ります。

西南の役にも、征清の役にも、畏多くも、御手づから、繃帶綿撒絲等を御製り遊ばして賜はりました。また、手足を失へる者には、義手義足を賜はりました。

征清の役には、わざ〳〵、廣島なる野戰病院に行啓遊ばされ、病室を一々御見廻遊ばし、病床について、患者を御慰撫なされました。士官以上の患者には、一々、姓名傷病、および、治療の經過等

の御下問が御座りまして、早く其の快癒を圖るべしとの御詞を下されましたさうでござります。其の時、捕虜の患者にまでも、

療養を怠らずして、平癒の上、故國に歸ることを心掛けよ。

との御令旨を賜はりましたので、敵國のものも、其の御慈德の廣く厚き御事を畏みて、感涙を禁めかねたと申すことで御座ります。

同じ頃、赤十字社病院にも行啓遊ばされましたが、一傷兵、まづ、おきなほりて、敬意を捧げ奉らむといたしましたのを、御手づから、その肩をおさへ御止め遊ばされ、

よく盡してくれた

との御詞を賜はりましたので、これを伺つた總べてのものは、かたじけなさに、顔をおぐることさへ出來なかつたと申すことで御座ります。

度々、慈惠病院などへ行啓遊ばされますが、院中の嬰兒に、御菓子玩具を下されますのは、度々のことで御座りますさうです。

四方の海みなはらからとむつみなば
世になみかぜはおらじとぞ思ふ

の御詠を拜し奉りてもいかに四方民庶のこと大御心にかけさせ玉ふかは、恐察するにあまりあります。

右申しました他に、國民をいつくしみおはれませ玉ふ御心づくしの數々、吾人の承りおよんだところでも、また、數多御座ります。

抑も、わが國の皇室は、日本帝國の大宗家にましまし、天皇皇后の御二所は、國民の大父母と大御座して、世々の臣民をば、皆、赤子として御愛撫遊ばされました。で御座りますから、御代々、いづれも、仁慈の御德を備へさせ玉はぬは御座りま

せぬが、猶、この聖代に生れあひて、御高德たとへむ方もなき天皇陛下皇后陛下を戴き奉りて、ここに、大日本帝國國民たるの光榮を擔へる吾人臣民の幸福は、實に、この上もないことで御座ります。

今日は、地久の佳節で御座りまするのに、皇孫殿下も、今日、初の御參内が御座ります由承りました。實に、とりあつめて、御目出度き日で御座ります。

皇后陛下には、皇孫と御對顔遊ばして、例の臣民を子愛せさせ玉ふ大御心に、いかばかり愛らしと御思召さるゝことで御座りませう。皇孫殿下にもこれより、皇后陛下の厚き御覆育の下に、すくすくと御成長あそばされ、共に、千代八千代を御重ね遊ばさるゝ御事で御座りませう。吾人臣民は、この佳節にあたり、滿腔の誠心をさゝげて祝意を表し奉り、謹みて、御代の萬歳を祈り奉ります。

（五月廿八日日本女學校にて）



家　政

仕付方

赤堀又次郎寄贈

廿一　御かんきんの事

人の、御かんきんなどゝて、久しく待たせたまへること、あるまじき御事にて候。たゞ、いかにも、さゝやかに爲なさせ給へ。日ごとの所作などは、あさらくにして、なべて、女房、家あるにしてもみやづかひにても、くわんおんきやう五くわんせうさひしふ七へんばかりぞ、よかるべきと申しは

べりき。

廿二　御ものねたみの事

女房の、物をねたむこと、あるまじく候。さゝしきわざと言傳へ侍り。されど、あまりに、うらむべきふし〴〵をも思ひ知らで、男に、人ありとも思はれぬなん、口惜しきわざなるべきか。又、男も、あまりに、さう〴〵しく思ふわざあり。たゞ、いかほども、深う思入れて、色にいださで、したもえに思ふをや、ほんにすべきと見え侍り。さても、かの、たつた山夜半にや君がと言ひけんも、いみじう、やさしう、おぼえ侍り。世の中にある人、物をいたう妬みて、朝夕、なきくるひして、かほのおきどころなく、見苦しうあら〳〵しく、おめきさけび罵ること、あさましきわざになむ。それは、いかに、いとほしき女房なりとも、見る目すさまじうありもてゆきて、まなこにかどをたて、

こゑたから、はて〳〵は、のろひごとなど言ひたらむは、うとましく惡くなりて、たちかへり見むと思ふ、つたなりや。また、やう〳〵に、いひしかりとゞめておきたりとも、男のこゝろには、あな、をそろし。

さても、このさがなきものなかましかば、かしこに、ゆかましなど思ひて、ほかに眼をつけて、物おもはしげにて、大息をつきて、ものをもいはで、とかく、いひなやむを、うしとおもひ居たらむは口惜しさ如何ばかりぞ。さりげなくて、しづかに、物おもはしげならましかば、さすがに、をとこなども、木石ならずば、などか、あはれと思はざらむ。彼の紫の上、女三の宮のわたり、物したまふ比、御手ならびの双紙に、

　身にちかく秋やきぬらむめのまへに
　青葉の山もうつろひにけり

源氏、わたりものしたまへば、御硯の下に、おしいれさせ玉へるを、ひきよせて御覧じて、

源氏、

水鳥のあをばは色もかはらぬに
　　はぎの下葉ぞけしきことなる

かのわたりそめ玉へるあかつきなどのかへるさにも、御ひとへの袖を、いたう泣きぬらし玉へるを、ひとゞ、ひきかくさせ玉へるなむ、いみじう、あはれに思ひたまへるゝ。かようにてぞ、思知るゝふし〴〵は見えまほしき。さても、をとこも、よなことの夜かれしと、さすがに、おもひおこせて、いかに、から、われはめづらしき人ぞ。うちとけあそぶをうらめしと思ひおこすらむなど、さすが、心にかゝり侍らむぞ、女の御ため面目あるべき。

婚禮色直し式（承前）

有住常子

色直しの日限

三日目になすが本式なれども、當時は、皆、其の日の中になすなり。古昔は、三日目、五日目に、露顯とて、舅姑、及親屬ども打より、樂をあぐる事の順序ありしなれど、これは、時に順ひてなすべきなり。

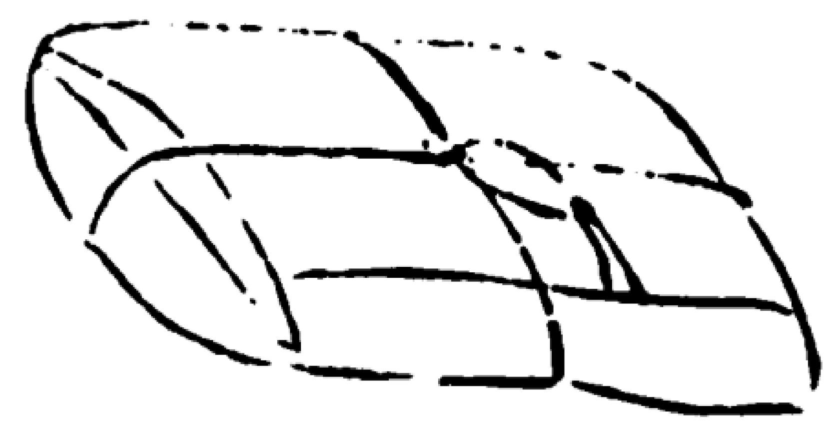
婚禮の翌日の事

翌日嫁の里方へ、局方より、耳拾の祝儀とて、大角赤（盃の名）へ、耳拾を紅粉二筋ひきて、おくる事ありしなり。これにならひて、里方へ送り物あるべし。又、婿より、神供及食膳のもの一通りは、酒肴をそへて送るべし。

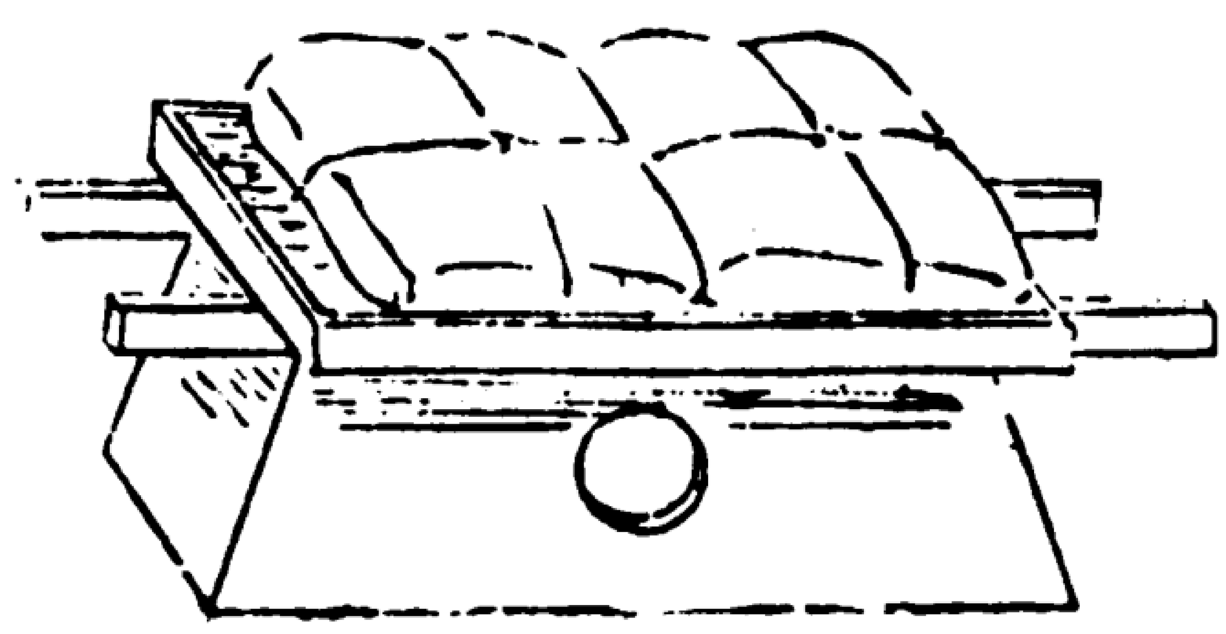
三日目色直し、又は、其の日に色を直す時も、三

日目に當りて、皆、子餅の取かはせといふ事をすべし。餅のかずは、五百八十にて、丸形二百九十、隋圓形二百九十なり。餅は叺へ入れて、其の上に、赤粉包白粉包をそへて、又、酒樽をそへ、肴をもそへて送るべし。

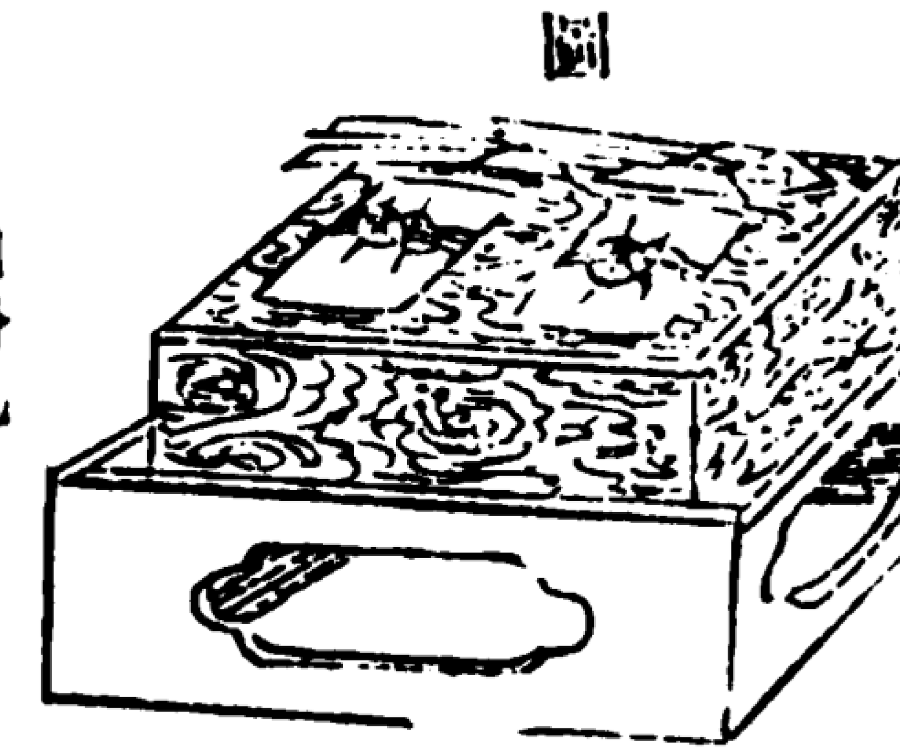
叺の略圖



叺臺につめる圖



皆子餅重箱に入する圖



本式は、右の如く、叺に入て送れども、略式には、折櫃か、重箱に入れて、其の上に、赤粉白粉を包みて、そへて、熨斗鮑をも包みてそへて、送りてもよろし。

當時は、簡便を主とすれば、大方、これにならひてもよきなり。

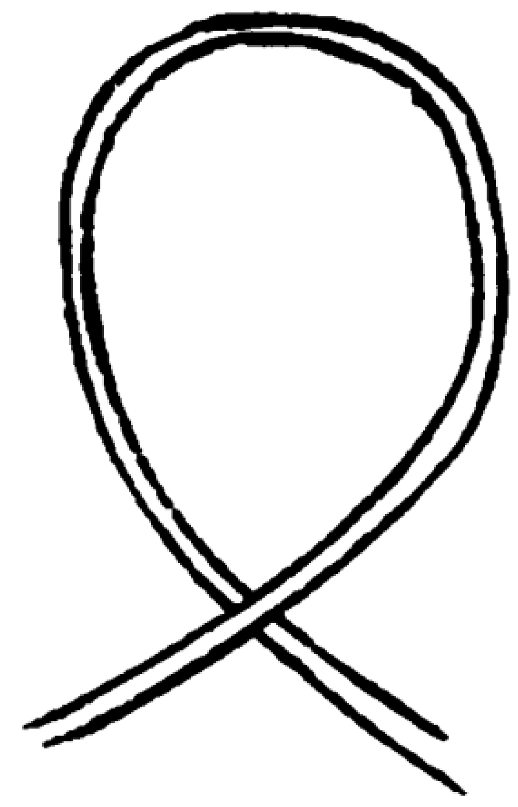


上巻結び

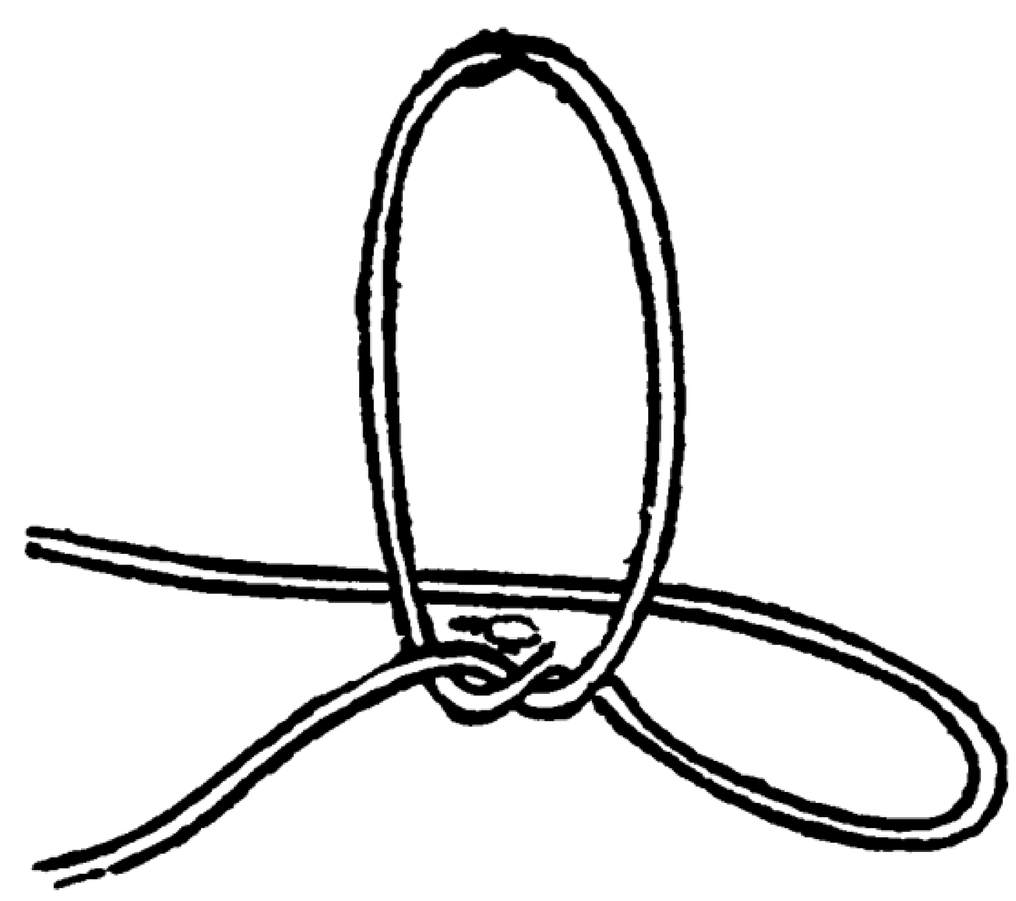
(四) 同一種人形第二圖

石井泰次郎

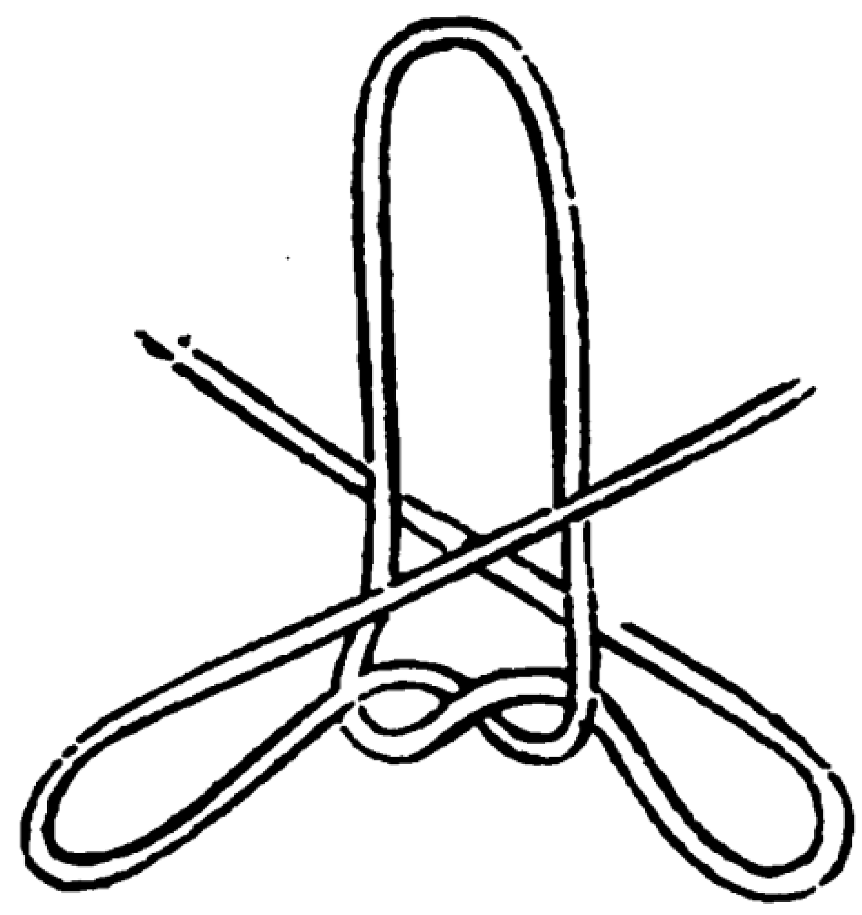
同一種第一圖



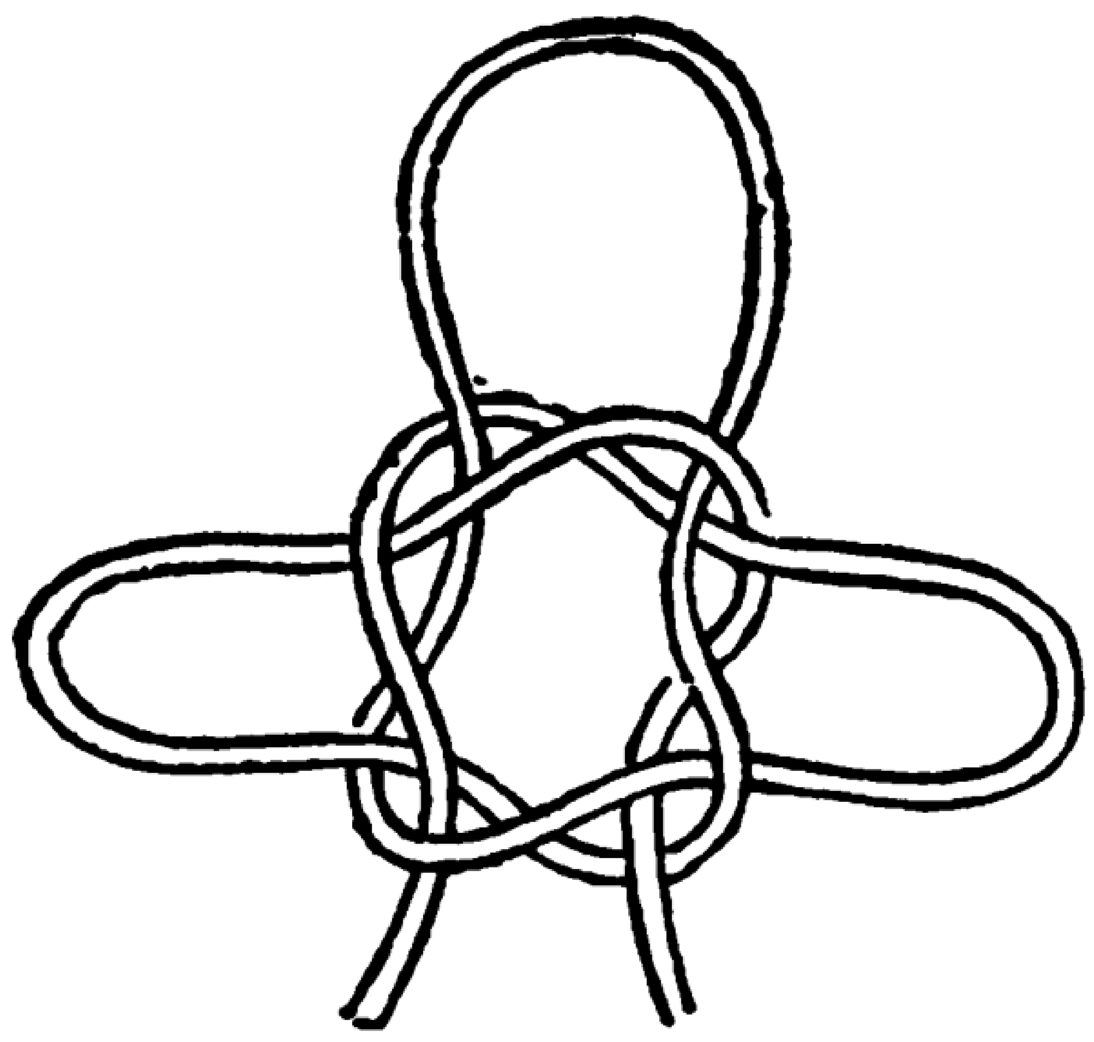
第二圖



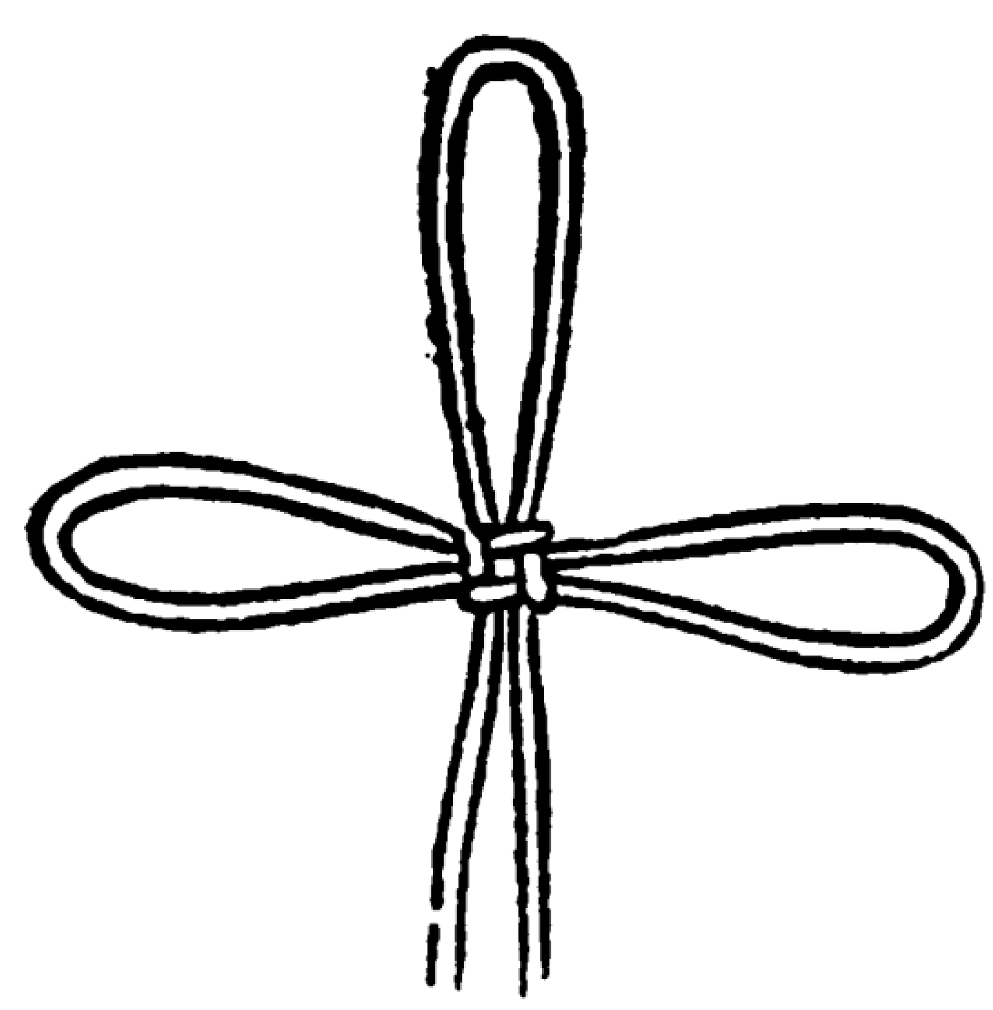
第三圖



第四圖



第五圖



たちぬひ

羽子板をしゑ

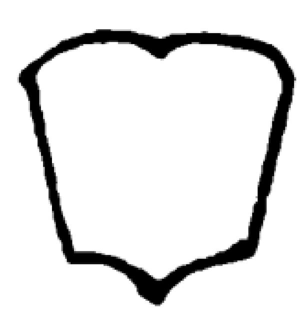
西山たひ子

寶船 (をはり)

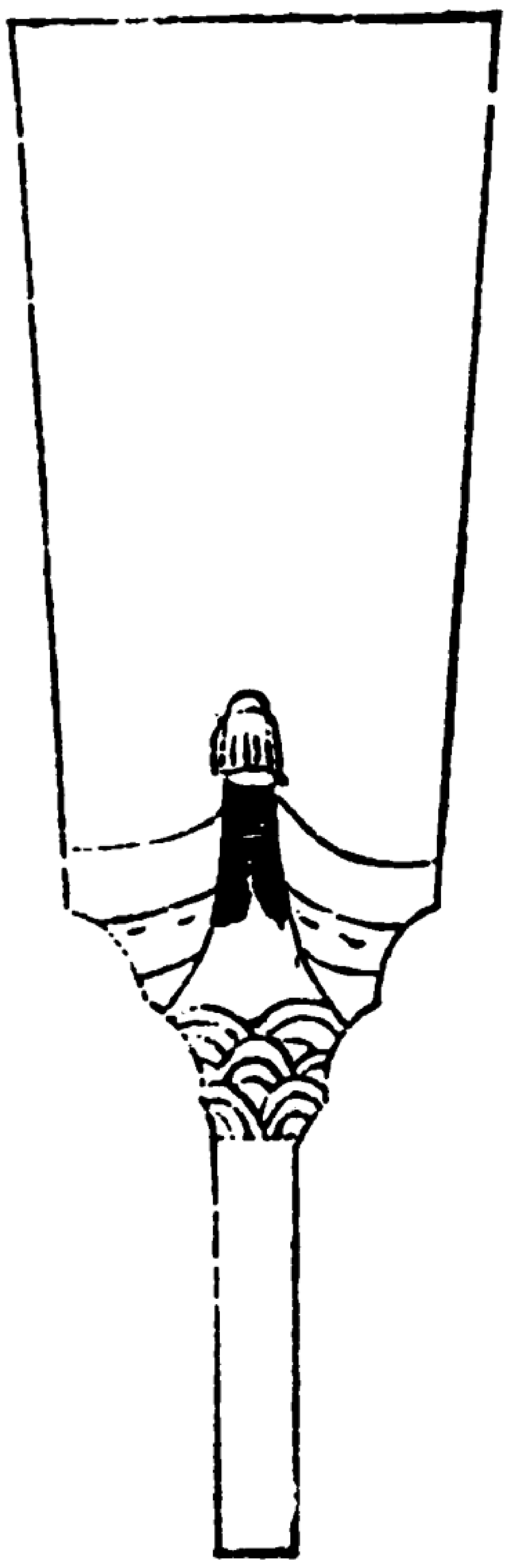
帆及び出來上り

帆は、羽子板の大きさに合せて、同じ大きさに切

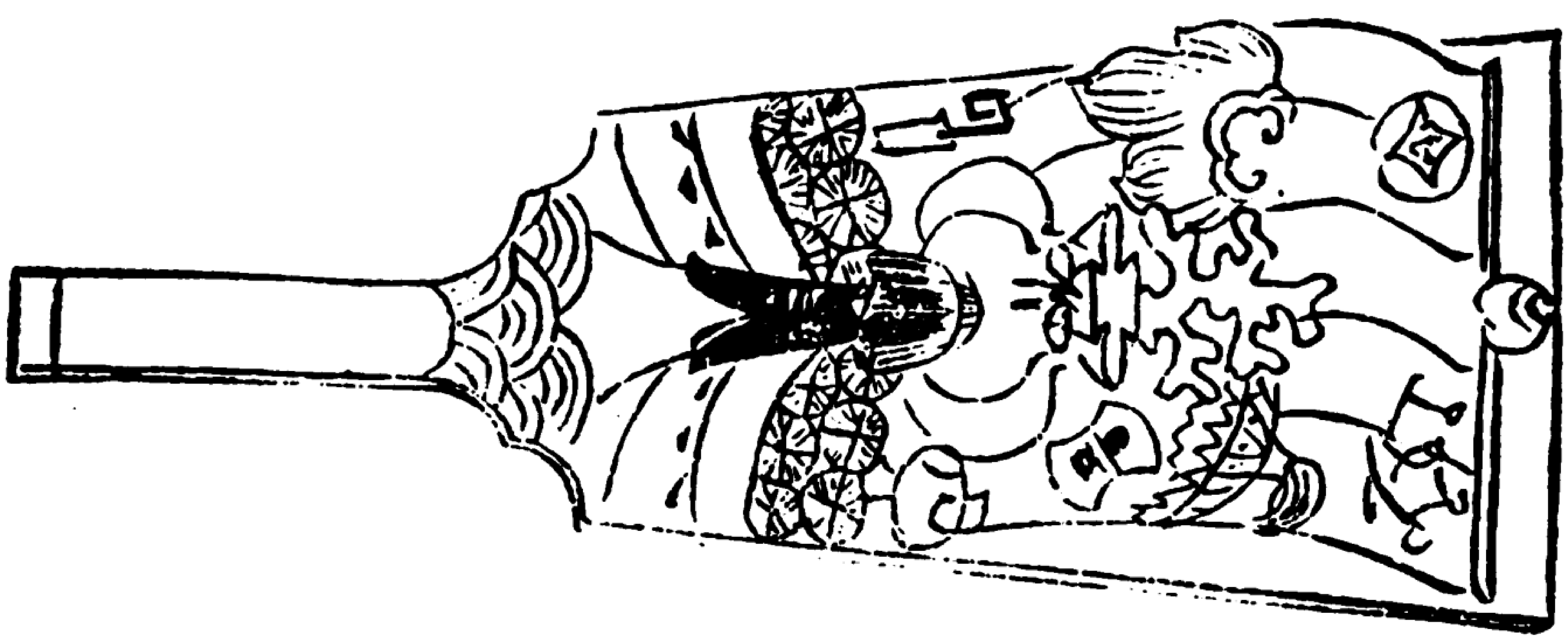
り、之に赤、桃色、青等の好みの色の繻子をはりつけ、上の方、羽子板より二三分下げてたる所に、まづ、上の方を鋲もてうちつけ、下、二寸三四分上りたる所までに、たるませ、即ち、帆を羽子板よりうかせて、其の上、柄の方に俵をのせて、まづ、左右を鋲もてうちとめ、その上、柄の方に船をのせ、之も、左右を鋲もてうちとめ、又柄の方に、其の柄に合せ、かやうの形に厚紙を＊



＊切り、綿を入れ、水色ちりめんの如きをはりつけ、浪を畫がきたるものを、その船の柱の下の方をおさへて、左右を鋲にて打ちとめ、帆の上に寶をはりつくるべし。圖を見て推し玉へかし。



寶船羽子板出來上りの圖



だいどころ

白雪苺

いちごの、能熟したるものを、一斤程とりて、能く洗ひ、蔕を去り、器にいれて、上よりおしつぶし、どろ〳〵になりたるとき、鶏卵三個の白身と、砂糖一斤、牛乳の煮冷したるもの五勺程いれて、これを、氷にて冷しながら、能く、かきまぜるときは、白き泡となりて、かたくなるものなり。これを、白雪いちごといふ。美味なり。

菓子苺

メリケン粉、壹合程の中へ、鶏卵七個と、牛乳壹合、バタ一匙、ソーダ少量を加へ、能く混せ合せ其の中へ、苺一斤、砂糖、能程に加へ、焼鍋にて焼くときは、味よき菓子は出來るなり。

つくも煮

茄子の皮を去り、横に二つにきり、又、たてに壹分角程にきり、鰹節汁と、味淋の煮きりにて、能程に煮て、家鴨、牛肉、鶏肉の内、壹品を、こまかくきり、醤油にて、八分通り火をとほし、此の汁を、茄子の中へ放れ、肉を一面にのせ、汁の味を、甘からくして、鶏卵を、別の器に割り、よくかきまぜ、肉の上にかけ、蓋をなし、半熟になりたる頃、鍋をおろし、器に盛りおろしゆずをかけて、供すべし。

葛焼餅

吉野葛一升、水一升、砂糖一斤の、割合にて、先づ葛と砂糖とを器に、いれ水をだん〳〵にいれ、粒のなき様にかきまはしながら、こねたるものを、能程にまるめ、平たくして、鍋に胡麻の油をひき焼くときは、ジリ〳〵と、裏表より、打返し〳〵やくなり。



國文學講義

紫式部日記講義（十五）

井上賴文

その夜さり、御まへにまゐりたれば、月をかしきほどにて、はしに、みすのしたより、ものすそなど、ほころびいづる、ほど〱に、こ少將の君、大納言の君など、さふらひ給ふ。御ひとりに、ひとひの、たきものとうで〵、こゝろみさせ給ふ。御まへのありさまのをかしさ、「つたの色の、心もとなき」など、くち〲きこえさするに、れいよりも、なやましき、御けしきにおはしませば、御かぢども〵、まゐるかたなり。さわがしきこゝちしていりぬ。人のよべば、つぼねにおりて、しばしと、おもひしかど、ねにけり。夜中ばかりより、さわきたちて、のゝしる。

釈義

○その夜さり　九日の夜なり

○はしに　端の方にの意にて、翠簾の端なり。家屋雜考に、翠簾は、大抵、母屋と、廂と二重なり。然れども、臨時の補理によりて、そのさま一様ならず。其の掛やうを註せる事ども、また、あまたありて一定せず。今其の一二をいふべし。三内口訣に曰く。

本式の主殿の時は、母屋の簾は各別なり。小壁無レ之候故、裏板より直に、是をかく、依りて、

其の長さ過分に候。無二釣丸一其外、廂、妻戸、格子等、常之翠簾無二差別一候。其の外、廂、妻戸は、釣丸あるべし。此の外はあるべからずと、云々。又、宗五大雙紙、翠簾かくる事といふ條に、

かぎも、釣丸も内にあるべし。内へ巻きてかくべし。又、かぎあけれは、杉原を四つに折りてたゝみて、同じほどざまへ引き出だして、それにて上げて結ぶべし。神祉の前のみすは、かぎも、こまるも、外にあるべし。

とみえたり。總じて、簾をかくる事、格子の内へたるゝを内みすといひ、外へ垂るゝを、おほひみすといふ。母屋は内みす、廂は覆簾常の事あり。と見ゆ。

○ものすそ　裳の裾なり。裳は、女官の禮服にて、男の袴のごとく腰に着くるもの。

○はこぼれいづる　溢れ出づることにて、裾などの、簾のそとに、あらはれいづるさまをいふ。さて、いづるのる文字は、衍あるべし。

○こ少將の君、大納言の君　ともに、中宮に奉仕する女房のよび名あり。

○御ひとり　香をたきしむる薫爐のことなり。

○ひとひ　先日といふに同じく、上文の、御たきものあはせて、人々にもくばらせ給ふ、とある、廿六日を、させり。

○たきもの　薫物なり。薫物の事は、上にいへり。薫物の香には、種々の名あり。後のものあから、朝妻検校の作れる、香づくしとよべる長唄を、ねむけざましにとて

香づくし

六十一種の名香は　法隆寺　東大寺　逍遙みよし野　紅塵　枯木　なか川　はけ經　花たちは

あ　八橋　園城寺　似たり　富士のけぶり
菖蒲　般若　鸊鵜班　をを梅　楊貴妃　とひう
め　たねが島　みをつくし（みをづくしと、と
なへきたれど、たゞしくは、みをつくし、と、
つを清み、くを濁りてよむべし）月　たつた
紅葉の賀　斜月　はくばい　ちどりや　法華
朧梅　やへがき　花の宴　はあの雪
名月　賀　蘭子　卓たちばあ　花ちる里
丹霞　花筐　うはがをり　すま　あかし
十五夜　隣家　ゆふしぐれ　手まくら　有明
雲井　くれあゐ　はつせ　寒梅　二葉　早梅
霜夜　たなばた　ねざめ　しのゝめ　うすくれ
あゐ　薄雲　のぼり馬　とかく、伽羅、のけぶ
りと、いのちの君は、とめても、いくよ、とめ
てもやよや、とめあかぬ。
○とうでゝ　取り出ゝあり。

○つた　蔦は、蔓草にて、秋にいたれば、紅葉し
て、うつくしきもの。
○心もとあき　こゝは、待遠ある意。
○さわがしきこゝちして入りぬ云々しばしと、お
もひしかど、ねにけり。
この章を、藤井高尙ぬしは、
御里御殿のうちにて、御加持どもまゐる、と
さまのかたに、いでゐさせ給ふをいへり。さ
るからに、外さまは、人しげく、さわがしき
こゝちして、おくにいりて、やすらひしを、
つぼねに、めしつかふ人の、よぶによりて、
おりたるなり。上に、蔦の色のことといへるも、
とさまの、はし近きさまにぞありける
清水宣昭ぬしは、しばし云々を
たゞ、しばし、うちやすまんと思ふほどに、
うまくねたり。

と、釈に説かれたれど、さては、忠實なる式部が日頃のこゝろがけと、うちあはぬ心ちすれば、今おのれは、左の意味に譯述せり。見ん、ひめたち、よく定め給ひてよ。

○よなかばかり　九日の夜半頃よりあり

○のゝしる　こゝは、やかましく、さわぎたつること。

譯解

また、その九日の夜、中宮の御前に參りたれば、をりしも、月のけしきのおもしろき時分にて、御簾の端の方や、御簾の下より、女官の裳の裾などの、チラチラと、あらはれいづるさま、最も、優美なり。

たれも／＼、自分のほど／＼につけて、うつくしくよそほひたり。

小少將の君、大納言の君などいふ女房達も伺候し給ふ。

また、御香爐には、先日（二十六日）調合せさせ給へる薫物を取りいだして、その、出來加減を試みさせ給ふ。

また中宮の御庭前の景色のおもしろさ、たとへやうなし。

伺候せる女官たちが、

　蔦の色の、まだ青々として、いつごろ、紅葉するならん、待遠なり。

など、口々に、申上ぐる程に、

中宮は、御出産の氣色にて、平日よりも、惱ましき御やうすにおはしませば、御平産を祈る御加持などするものどもの參る、外面の間、近くに、御席をまうけて出で給へるやうなり。

式部は、御産の事、如何ならんと、胸さわがしきこゝちして、奥の方に入りぬ。

をりから、式部の召仕ふ女の、よびに來れば、やがて、自分の部屋におり來りて、暫時、休息せんと思ふほどに、いつか、つかれて、寐入りにけり。ふと、目をさませば、夜半の頃より、中宮は、いよ〳〵、御産の氣となり給へるによりて、御つきの人々さわぎ立て、やかましくのゝしる。

漢文和譯

稲村眞里

節女お正の傳（續）

嘉右衛門は、たま〳〵他に適きたりけるが、變を聞きて、たゞちに家に歸れり。遺書二通お正の傍にあり。その一通は、義父母に遺せるものにて、「兒、はじめ、さきの父母を喪ひて、やがて御いつくしみによりて、人となりぬること、御恩は海山も啻ならず思ひはべり。このたびの事は、父上母上の御ためにも、うからやからのおん爲にもなりぬべしとなれば、すみやかに命うけたまはるべきなるを、たゞ、長次郎ぬしに許嫁せられしをいかにかせん。このごろその生業のやう〳〵傾きぬる由聞きはべれば、もし、かゝる時に約束を變へて、わだし家に適きなば、ひとり身は富貴にさきはへなんとも、さては、父上の御遺言をも違へ、且は、長二郎ぬしにも負くことにてはべり。御遺言をもたがへじ、彼のぬしにもそむかじとせば、おんふたかたさまに孝ならず。かくては、たゞ死なんより道ははべらじ。孝養の道を終へずしてさきだちまゐらする罪、かへす〳〵も恕させたまへ、しかじかとあり。

（原文）嘉右時他適。聞レ變馳至。得二遺書二於一レ傍。其一以遺二義父母一曰。兒初嬰二篤疾一。乃蒙二覆育一

恩不㆓啻海山㆒。今段婚事。已利㆓父母㆒。又利㆓諸親㆒。宜㆘速奉㆖㆑命。獨奈㆔初許㆓嫁二郎㆒。近聞㆓其生業漸落㆒。乘㆓是時㆒。遽而適㆑他。獨享㆓富貴㆒。是妾違㆓遺言㆒。而負㆓二郎㆒也。使㆔妾不㆑違不㆑負焉。則不㆑孝於㆓義父母㆒矣。妾身遭㆓此罹㆒。唯有㆓一死㆒。奉謝不㆑總。勿罪万恕。

なほ一通は、長二郎にのこしたるにて、「わが身の御身に許されたることは、今いはでもさふらひなんを、近ごろ勝浦へ適けと勸められて、結納のことも、はや日はべらじ。いかにせましと物もわきまへず。きのふ、人して欵に父母の君に説かしめつれど、つゆだに聴かれざるのみかは、その人さへ、今はなかなか父母のかたうでにて、あはれ、この世には、一人だにおん身の許にゆくことをよしとすゝむるものはさふらはず。いたましや、御身は。さこそは。たとひ、わらはゝ遂にさる不義のことを成しおはせて、身は錦を着かざり、口は甘き味に飽きなんとも、何を面目に世の人に見えはべらん。父上は、わらはとおん身とを、さることわりとのたまへど、こは、げにも、さるべき疑あれど、知らせたまふごとく、一夜の情をだにかはすいとまもなきものを。あはれ、許嫁の義理の重きことを思ひ、又この世をまかるわらはの身に、いひ解くよすがもあれかしと、彼をおもひこれを念へば、ちゞに心も紊れはてゝ、かゝる刄に伏しぬるゆゑよし、あはれとも見たまへかし。しかくとよみくだして、嘉右衛門は、さすがにあはれにおもへり。

(原文)其一以遺㆓長二㆒。曰。妾身許㆓郎君㆒。不㆑須㆓更言㆒。近乃遭㆑勸㆑適㆓勝浦㆒。細幣有㆑日。妾不㆑任㆓悲憤㆒。昨託㆑人欵說。一切不㆑聽。所㆑託之人。亦反來勸㆑妾。無㆘復有㆓一人贊㆑適㆓郎君㆒者㆖也。妾於

レ是。殊覺ニ郎君可ロ痛也。饒使ト妾遂成ニ不義之婚一。身披ニ錦繍一。口飽中肥甘上。獨何面目見レ人乎。義父謂。妾與ニ郎君一通ニ殷懃一。亦宜レ然之疑矣。然實未三嘗伸ニ一夕之情一。郎君所レ知也。特思ニ許嫁義重一。又欲レ有レ辭レ於ニ逝者一。思レ彼念レ此。萬愁攪レ心。所ニ以自殘一。冀見ニ憐察一。嘉右憮然。

萬助は、來て、その屍を見て、しふねき女子の、みづから罪蘗を造りぬる、いかでか能く成佛せんなどつぶやき罵りつゝ、遂に之を善次に告げぬ。善次は、禍を懼れて、狂疾にて身まかりつる由官に申せと敎へて、郡代に賄などして、やう〳〵事もなくうち過ぎけり。實に、これは、享保の辛酉の年の十一月のことなりき。世の評判もかまびすしきものから、あへて上には聞えざりしを、

(原文)萬助至。見ニ其尸一。窃罵曰。執拗女子。自造ニ罪蘗一。豈能成佛哉。遂告ニ之善次一。善次懼レ禍。敎以ニ狂疾一聞。賄ニ郡宰一。事得ニ寢不ロ問。實享保辛酉十一月也。物論囂然。而莫ニ敢上聞一。

その後、十八年を經て、本藩の儒臣竹田器甫といふ人、嘗て館に臨みて、詩を試みたるによりて、節女詞といふを題にして、みづから長韻の詩を賦して、つまびらかにその事を叙べたれば、藩侯その詩を閲て、異しとおぼして、さて、密に中外に詢はしめたまふ。侯の御母、賢しく、且惠の御心さへふかくおはせるが、その召し使ひたまへる婢に、赤間の人あるがありしかば、呼び近づけて事のよしをくはしく訪ね得たまひしかば、しか〳〵と侯に語りたまひぬ。侯はまた吏をつかはして、事實を問ひたゞして、遂に二人の村長の職を召し放ち、當時の郡代以下の者どもには、それぞれ罪科によりて、黜罰を加へたまひ、また、節女の家には、白金を贈りて、その貞節を施したま

ひきとぞ。

（原文）其後十有八年。本藩儒臣竹田器甫。嘗因二臨レ館試一レ詩。以二節女詞一令レ題。自賦二長韻一。悉叙二其事一。藩侯閲レ詩。以異レ之。因密詢二中外一。侯母賢而有レ恵。其所レ隷小婢。赤間人也。呼而近レ之。訪二得其實一。語二之於一侯。侯遣レ吏廉問。遂奪二兩村長職一。追二咎當時郡宰以下一。黜罰有レ差。賜二節女家白金一。使二存卹一焉。以旌レ之云。

嗚呼、お正の夫のために盡し、まごゝろこそ烈しといふべけれど、その心のうちを推しはかればまたかなしむべきなり。お正は、荒山破驛の間にひとゝなりぬる身の、何をか見聞せん。されど、その、かくもあきらかに榮と辱とのけぢめを辨へたるは何故ぞ。けだしまた、やさしき忍びえぬ心ぞありけんかし。余、多く都わたりの婦女を閲るに、争ひて、身を高貴の家に託し、貧をもて恥とし、相聚りて語るらく、なにがしは某の公に適きぬ。それがしはそれがしの君に嫁ぎぬなどいひ、或は、某はやがて何某に適くべし、なにがしは、また改めてなにがしにゆくべし。禍轉じて福となるなど、かしましくその榮を羨むなるを、結髮偕老の情にいたりては、おほむね省ずして、娼妓などとおもひを同じくして、みづからそのはづかしきことたるを知らぬこそあはれなれ。おみなわらべはなほ恕すべしといへども、眉鬚いかめしく張り立てゝ、豪傑もてみづから許して、しかも、かよわき婦娘にも恥づるものゝ多ければ、お正の行を顚倒したるものといひけん邑人をばいかで尤めん。ますらをの質を委すると、女子の笄字するとは、相等しきことなるをや。われ嘗て、筑紫の雜史を檢しに、近古の戰亂の際、武夫健將等が、朝に立花に仕ふとすれば、夕には大友に歸き

ぬることおほむね皆しかありき。甚しきは、その旗色を覗て、去就をさだむるなど、おのが君をすつることを、たゞ旅舍を出で立つが如くおもひなすなり。あさましきことならずや。されば、夫の忠臣とはすなはち其の君に情あるをいひ、孝子とは其の父に情あるをいひ、而して節女とは其の夫に情あるものをいふなりけり。情あればこそ忍びね。その忍びぬ心をもてるがゆえにこそ、能くみづから死生の際に忍ぶなれ。われ其の節を烈として、しかもその情を悲みて、かくはお正の傳をものしつ。

（原文）外史氏曰。嗚呼烈矣哉。阿正之爲二其夫一也。而推二其爲一レ心。亦可レ憐矣。彼其生二長荒山破驛間一。何所二聞見一。而其辨二榮辱之分一。如是其明。何哉。蓋亦有レ不レ忍也歟。余多閲二都邑婦女一。爭託二身富貴一。以レ貧爲レ恥。相聚而語曰。某適二其公一矣。某嫁二某君一矣。或曰。某嘗レ適レ某。某改醮レ於レ某。轉レ禍爲レ福矣。嘖々然艷二慕其榮一。而至二結髮偕老之情一。槩乎不レ省。至下與二倡妓一同見。而不三自知二其爲一レ辱也。婦女猶可恕也。乃鬚眉戟張。豪傑自許。而有レ愧レ於二茜裙荊釵之人一者多矣。則何尤レ於下邑人之以二阿正一爲中顚倒上也。男之委レ質。與二女之弁一レ字也等耳。余嘗撿二筑紫野乘一。近古雲擾之際。武夫健將。朝事二立花一。暮歸二大友一者比比皆是。甚則觀二其旗幟精彩一。以ト二去就一。視レ去二其君一。如二驛舍一然。噫何其無情也。故夫所レ謂忠臣。無レ地。有レ情レ於二其君一也。孝子有レ情レ於二其父一也。而節女有レ情レ於二其夫一也。唯夫有レ情。是以不レ忍。以二其不一レ忍故能自忍レ於二死生之際一焉耳。余烈二其節一。而悲二其情一。作二阿正傳一。

家計簿記法講義

磯部武者五郎

（四）貸借の意味

簿記にていふ所の貸借とは、普通言ふ所の金錢の借り貸とは違つて居ります。金錢又は、物品、其の他、事物の入ると出づるとにつきての言葉ですが收支とかいはずして、貸借といひますかとなれば、これは、意味のあることです先づ、簿記の貸借とは、代數學にていふ正負と同じ意味で、互に相平均するを主と致します、そこで簿記の上では金錢の出入は、單に、金錢を目當にしませず、金錢の入る時には之に對するものが出るに違ひなく、金錢の入る時には之に對するものが出づるに違ひなく、つまり、金錢の出入と、物品若くは勞力とか交換する譯であります。依て、此の交換、即、價の交換よりして、貸借の區別が起ります。

たとへば、金百圓にて、時計一個を購入したるときは、金百圓出て時計一個入り來る場合を記帳せば、時計一個を借とし、金百圓の出たのは、貸となるわけで、此の出入したる價双方を記簿に記します。簡單に、此の記帳の方法を申せば、先づ記簿面に借方を貸方と、座取りを分けまして、借方には、すべて、自分の手元を離れたる事物の價に因りて、手元に來り止りますものを記します。即ち、手元より離れたる金錢の價に因りて、時計一個の來り手元に止る場合に、其の手元に來る時計を、借方に記します。貸方には、手元に來り止るもの丶、價に因りて手元より離れたるものを記します、即ち、時計の場合に手元を離れたる金錢を貸方に記します。

貸借の意義は、ざつと、此の如くであります。之

を記帳の上に記しますと、其の例は、左の如くです。

貸借の例

一、金百圓支拂ひ時計一個を買入る。
二、俸給金百圓を受取る。
三、預金利子拾圓を受取る。

元丁	年月	摘要	借方	貸方
	1	時計一個	100000	
		現金		100000
	2	現金	100000	
		俸給		100000
	3	現金	10000	
		預金		10000

何せ、此の如く、一つ事を、二重に記す樣な面倒の事を爲すかとあれば、是迄、行はれたる記帳法の如く、單に、金錢のみを主として、其の出入のみを記簿の上に記しますには、金錢の出入は分

りても、金錢の働きが分りませぬ。又、財産の變動が分りません。故に、貸借兩方に分ち、二重の記し方を爲ませば、第一金錢の働きが分り、第二財産の變動が分り、第三、損得利害の計算を、一つの帳簿の中に、集むることが出來、第四には記帳の誤りを訂正する時に、都合がよいのです。

（以上は、簿記學に於ける借貸の意義です。之を家計簿記に應用するか、否やに至りては、別に意見がありますから、家計簿記の本論に入りて申し上げます。

但、この貸借のことは、肝要のことでして充分承知して戴きたいのです。



文　林

夕郭公　東久世通禧

燈をしはしまつまのはしゐして
おもはす聞つやまほとゝきす

晴後遠雷　高崎正風

雨雲はまたやまのはにみえなから
とひの聲こそたかくきこゆる

竹風　鍋島直大

しけりあふ庭の竹むらふくかせの
音もすゝしきなつはきにけり

燭影映水　津輕承昭

高殿にかけつらねたるともし火の
うつるもすゝし庭のいけみつ

雨後新樹　竹屋光昭
雨雲ははれわたれともやまの端は
しげる若葉にへたてけるかな

雨後夏月　西三條實義
夕立にあつさわすれしこのゆふへ
つきのかけさへ涼しかりけり

寺子規　宮地嚴夫
ほとゝきすきかて今年も過なまし
此やまてらにあそはさりせは

夏夜雨　北郷久政
ほとゝきすなく一聲にゆめさめて
夜ふかき雨のおとをきくかな

鵜河　植松有經
長良川さすやうふねのかゝり火の
かけもしめりて夜そ更にける

田上螢　千葉胤明
虫おくる田中のかゝりふくかせに
ひくかなたにと行ほたるかな

深山瀧　蜂須賀随子
山高みをくらくしける木のまより
たえ／＼みゆる瀧のしらいと

岸邊牡丹　近衛貞子
蓮の葉もうかひそめたる池みつに
かけふかみくさ咲にほひつゝ

山家水鶏　鍋島榮子
山住はこゝろやすくもおもふへし
くひなの聲をともときくかな

谷新樹　前田朗子
たに川をなかるゝ水もみえぬまて
若葉をくらくしけり合にけり

夏簾　柳原愛子
新らしくかけわたしたる玉たれの

をすのいろこそ涼しかりけれ

夏雲　小池道子

いつくより夕たつ雲のをこりけん
照日まはゆくみえしみそらに

山家棟　松平健子

我庵のうしろのやまもなつめきて
ときにあふちの花さきにけり

鷺　小川直子

しけりあふ森かけくらき澤みつに
ひとりすこくむ鷺そたつなる

若葉陰　服部磯子

薄くこくみとりしけりて夏山の
こかけ涼しくあさかせそふく

菖蒲　中島歌子

長き根はいふ人もなしはな菖蒲
はなにのみなるよにこそ有けれ

皇孫の御降誕を祝ひ奉りて

井上頼文

やすみしゝ　わがおほきみ
たかひかる　日のみこ
ひこみこの　あれませる
いく日はよ　たる日はよ
國たみの　うちあくる聲
あめつちに　いみちたらひ
くにつちに　いとはるまで
たふときろかも　かしこきろかも

夏景色

笛　小西甚之助

おひさきの長くもあるかうなる子が
うちむれあそぶ庭の竹の子

行末の薫風またれて竹の子の
　窓にのびゆくことぞうれしき

新竹

見ることに伸びまさりゆく若竹は
　千たびの後や千尋なるらん

若葉うつ一村雨のはれゆきて
　色もすゞしきことしふの竹

みどりなる絹張窓にさす影の
　なびくも清し庭のわかたけ

紫陽花

夏衣うすむらさきに染みなまし
　露ながら折るあぢさゐの花

卯の花

かへて着し衣手寒くおぼふなり
　垣のうのはな雪とまがへは

葵艸

玉だれの小簾にかくてふあふひ艸
　賤が園生に見るも清げし

宮人のかざす葵を手折きて
　ひなもみやこのこゝちこそすれ

菖蒲くさ

出入れる人のかざしと見ゆるかな
　さしつらねたる軒のあやめは

少女子かかけてゆかしや菖蒲艸
　あやめづらしき夏の眞袖に

浅澤のあさくはあれど菖蒲艸
　深きかをりはにるものぞなき

水あさみ底すみの江の松蔭に
　千代を契りてひく菖蒲かな

時すぎて引く手あささの菖蒲艸
　わたらかをりを風にまかして

早苗

こくうすく同しみとりも色わくは
　わさとおくとの早苗なるかも

時鳥なく音にいそぐ田うゑ女の
　卯の花くだし何いとふへき

五月雨

眺むれははれぬこゝろぞいやまさる
　雲に雲そふさみだれの空

なかみつる身のつれ〴〵に似もやらて
　雫ひまなき五月雨のころ

鵜飼

闇なから鵜川のかゞりとりなひて
　鮎子さばしるかけも見えけり

橘

立花もいまかちるらんこし方の
　夢ふきさますなかつきの風



女訓綾廼雛形（承前）

揖取素彦

一、略義には、食次度毎に勝手へ入り、鉢を改めず、中坐より起ちて勧むる事あり。業は前に同じ。汁も盛り出しにせず、明椀を取て勝手へ入り、再進する事あり。さる時には、まづ、盆を持ち、客の前に進み、二ひざ進みて、盆をさし出し、明椀を受け、盆のまゝ少し片よせて置き、膳脇に取てある汁器のふたをとりあげ、明椀にふたをして、さて、盆のまゝ持ち、二ひざ下がりてひらき起ち、勝手へ入り、再進を盛らせて持参り、客の前にて、

二ひざ進み盆を置き、汁椀を兩手にとりて膳上へ置き、盆を持ち、二ひざ下りて開き起つべし。

一、膳を上る樣、まづ、脇取りに出づべし。左の通ひ盆を持て出て、客の椀のふたを置かれたるをとり、盆へのせて持退くべし。もし、客、椀のふたを元の如くしておかるゝ樣子ならば、出るに及ばず。時宜に見斗ふべし。次に、燒物を上ぐべし。進みより、二ひざの膝行進退、膳を參らする時の業に同じ。以下之れに準ず。都て、膳を上る時に、兩掌をふせて、木具の足の下もとへかけ、いさゝか、前へ引下げて持、膝行し開き起つべし。燒物の上ぐるときに、客、擕へ申度と被申たらば、其よし獻方の役へ申通すべし。次に、平皿の中足を上ぐべし。次に、本膳を上ぐべし。

一、主人相伴の時は、鉢脇の左り二人出づべし。初め、手拭代を、まづ、客へ參らせ、夫より、主の前へ參らす事業、客に進るに同じ。主客對坐なれば、客は左、主は右なり。客上位なれば、主坐少し下がりて相對ふべし。もし、至貴の人ならば、客、床の間を後ろにして正面に坐し、主は、客の右方に引下がりて、左りを上にとり、侍坐あるべきなり。尤、座敷の模樣により、床の間、右方棚前左の方にある事あり。さる時には、床の間のあるかた右を上とするなり。茶烟草盆菓子等參らせる業、主に進るも客と業おなじ。但し、客の給仕進め了り、立つ頃に、主の前に持參るべし。食次の役、再進の時、客へ進め了りて起ち、直ぐに主人の前へ參るべし。業はすべて、客へ進むるにおなじ。（主へ進めて下がるとき、主、右坐に居らば、我左りへ開くが順なれども、さては、客のかたをうしろ手にするやうに見ゆるなれば、主のかたは左りにうけて、筋からやうに膝退し、我右へひら

けば、主の座を外れて、客のかたへもむかひごまにひらかるゝなり。斯様の業は、坐敷の様子を考へて、都台あるべきなり。)汁の再進、湯、其の外、膳上ぐる業等、准じて知るべし。

一、飯後の菓子、盛りませにして木具へ据ゑ出すべし。客主とも進る様前に同じ。茶参らする様、亦、同じ。(飯後の菓子は、後段の初めに出すものなり。夫は、飯後に薄茶を出し、後段の菓子は、椀に盛り、向ふ菜に水栗川竹をそへ、木具に据ゑ出す。濃茶臺天目にて出す。續いて銘酒を出す。盃 八寸の木具にすうる者。煮物(五色七色)中皿に盛りて出す。次て、宴席の吸物硯ぶた盛鉢肴等出るなり。されども、本文に注する處の一汁五菜のわけ相ひ位にては、後段のことはなきものなり。故に、飯後の菓子は、皿盛のもりなせにて、煎茶までの事なり。川竹を記せしは、革茸の事なり。献方にては、川竹と假字に書くなり。)

各國婦人の特色

三石直方

▲他の長は、資て我が短を補ふべし、他の短を以て、反省の料となすべし。

▲たゞ我が長をすてゝ、他の長短をあはせるとの愚をなすべからず。

第三章　佛蘭西婦人

(其の四)　佛蘭西婦人の摸範

(五)　ヂャン、ダーク孃

ヂャン、ダークは、古の佛國領にして、今の獨逸領なる、ローレン州トムレミーの一農夫の娘なり。文化未だ開けざる當時のことゝて、ヂャンは、敎育として格段の薫陶を受けしことなかりき。然れ共、温良慈愛ある父母は、ヂャンをして其の天眞

を枉げざらしむることに努め、又、誠心を以て神に仕へ神に祈ることを教ふ。

左れば、ヂャン、は長ずるに從つて教會堂に牧師の教を聞くを唯一の樂とし、務となしけり。ヂャンの平生は、家内の仕事のみならず、屢々、牛羊を家外に導き、其の飼養に怠りなかりき。

ヂャン、既に、加笄の時に及び、一青年は慇懃に其の父母に向つて結婚を申込めり。而して、父母之を諾し、ヂャンは諾せず。此に、青年は結婚を强行せんと欲して法廷に訴ふ。ヂャン、即ち、法廷に立ち、明に、此の結婚の不法にして、服從すべき理なきを說き、人をして其の堅固なる意志と明確なる識力に驚かしめき。

此の時に當り、佛國はチャールス六世嗣子なくして崩殂し、英王エトロード三世、其の母の佛王の妹なりと云ふが爲に、王位相續の權利を主張して、兵を佛國に加へ、百年戰爭の端を開きしより、既に六十餘年、チャールス七世は、重圍の中に陷り、民は疲れ兵は傷み、城郭村落、みな悉く、荒廢に歸せんとし、佛國の危急存亡は、今此の時とぞ知られける。

然るに、之を拯ひ、佛國をして再び運命を回復せしめたるヂャンは、一日、野にありし時、紫雲棚引き異光燦として輝けるが中より聲あり、神は汝の敬信と善行を嘉し、汝に福祉を與へ給はむとありて消え失せぬ。次いで、數日の後、群羊を導きて野にありける時、曩日と同じく神宣あり。曰く、汝は、速に佛國をして、英吉利の戈下より脫せしむべしと。ヂャンは、再び、神宣を蒙り、感泣措く能はず、必ず、身を神宣の前に犧牲となすべきことを誓ひぬ。

ヂャンは、歸つて、之を父母に告ぐ。父母省せず。

次いで之を叔父に告ぐ。叔父、從來、ヂヤンを信愛するの人ありしかば、直に徃いて、隣邑の知事を訪ひ之を告げ、ヂヤンをしてオルレアンの重圍を解かしめんことを請ふ。知事は、其の妄誕を嘲り、頑として省みず。而も、ヂヤンは、之れがために敢て落膽せず。飽くまで彼を動かさんとす。暫時にして、此の事世上の取沙汰となりしかば、知事も、遂に動かされて、之を國王に奏しぬ。此の時に於て、ヂヤン、府民の義俠なる人に旅資を惠まれ、王城に至れり。

當時、オルレアンの圍は、益急にして、防戰に百方策竭き、恰も、重病者の醫療手を盡くして、其の功なく、果ては、呪咀祈禱に迷へるか如き狀なりき。而して、今、ヂヤンが到着せるを見るや。先づ、其の徵を見んとて、王は群衆中に隱れ、他をして王と稱し、ヂヤンの目を欺かんとす。ヂヤンは、逸早く王を衆中に發見し、其の前に跪き、我身の神使として來り、以てオルレアンの圍を解き、王をしてレイムにか冠せしむべきを云ひ、王の神惠に激して奮勵せんことを勸む。

此に於て、朝廷にヂヤンを信ずるもの漸く殖えしも、一二ヶ月の間は、猶、ヂヤンを試驗中に葬りぬ。而して、神徵漸く著しきを見るに至り、遂に、軍陣の間に立つことゝなり、嚴しく武裝して、手に白旗を執り、軍司令の任に當れり。ヂヤンが、陣頭に馬を躍らせし時は、之まで、深く其の風采を想望せし府民等は、歡呼地を撼せり。

ヂヤンが指揮の下に、死せしが如き佛軍は、忽ち、烈火の如くに活動し、初め遁竄せし兵士等は、麻の如くに集り、六千の精鋭立どころに其の手足となりぬ。此に於て、ヂヤンは、先づ、英國に矢文を射て、速に退軍すべきことを勸告し、次で、都

下を督勵して敵陣に突貫し、遂に之を數里の外に擊退し、第二戰には、敵將ブリトンが、精英を集めて固めつるトールネル城を、激しき攻擊の後に陷落せしめ、ブリトンは死し、七千餘の英兵亦算を亂して城濠を埋めたりき。此の戰に、ヂャンは、一旦、負傷して濠に墜ち、我軍氣大に沮みしも、更に起ッて突擊し、すさまじき凱歌を揚げたり。此に於て、オルレアンの重圍は全く解け、ヂャンの聲名は、百雷の如くに轟き、祝勝會は到處に開かれぬ。ヂャンは、即ち、レイムに急ぎ、チャーレス六世が冠の式に臨みて、雲霞の如き庶民歡歌の間に式を擧りしかば、ヂャンは、神宣たる二個の使命、即ち、圍を解き加冠式を擧げしを以て、茲に名譽を荷ひ、我か郷里に歸らんとす。而も、王及朝臣等は之を肯せず。更に、軍に將として英軍を擊滅せしむ。ヂャンは、神の已が身に宿らざるを知りつゝも、其の强請を斥くる能はず。進んで英軍と戰ひしが、果して敗衄し、遂に、英軍の捕ふる所となり、炮烙の慘刑に處せらる。而して、憤怒の聲は、佛軍に喧しく、英軍自から敗を招くの勢焰を高め、獨、ヂャンの偉勳は、永く佛國の光榮として輝きぬ。

女子要書解題（加之部）

三浦千畝

假名列女傳　八卷

自跋に『この列女傳は、はじめに仁智節義のしあじあをあらはし、をはりに孽嬖をしるして、よきをすゝめ、あしきをこらす心ばへ、みん人をして德をつゝしみ、おこなひをはげまさんとなり云々、きのとのひつじ（明曆元年）しもつき

のちの六日、季吟子』とあり、即ち、漢の劉向が古列女傳を、假名文に譯したるものにして、傳の長さは、所々抄略したるふしも見ゆ。

季吟、姓は北村、拾穗軒と號す。博覽治聞にして兼て歌文を善くし、又俳諧に名あり。後幕府に召され、歌學所に補せらる。寶永二年六月十五日歿す。年八十二。その著はす所、八代集抄、萬葉拾穗抄、伊勢物語拾穗抄、源氏物語湖月抄、百人一首拾穗抄、枕草子春曙抄等著書極めて多し。

按ずるに、原書列女傳は、凡て八卷にして、母儀、賢明、仁智、貞順、節義、辯通、嬖孽等に分ち、毎條頌あり、蓋し第八卷は、目錄に續列女傳とありて、仁智辯通等の門を分たず。亦頌もなし。さて劉向のことは、漢書に『向睹下俗彌奢淫、而趙衛之屬起二微賤一踰中禮制上、向以爲、王教由レ内及レ外、自レ近者レ始、故採下取詩書所レ載賢妃、貞婦、興レ國顯レ家可二法則一、及孽嬖亂亡者上、序次爲二列女傳一凡八篇』云々と見えたり。

假名教訓　一卷

著者詳ならず。室町の末頃のものなるべし。此の書女子の教訓に關すること十一ヶ條を、假名もて記したるものにして、卷末に、宗祇の作なる、若衆身持、よき女房の身持、あしき女房の身持、宮仕によき女房、宮仕にあしき女房等の長歌を併載せり。（續群書類從九百四十六）

女禮飾圖式　十三卷

此の書は傳授書の類にして、帝國圖書館本には、毎卷左の如き奥書あり。『右當家秘書たりと雖も、御執心不レ淺に依て遣畢、尤、不レ可レ有二外見一ものなり。文化五辰仲夏、仲田惟貞、およし殿』仲田惟貞とは如何なる人なりや。その傳は

未だ詳ならず。目錄は左の如し。

講床飾卷　諸棚飾卷　祝言道具卷　祝言裳衣飾卷　膳部飾卷　膳木具寸法卷　現硯箱方卷　五節句卷　女禮樣方卷　女禮飾方之卷

かさね色目　一卷

著者は源忠次とあれど、その傳は詳ならず。釋空阿（俳人道月、空阿と號す、文化九年に死せり、この人か）の書きたる、天明四年の跋あり。

此の書、女房裝束のかさね色目のことを記しゝものなること、其の書名の如し。

かさねの色あひ　一卷

此の書は、縣居翁賀茂眞淵の著なり。翁は國學中興の人にして、我國の學問に大功勞ありしこと、皆人の知る所なり。さて此の書は、女房裝束のかさぬ色の故實を、考へ記せるものなること書名の如し。村田春海の跋あり。『此のかさね色あひは、紀の殿の女房の求にて、縣居翁の書きて贈られしなり。古き家記裝束の抄ともには、猶さまざまの名もかれこれ見ゆれど、女房の懷紙をりかさねん爲めに、かくて足りぬべければと漏されしもの多かりき』云々と曰へり。

女訓繪入貝合の記

著者は攝江田中友水子とあり。その傳は詳ならず。此の書もと上下二卷ありて、上卷は雛遊の記にして、この貝合の記はその下卷なり。卷末に歌かるたの記を附記せり。自序に『女子のもてあそぶ、貝合、歌かるた、雛遊び、七夕祭の四つの物は、古へ今に亘りて、かしこき賤も、時に臨み折にふれ、玉くしげ明くれの心をやる中だちと成て、殊更に女子のみやびにせる物から、其の初をしらせまほしく云々』とあり。寬延二年の刊行なり。

(輿 之 部)　一巻

嫁入記

此の書、群書類従本の識語に『右、東山殿政所伊勢守貞陸之記也』とあり。東山殿とは足利八代将軍義政のことなり。貞陸は伊勢守貞宗の子にして、伊勢流の禮法を定めたる人なり。なほ此の人の書きたるものには、『嫁迎事』『簾中舊記』等あり。

此の書よめ入の事に關する武家の儀式作法を、こまかに記したるものにして『嫁迎事』と併せ見ば、當時武家婚姻のありさまをしるを得べし。

(群書類従武家部)

嫁迎事

群書、類従本の識語に『右東山殿政所伊勢貞陸之記也』とあり。作者『嫁入記』に同じ。武家婚禮の事をしるには、いとめでたき書なり。二書必ず併せ見るべし。(群書類従武家部)

作文雜話(二)

如何にして文章を書くべきか

安藤晴晨

文章は、どうしたらば、書けるようになるでしやうとは、屢々、吾人が尋ねらるゝ問題である。一見したところでは、無意味な問のやうであるが、その中には、種々雜多の問題が含まれて居る。即、文題に對しての構思の方法、詞藻の撰擇、事項の排列等の細目も、この中に含まれて居るのである。此の問題とに、精密に答へむとなれば、すべて、これらの細目にも渉らねばならぬ。然し、こゝには、たゞ、その大體に就きて論じ、その細目は、追追に項を分けていふ事としやう。

先、文章を作るに當り、初學者の陷りやすき弊は、文題を採つて之を書かうとするに、如何なる思想をいひあらはさうかといふのを後にして、先、如何なる詞をならべやうかと考ふるのである。それで、いろ〳〵の作例を見ておもしろさうな句などを拾ひ集め、それから、その句などを綴り合せて、一の文章とするのである。これは、前後をとりたがへたものといはなければならぬ。文章は、前にもいつた通り、畢竟、連續したる吾人の思想を、文字にあらはしたのであれば、第一に思想を尚ぶので、詞などは第二にしてよい。一體、かゝる弊の出來るは、元來言文二途の勢止むを得ぬとはいふものゝ、よく〳〵注意しなければいけぬ。文章を練磨するのは、各自の思想を、遺憾なく人に傳へうるのを第一の目的とするのであつて、彫琢修飾は第二の目的である。然るに、動もすれば、第二の目的を、第一とあやまつて、彫琢修飾を以て、文章の能事了りぬとするものゝあるは、嘆くべきではあるまいか。吾人は、支離滅裂な、丈の錦よりも、經緯ともに完き尺の布片をのぞむのである。

それであるから、文章を練るには、先、思想を殘りなくいひあらはす事に慣れねばいけぬ。それには、どの文體が最適してゐるかといふに、それは、即、言文一致體である。元來、言文一致體に就ては、この頃やかましい議論があるので、これが、將來普通に行はるゝ文體になるか。また、現今の言文一致體が、如何なる點に於て欠點があるかなどゝいふ事は、別問題であるから、こゝに、その議論は述べぬが、たゞ、こゝに讀者諸孃にすすめたいのは、この文体を、文章修練の方法として採用せられたい事である。如何なる事柄でも、

先、その題についての自分の思想を、口語のまゝ書き下し、然して後、徐に、これを他の文体に書き改め　修飾してゆくといふ方法は、極めて、効果のあることであらうと思ふ。

かくすれば、思ふまゝに思想をいひあらはす事ができるから、文章の筋がよく徹つて、暢々して、思想が、文章を一貫して、あらはれるやうになる。それでないと、いくら詞が華やかであつても、思想のまとまりがつかず、その文章の全体の思想はどんなものであるか。讀者にわからないやうなものができる事がある。

次に、文章の文体に就いては、後に、くはしく述べやうが、先、こゝに注意しておきたいのは、いかなる文體でも、一つの文章をかくには、一つの文體に限らねばいけぬといふ事である。首の方は中古體、中の方は和漢混合體、尾の方は漢文體といふやうな鵺的文章は、源三位でゞもなければ、射落しても功名にもならぬ。

次には、よく自分で文章をなほす事である。やかましい辭でいへば、藝術的良心を熾ならしむべしといふのである。兎角、自分の作つたものはよく見え、また、自分の綴つた句は、惜しく思はれ、なかなか思ひきつて削れぬものであるが、そこを奮發してやるがよい。

彼の歐陽修が、多讀、多作、多改といふ事を文章の秘訣とへまれたのは、千古に動くまじき語である。多く名文を讀めば、種々の文體に通じ、種々の思想に接し、よくその長所をわきまふることができるやうになる。また、多く文を作れば、おのづから、思想も筆も練れてくる。その上に、よく改竄添削を施したらば、申分がないのである。

西洋の修辭學者のブレイアといふ人も、同じやう

な事をいつて居る。その概略をあげれば、第一には、その文をかゝうとする題意について、明白な観念を得やうと勉めなければいけぬ。第二には、良文體を得むとするには、數々作るといふ事が、最必要である。第三には、極めてよい作家の文體に熟する事が必要である。第四には、如何なる作家の文體でも、それの眞似をしやうといふやうな心を斥けよ。第五には、その文體を、よくその題意に適應するやうにせよなどゝ説いて居る。以上は、作文を作る上に就いての大体の注意である。

詠史百首（加藤千浪作）評論

海上胤平

左馬頭義朝

なさけなく親をうつ身のはて見ても

沿　論

まさしくむくひある世なりけり

情なくなど、こゝにいふべき詞かは。二句、うつ身のはてとあるはかなはず。こゝは、うちし身といふべき處なり。三句、優ならず。四句も結句も、いまだしく見處なきうたなり。四句、むくひはむくいとかくべし。

為朝

なか〳〵につらなる枝のこずゑのみ

射たるあだ矢もこゝろありけり

連枝といへる熟語を、強て詞にとりなして、詠るなめれど、國語ならねば、うたによむべからず。枝の梢とは、つゞくべき詞ならぬをや。此のうた、為朝が、木の枝を射たるになりて、冑を射たりとはきこえず。あだ矢も例なければ戯言なり。

源頼政

あづさ弓とる方のみかことの葉の
　右にもいづる人なかりけり

萬葉集に、左手の弓とるかたといふ詞あり。それによりて、梓弓とる方のみかといへるにや。左に對して、右といひて文武ともにすぐれたるよしの作意なめれど、弓とるのみかといはで、とるかたのみかといへるは、弓は、たゞ、左手といはむ料のみにきこゆなり。かくては、左手のすぐれたりといふにありて、ことわりたがたし。

安徳天皇

世の中をてらしもはてずわたつみの
　なみま入日のかげぞかなしき

日の入るは、終日世をてらしての後ならずや。さもなくては、此の日、西より出で西に入るさまにて、いとあやしげなり。かく、ことわりにたがへるは、いかにぞや。

平相國

時を得てくもゐをしのぐおいまつの
　こずゑもつひになみのしたくさ

二句、しのきしといはではかなはず。梢に、子孫をふくみて西海に沒落せしをよめるなめれど、かくいひては、相國、浪底に沈みし如くきこえてかなはず。また、子孫を梢といへる例もあるまじく、浪も俄に出でよせなし、また草も心ゆかず。

古今叢談

山岡螢雪

（二十二）六月の異名

今年もはや、なかばとはなり、小田の早苗のいと青く、水面にうかぶ影のゆかしさ。實に瑞穂の國

の名を負ふるも、さこそと思ひやられぬ。

六月としいへば、炎暑やくが如く、え堪えぬこゝちすれど、陽歴にては、まだ程こそあれ。とはいへ、異名は、夏三月の季とはなりぬ。さればこそ、季夏、暮夏、晩夏、或は、くれゆく夏といふこゝろにや、徂夏とも、夏末ともいふめれ。

禮記曰季夏之月日在柳。

と、字彙には、凡そ未月を季月といふ。潜確類書には、即ち、

季夏者日月會于鶉火而斗建未之辰。晋樂志云未味也萬物向成咸有味也。

此の月、律を林鐘といふ。律暦志にいはく、

林君也言陰氣受任助蕤賓君主種物使長楙盛也位於未在六月。

又、月令には、六月律林鐘に中る、高誘注にいはく、林は衆なり、鐘は聚なりと、更に、白虎通に、言ふこゝろは、萬物成熟し、種類多きなりといへり。

世俗あやまりて、はやしのかねと稱ふ。されば、貞徳は、説をなしていへるやう、

此の月律、林鐘にあたるゆゑに名づけしを、鐘の字に見まがへて、此頃はやしのかねと訓にいひあへるは、誤なり。

と、而して、節を小暑となし。中を大暑といふも、共に、月令廣義に見えたり。即ち、

小暑孝經緯云、夏至後十五日斗指丁爲小暑。六月節。

大暑小暑後十五日斗指未爲大暑六月中。

と、爾雅には、六月を且となす。疏にいはく、六月巳をうるときは、すなはち、制且といふ。且は子余の切となるより且月とはいひ、又、瓜期とて

左傳に、

齊侯使連稱管至父戍葵丘瓜時而往及瓜而代。

俳仙季吟が、増山井に朔月は六月の異名といへど、其の如何なる意なるか、いまだ知らざれど、禮記に、

朔月少牢五俎四簋云云。

これ月朔の義なり。いまだ、其の義をつまびらかにせず、とあり。又、増山井に、陽氷とあれども、恐らくは、賜氷の誤りならんか、月令廣義にいはく。

賜氷石季龍上氷臺藏氷三伏之日以賜大臣

又林滋賜氷賦。

易書には、陽まさに退避す、ゆゑに遯となす。六月の卦なりとあるより、遯月の異名は起り、又、旱といふ意にや、亢陽ともいひ、或は、庚伏とも云ふ。水無月といふも、此の月の異名にして、或書に、

此月也暑熱烈水泉涸盡故曰水無月

と、あれど、奥儀抄には、これとかはりて、いへるやう、

農事ども、みなしつきたるゆゑ、みなしつきといふを、あやまれるなり。

又、一説としては、五月に植ゑし早苗のみなつきたるこゝろより、かくは、稱するに至りたるなりともいへり。おのれ淺學にして、いまだ其の名の起りを確めずといへど、いづれにしても、きこゑぬことはあらじ。

後鳥羽院の御製には、常夏月とありて、

ちりはらひ妹にか見さんとこなつの
月まちえたるはなのさかりを

藏玉には鳴神月とて、定家卿の詠に、

夕立はなをはれやらでなる神の

つきにもなりぬ夏やきぬらん

と、顕昭法師は風待月といひて、

松かげに床居をしつゝけふはゝや
かぜまち月のあつのうとさよ

と、藏玉には、又、松風月とて、

雲たかみ雨ふりやまのけふよりは
まつかせ月の夕ぐれぞふる

秘藏にはいすゞくれ月とありて、

ほとゝぎす故郷こひてかへるなり
いすゞくれ月に成れる空とて

更に、或書には涼暮月とも見えて

風ふけば池にそひよるいづみある
すゞくれ月のころにこそあれ

と、ころしも林間の齋女、今をさかりにうたひ出でゝかしましさ。千蔭大人が嘗、

松がねの岩まにむせぶまし水に
こずえの蝉のこゑぞおちそふ

と詠せし如く、我れも、人も、口吟むころなればにや、せみの羽月とも云へり。其の他、隆暑、溽暑、炎天、なども皆此の月の異名にこそ。

あはれ、五月雨の晴間なき空も、いつしか名殘なくありて、雲の峰も立かさなり。彼方を望めば、滿目青山にかゝる一條の素布、風にゆられて片々たる飛沫、さながら霰の如く、雪の如く、玉の碎けて跳り、花の舞ふに似たるさまのうるはしさ、一滴の雨なく、一陣の風なき三伏の熱さも、知らず、涼味を感ぜらるゝ夏の夕、月をふみつゝ小川のほとりを逍遙し、こゝかしこの薬草の露にすだく、螢火の點々たるをながむるも、いとめでたき事ならずや。

（二十三） 御命名私考

皇孫殿下には、今茲五月五日の午前九時と申すに、賢所大前におかせられ、おごそかに御祭典をあげさせ玉ひ、而して、青山の御所にて、御劍の御下賜と共に、いよ〳〵、御命名あらせられたる御事は、すでにすでに、諸媛の知り玉ふところなるべし。

そも〳〵、此の度の御命名につきては、御名の御歴代にさしさはりなきや、又は、御稱號の適するや否や等、十分に專門學者等の、硏査考證のすゑ撰びたる三種を奏上し、其の中より、御裁可あらせられたる由、もれ承はれるが、如何に其の御字面のめでたきぞ。まことに、かしこき極みなれと謹み案ずるに、

御名　裕仁

この御名の御文字をひろと訓ませ玉ふは、寛裕とつゞく意にて、もと、衣食足て禮節を知るといひ、即ち、衣物の饒なるに象り、又、裕なれば乃ち以て、民寧しともありて、君、仁にましまして、政ゆるやかなれば、民心すなはち安しといふ意あらん。今はむかし、晋の陸機が太子降誕を祝ひまつりたる詩に、

篤生二我后一。克明克秀。
茂德淵冲。天姿玉裕。

結句、天姿玉のごとく裕かなりとは、我が皇孫殿下を、ことほぎ奉りたる如くにて、いと〳〵めでたし。

御稱號　迪宮

この御文字、迪をみちと訓ませ玉ふは、啓き迪びく意にて、說文に迪は道なりとあり、允に厥の德を迪むとも、又、迪に惠へば吉なりとも見えて、道によりて踏進む義とあり、後人を啓迪し、子孫を開導する意ともありぬべし。陸機が學士潘生に贈りたる詩に、

奕々瀉生。　哲問允迪。

天保二定爾一。　靡二德不一レ鑠。

と、こは即ち、德を踏み道に順ひ、人民を開導する意義を含ませたるなり。

更に詳しく、文字を解說せば、裕、迪の二文字は、即ち、文字製作六法のうち、會意にあたり、二つの文字が合さりて一つ意味の出來たる字にて、裕は、もと衣と谷の二字より起り、衣を谷といへば、裕と訓み、轉じては、ひろと訓むに至らせたるも自然明かなり。尙裕は、衣の傍に八人口と書く、其の八は所謂、もつとも多きをあらはす八にて、即ち、八百萬とか、八千代とか、八千鉾とか、或は、八咫鏡、八坂瓊曲玉などの八なり。されば、皇孫殿下のいやが上にもいや榮まして、人口もいと繁くなれど、徒に數の多きのみに非ず、衣によれば悉く衣食足り、國運隆盛の意ある文字なり。

迪は辵と由の二字より出來、辵はわしる、すゝむといひ、由はしたがふ、おこなふなど訓みて、德を由ひ、道に由ふ、と云ふより迪を、みちびく、すゝむ、ふむ、みち等と訓むに至りたるなり。

そも〳〵、由は田より來りたる文字にて、田は漢字製作法六書の中、象形に當り、有形名詞より起りたる文字にして、みつる、つらなるなど訓む。事少く、昔時年號撰定の、難陳の如き傾きなきにしもあらねども、由は田の中央に一頭角を現すは、即ち、秀たる象ちにて、宇内各國を一の田とすれば、古來瑞穗の稱ある我が帝國は、其の中心の秀靈なる國土と見、それが辵の上にありて、短を去り長を取り以て、日々邁むと云ふ意味を含むが、仍ち廸の文字なり。

あはれ寬裕、順道の御德と、益々國土秀て、人民

饒ある御瑞祥とを、御名および御稱號に表させ給ひ、他日、此の大八洲の皇國に君臨せさせたまふ御事の、いと、尊くかしこくも、いや、めでたきことにこそ。

鴻城雜錄（三）

白松園主人

○雲谷庵

山口、野田神社のうしろに當りて、山の麓ある小高き處に、雲谷庵といふがあり、はつ春の空、いとのどやかなるに、嫁菜つむ子もある者を、ひねもす、葎のやどにひそまりをらむは、造化の神やうとみ給ふらむと、友とする人、一人二人と共に、之を訪ひぬ。繪畵の上に一派をひらきて、その名、後世に輝きたる雪舟は、實に此の處に住みたるなりき。雪舟、雲谷軒と號し、その住める寺を雲谷寺と稱しき。當時、自身の嗜好に應じて作りたる建物は、實に、應永年間の遺物あるを、維新の頃、故ありて、氷上村の巨刹法隆寺に収めてありしが、明治の初め、山口の古學者近藤淸石氏、五六の有志者と議り、その遺物をもて、此の山麓に一ッの庵を結びたるなりとぞ。後世の玄關めきたる處の諸折戸、書院の窓、丸木の柱など、一見にして古色蒼然たる、數百年前の者たるを知らしむ、此の庵は元は山の半腹にありて、古杉聳ち老松曲りて、幽景掬すべきのところ、懸水滴瀝のもとに閼伽をくみ、櫻花の繚亂たるを佛に供へ、筆端の動くところ、雲烟生じ、木石成り、百丈の飛瀑、谿水の淙々、山水の奇勝立に成りて後、肱を机に凭すれば、先づ書院の窓にあらはるゝは、前面に屹立せる瑠璃光寺の塔にして、春霞の靉靆たる中

より、模糊として手にも取るべき心地するに、右手は古城山そばだちて、天險欺きがたく、鴻の巣の山頂、旌旗南風にひるがへれるは、その左にあり。雲舟は此の自然の美景に對して、筆を練り禪を養へりしなり。今も其の跡、山のあからに殘りたり。此の庵の床に掛けたるは、山縣周南が雪舟の傳記を書けるにて、人名辭書に入れられたるは、此の漢文を譯せる者なり。雪舟、久しく山口に住せしにより、其の手によりて築かれたる庭、所々にあり、潮音寺の庭、吉敷村四の宮の庭も、雪舟がものせしなりとぞ、なほよく尋ねて、記すことあるべし。

一夕話（承前）

大宮兵馬

此の折ふしごとには、彼の明智光秀の妻は、いと貧窮に陥りしも、其の操正しくて、武士の心を失はざりきと、叔父君の、常にのたまひしを思ひ出で、

路芝の露に吾が身はやどれども
心はたかし山の端の月

など詠みて、自から胸の鬱情をば晴らしけり。行方千三郎といふは、若狹の人にて、叔父君の高弟なりしが、此の頃、己れに對し、梅田の姪なるに、まだ、家をだに定めず、さまよひさすらへるを嘆きて、いと懇に、文して、いさめおこせたりければ、己れ、其の返りごとに、おくに、

ともすれば惜しき命も棄つる世に
身の成り行はおろかなりけり

と書きつけてつかはしたりけるに、行方、更に、打ち返して、さほどの御心懸なからんには心おくてとなし。近頃は、手もよく書ける様になり給ひぬ。

御叔父の世におはしまさば、如何に嬉しく思すらむを、いで、御身をもいたはりて、國の爲に盡し給へかしと、また、懇にいひおこせたりき。其の頃は、正義家の、なべて、口を開けば外夷を拂はんよりも、先づ、朝敵を除くべしとの輿論なりければ、久坂、入江、佐世等の人々は、近き程に、所司代の參内せんを待ちうけ途にて討つべしとて、鎖襦袢どもの用意するに、己れは、其の縫物に賴まれて、夜晝分かず働きけり。此の所司代といへるは、己れが故郷なる小濱の城主なれば、其の御供にて、親族ども、許多上洛して、其の御館にありけるが、それが中には時々、己れをば、下岡方に音なひけり。或日のことなりき。己れは、彼の正義の人々の許にて、縫物などしてありけるに、人尋ね來ぬとて、下岡より呼びにおこせたり。歸り見るに、親族の

何某にて、其の者の語りけるやう、明日は、我が主公(所司代也)の參内あるべきなれ、浪士どものつけ狙ふことありとて、吾れらは、赤き絲の相印をば、各太刀の鍔にものして、互の目標にすべしなどとて、露も、己れに心置かざる樣なり。己れ、心ひとつに思ひ惑ひ、彼の正義の人々に力添へんには、此の肉身の人々に情立つまじく、肉身につきたらんには、正義の人々に誠立つまじ。今は、二つの道の義理にせまり、吾身は、いかになりゆくべきにかと、いと悲しさに、心もあうさきるさにおもひ亂れたりしが、やう／＼、案じ定めて、兎まれ角まれ、正義の人々につきなんは、我が叔父君の御心なり、いでや、所司代も討たれ給ひ、親族ども、失せなんには、己れは、やがて、自害すべしと思を決し、萬づ心にひめ置きて、親族の人々には、何事をも打ちあけざりし心の中の苦さは、言はん方ぞなかりける。



教の庭

皇孫殿下の御降誕を祝ひ奉りて

（日本女學校生徒）

君か代のいやさかゆくためしには
かゝるよろこびおほくあるらむ　沼澤こう子

みそのふのわか松みとりいろそひて
いよゝさかゆるうらやすのくに　小林しげ子

皇御孫のうまれたまひし今日の日を
わかおほきみもいはひますらむ　岩田さみ子

こゝのへの御そのゝ松もゝろともに
きみか八千代をいはふ今日かな　大平さり子

雲の上にさしそふひかりあふきつゝ
あをひとくさのいはふ今日かな　田中みち子

春の宮の御子のみあれにかきりなき
みよのひかりもそひにけるかな　鹽見まさ子

日の御子のみあれましける大御代を
いく千代かけていはひまつらむ　吉田みい子

こゝのへの御閨におひしわか松も
いさこかめさのよにいかされん　矢部しげ子

あまてらす神のみことにたかひなく
日つきの御子そさかえましける　阪田せい子

さきはなる竹のみそのゝわかみとり
いよゝいろそふ今日そうれしき　山内八重子

天津御子のうまれたまひて日の本の
くにのみはしらたつそうれしき　木村ひさ子

ひなつるはやかて雲井をかけるらむ
うふこゑたかしおほうちのまつ　百瀬松枝子

こゝのへの雲井にあそふひなつるに
きみかちとせのかけそ見えける　吉田まさ子

松か枝になくなるたつもこゑそへて
千代に八千代をいはふ今日かな　大宮きん子

君か代はさきはのまつともろともに
いよゝさかえん今日のめてたさ　片桐はな子

千代八千代よろつ代まても限りなく
さかゆる御代そうれしかりける　荒川やす子

さきはなる松のみとりももろともに
さかゆく御代をいはふけふかな　鈴木てる子

皇御孫のあれましゝ日をことほきて
いはふまとゐにあふそうれしき　丸貞子

あを山のさかゆるそのゝわかみとり
みかけをあふく今日そうれしき　川井田草子

こゝのへの御垣のうちにひなつるも
たみやすかれとうたひそめつゝ　小林あき子

かしこくも生れたまひしすめみまを　大西はつ子

ことほきまつるけふそうれしき

さきはなる御そのに生ひしわか竹は
よろつよまてもさかねゆくらむ　武田なか子

あきらけくをさまる御代と皇御孫の
あさひとゝもにさし出ましけむ　森岡もと子

すめみまのうまれ玉ひし今日の日を
千代に八千代といはひまつらむ　中津榮子

御園生にすこもるたつも今日よりは
千代に八千代とそらにまふなり　木村八重子

こゝのへの雲井にたかくひなつるの
千代に八千代のこゑひゝくなり　川田てふ子

こゝのへの御園にすたつひなつるは
千代に八千代とまひあそふらむ　笹原濱代子

つかすへき天津日つきのたかみくら
いく千代かけてさかねゆくらむ　鈴木たま子

松か枝にふちなみかゝる御そのふに
ひなつるのなく今日そうれしき　堤さく子

ひこみこの生れましゝはおほ御代の
いよゝさかゆるしるしなるらむ　日山ため子

我やとのかとにたてたる日のまるは
あさひとゝもに世をてらすらむ　依田しづ子

松か枝にみとりそふことすめみまの
うまれたまひしけふのうれしさ　石井臨子

彦御子の千代をいはひてたかさこの
をのへのまつにつるそまふなる　井上まさゑ子

おほみ代にうまれ玉ひしすめみまは
いく千代までもさかねますらむ　大江かの子

よろつよの末のみかとゝすめみこの
うまれたまひしけふそうれしき　小橋きよ子

日の本のゆつりをうけんひこ御子の
うまれたまひし今日もうれしき　早瀬ふしの子

彦御子のうまれたまひし今日の日を
いさもろともにいはひまつらむ　八木澤叢子

彦御子を千代に八千代といはふらむ
おほうちやまのともつるのこゑ　三宅いそ子

まふたつの聲もゆたけきおほみ代に
すめら御まこのあまくたります　芳泉ますみ子

おほうちのみそのゝ松のこととはに
すめらみまこはさかねますらむ　近藤せつ子

いく千代もかはらぬみ代に生れ逢て
ひつきの御子をあふくうれしさ　岡久津たけ子

雲ふかきたけのそのふにみひかりの
さしてたまひし今日のうれしさ　早矢仕みね子

天つちとともにさかねむすめみまの
うまれたまひし今日のうれしさ　宮武てる子

動きなきやまとしまねもいよゝまた
いしすゑかたくなりまさりつゝ　河村すゑ子

御園生のまつにすこもるひなつるの
千代よふこゑをきくそうれしき　木山田しづ子

こゝのへのみそのゝ松のわかみとり
さかゆく御代のしるしなるらむ　重田たね子

さきはなる松のこすゑにひなつるの
こゑもゆたけききみか御代かな　篠塚たけ子

みそのふの池のみきはにつるかめも　牧野千代子

すめらみまこをいはひてそまふ

ひこみこの生れたまひしめてたさを
千代よろつ代さいはふたみくさ　木村つる子

清やすきわか日のもとにひこ皇子の
あもりたまひしけふのうれしさ　林たま子

萬代はみそのゝたけのすゑなかく
めてたきふしをかされますらむ　藤東あき子

彦御子のうまれたまひしめてたさを
そらにも見せてつるそまふなる　鶴岡節子

さしのほる朝日かゝやくおほそらに
千とせをよはふひなつるのこゑ　宮武旭子

さきはなる松のこすゑにこゑすなり
まちにまたれし千代のひなつる　田邊豊子

天つ日とゝもにさかえんひこ御子の
ひかりをあふく今日そうれしき　武政すみ子

さかえゆくみ苑におひしわかたけの
すゑなかゝれさいはふけふかな　山室やす子

さきはなる御そのゝ松にひなつるの
ちよのはしめのこゑそきこゆる　山本さきは子

あをやまのさかゆく苑に千代そふる
ふたはのまつそ生ひそめにける　江面かく子

みその生の松のこすゑにひなつるの
こゑきく今日そうれしかりける　丸城さたり子

さきはなる竹のそのふのわかみとり
千代も八千代もさかえますらむ　本間ちゑ子

こゝのへのみかきの内のまつか枝に
ちよをしめたるひなつるのこゑ　清水つね子

さきはなる御園のまつのわかみとり
ちとせをふともかはらさるらむ　飯塚ちよ子

さきはなる竹のそのふのわかみとり
いよゝいろそふけふそうれしき　森島しづ子

皇御孫の御あれことほくもろこゑは
くにのうちとにひゝきわたらむ　加山きん子

御園生のまつにすこもるひなつるも
きみか千とせをいはふ今日かな　仲島りう子

あめつちとゝもに榮えんひこ御子を
ちよよろつよとなほいのるかな　松崎ゆう子

高さこのみねにそひゆるまつか枝に
きみか代いはふひなつるのこゑ　川野峰子

あふき見る雲井のそらにあたらしき
ひかりをそひしほしのかけかな　三輪かなり子

長閑なる御代をいはひてひなつるも
くも井にたかくまひあそひつゝ　篠塚きん子

もろともにいはひまつらむ安らけく
すめらみまこはあれましにけり　北川柳子

かしこくも生れたまひしすめみまを
千代八千代にさいはふ今日かな　原田ゑつ子

皇御孫のあれましゝ日さくにたみの
おなしこゝろにいはふけふかな　中村さだ子

あきらけくをさまる御代の皇御孫は
千代もやちよもいやさかえませ　寺澤つね子

こゝの重のくもゐに遊ふひなつるは
千代も八千代もさかえゆくらむ　飯島みき子

こゝのへのみそのにおふるわか松に　鹽見わさ子

今日ひなつるのこゑきこゆなり

もろともに祝ひまつらむあれましゝ
みこのよはひは千代に八千代と　中島さき子

みそのふにしけれる松のふかみどり
いく代かはらぬきみか御代かな　荒川のぶ子

こゝのへの雲井にすたつひなつるは
千代も八千代もさかえゆくらむ　城田しげ子

ひこ御子のみあれ祝ひてひなつるも
千代に八千代とうたふけふかな　成田しま子

彦御子のうまれたまひしけふの日を
御はたかゝけていはふたみくさ　松下ふみ子

天津日とともにさかえむひこ御子の
うまれたまひしけふのめでたさ　日向徳子

彦御子のうまれたまひしことほきに
ひとのこゝろもにきはひぬらむ　蛭海すみ子

君か代をかけつきゆかんすめみまの
あれましにきときくそうれしき　齋藤そよ子

君か代はまつのみどりともろともに
千代よろつ代もさかえますらむ　櫻井貞子

ときはなる松のこすゑにあし田鶴も
きみかちとせをいはひてそなく　岡田やす子

みそのふに生そふまつのわかみどり
いく千代までもいろはかはらし　堀越まち子

かしこくもあやにたふとき御皇孫の
うまれたまひし今日のうれしさ　和用きね子

あめつちと千代もかはらぬ彦御子の
あれましにきといはふけふかな　田口すみ子

あなうれしあなよろこはし皇御孫の
あれましぬとは夢にはあらしか　沼井あい子

くにたみのひとつこゝろに千代祝ふ
こゑあめつちにみちわたるかな　島崎いさ子

聲たかくくもゐのたつもうたふなり
きみは千代ませ八千代いませと　松長はるね子

すめ御孫のうまれ玉ひしめでたさを
いはひまつらむよろつたみくさ　坂本千代子

日の本のうまれたまひしひこみこは
いくちよまでかさかえますらむ　金城千代子

あれましゝすめら御孫の御ひかりを
のほるあさ日とあふきまつらむ　新名しづ子

むらすゝめちよゝゝふ竹のみそのふに
みとりくわはるけふのうれしさ　松本よね子

彦御子のさかえいませと日のもとの
くにのひとこといはふけふかな　湯地咲子

こゝのへの雲井にすめるひなつるを
御子のちとせのともと見てまし　松下ふみ子

かしこけさ千代田の空にひなつるの
こゑきくけふそうれしかりける　林あい子

榮えゆく御代にうまれしひこ御子を
あふきことほくけふのうれしさ　見形あい子

ひなつるの聲ものさけくみそのふの
まつのこすゑに千代よはふなり　百瀬松枝子

六月廿日兼題

旅中梅雨

天　下野國栃木町大字薗部　栗田口のぶ子

さみたれにたひのころもの袖ぬれて
　うらかなしくもかわくひそなき

評に曰、いひしらず、あはれふかし。

地　福岡縣三井郡草野町　鏡山増代子

五月雨のはれまをまつのしたかけに
　なほそてぬるゝたひころもかな

評に曰、めづらしからねど、すてがたきすがたなり。

人　肥後國鹿本郡來民町　野口靜子

旅ころもきなからのさとのさみたれに
　いとゝわひしくぬるゝそてかな

評に曰、旅のさま、よくよみたりといふべし。

秀逸　肥後　野田信子

かきくらしいや降しきるさみたれに
　こえなつみけりあしからのやま

○　大阪　伊勢村春子

たひ人のこゝろもそらもはれやらて
　ひかすさへふるさみたれそうき

○　下野　青木たま子

さみたれのはれぬ日數をかさねきて
　いとゝつゆけきたひころもかな

○　東京　岡田柳子

ぬきかふるころもたになき旅の身は
　いかにしてましさみたれのころ

○　駿河　佐野きやう子

するかちのたひゆく友とおもひつる
　ふしさへ見えぬさみたれのそら

○　東京　片山あや子

旅ころもはるゝまも奇きさみたれに
おもひくちぬるくさまくらかな
○　東京　内田とく子

さらぬたに露けきものをたひころも
日かすかさねてさみたれのふる
○　下野　寺井げん子

旅ころもきのふにけふとさみたれの
はれぬおもひをかさねつるかな

（以下原稿到着順）

のきなうつかりねの宿のさみたれに
むすびかれたるふるさとの夢　中郷瑞子

旅ころもしとゝにぬれてさみたれの
あめの日かすもかされけるかな　永井さい子

かくまても思はさりしなさみたれの
たびのそらこそわひしかりけれ　岡川良子

草まくらなかきたびねのさみたれに
いやしのばるゝふるさとのそら　徳永萬壽子

草まくらたびねゝやせのさみたれに
日かすふるさといさゝこひしき　徳永駿子

蘆のやにわひしさかこつたひころも
かわくまもなきさみたれのころ　徳永叢子

さらぬたにいふせきものを旅ころも
今日もぬれゆくさみたれのそら　鶴田貞子

たひころもしとゝにぬれて五月雨に
木曾のやま路をこひわひにける　佐々小學子

椰の實のうみはてにけりたひころも
ほすひまもなきさみたれのそら　佐々有郷子

五月雨にたちいてかれてたひまくら
またもわか家の夢むすふなり　源たけ子

つく〳〵ときけはかなしな旅まくら
のきはにそゝくさみたれのおと　林環子

さみたれの日をふるまゝに袖ぬれて
ほすひまもなきたひころもかな　吹田たけ子

たひまくらさひしき宿のつれ〳〵に
こゝろもしめるさみたれのころ　武田亀子

五月雨にくちやしぬらんさらぬたに
しめりかちなるたひのころもの　篠原薫子

さみたれの日をふるまゝに故さとの
さしのまさぬそしのはれにける　横井幸子

旅ころもぬれつゝむすふかりまくら
いへにかへらん日こそまたるれ　服部倫子

旅やかたのきのたまみつおさたかし
ふるさといかにさみたれぬらん　溝口貞子

かりそめの晴またになきさみたれに
こゝろもはれぬたびまくらかな　村瀬花子

故さとをこふるおもさのいさゝなほ
かわきかねたるさみたれのそら　戸賀崎治子

わひしくもふる五月雨にあけくれて　高橋松江子

こゝろはれせぬたひのそらゝかな

さみたれのしつくにぬれて旅ころも
ほすよしもなきこのころのそら　山根久子

さみたれにぬれそほちたる旅ころも
たゝしはしたにほさん日もかな　松尾やそ子

こゝろにも雲のかゝりてたひころも
ほすまたになきさみたれのころ　竹村竹里子

けふもまたさつきの雨のはれやらて
いさゝ日かすなふるたひちかな　河田いし子

ふる里をしのふかなかのたひの宿に
けふもさひしくさみたれのふる　坂本光子

さらぬたにゆくてさひしき旅ころも
たもとにそゝくさみたれのあめ　千石文子

まかれ路のたのしき旅もさみたれの
ふるゆふくれはかなしかりけり　松尾せい子

さみたれの雲のゆきゝをなかめつゝ
けさたちいてししらかはのさと　山田稲子

けふいくかこゝろも晴ぬさみたれに
ぬれつゝこゆるさよのなかやま　山田米子

友もなきたひのやかたにつれ／＼と
ふみ見てくらすさみたれのころ　近澤和子

かきくらしなやみもやまぬ五月雨に
たひのころもそいとゝつゆけき　瀧野たに子

たひにありて家路こひしきゆふ暮に
いとゝいふせきさみたれのそら　用井田草子

日をかさぬ旅寝のとこに驟雨ぬれと
なほさみたれのそらそものうき　天野みち子

さらぬたにさひしきものを旅ころも
なほそてぬるゝさみたれのころ　谷崎まつも子

さらぬたになれぬ旅路をさみたれに
いやぬれまさるわかたもとかな　中舘やう子

さらぬたに旅といへはわひしきを
はれ間もみえぬさみたれのそら　武藤いね子

五月雨のいやにふりきるゆふまくれ
たとるたひちそわひしかりける　金津文子

かたりあふ友たになくてけふもまた
さみたれくらすたひやとかな　小田みち子

さみたれにそゝろありきもうち絶て
ひとりこもれるたひやかたかな　加藤花子

うたまくら尋ねかねつゝけふもまた
つれ／＼かこつさみたれのそら　竹村貞子

ふるさとはいく重の雲かへたつらむ
はるゝ日もなきさみたれのころ　名取正代子

けふ幾日ふりつゝくらんさみだれの
たひのころもゝほしあへぬまて　椎野秀子

ぬれつゝもいそきて越ゆん旅ころも
きそのやまちのさみたれのころ　椎野紫子

ふる里をしのふこゝろにいとゝなほ
たびれわびしきさみたれのころ　太田みつ子

わたるへきあすの川瀬もおもはれて
たびれわびしくさみたれのふる　日高かず子

草まくらたひねのやとにさみたれの
ふりつゝきてそさひしかりけり　宗絢子

今日もまたむなしく暮ぬうきたひに　田城きぬ子

いくかへぬらむさみたれのそら

さなきだにものうかりける五月雨の
　はれまもまたてゆくたひ路かな　島釣みさ子

うきたびの日數かされてたちいてし
　みやここひしくさみたれのふる　樋口孝子

いさゝしく旅のあはれもしられけり
　さびしさまさるさみたれのころ　松崎くま子

ひ數へてこゝろいふせきさみたれに
　なみたもそはるたひのそらかな　飯島いま子

さみたれに濁車のうちなる旅ころゝ
　かへりみぬらすわかいへちかな　服部萬子

いそかすは宿にこもりてあるへきを
　たひちはひしきさみたれのころ　服部正子

さみたれにそてはぬらさぬ旅なれさ
　いふせさはれぬきしやの內かな　河合縫子

鐵路ゆくそてさへしめるさみたれに
　むかしのたひをおもひこそやれ　三宅中枝子

ちきり置し日かすはたてさ五月雨に
　かへるすへなき旅にもあるかな　岡田春子

ふるまゝに日數かされてたひころも
　ほすひまそなきさみたれのころ　戸塚鐵子

五月雨にふりこめられてくさまくら
　おもひの外かに日かすつもりぬ　山田たか子

ふるさゝのすゝしからんさ思ふにも
　あつさいやますたひのさみたれ　竹澤竹子

さみたれに淀のわたしのたゆこより
　おもはぬたひの日かすへにけり　中島泉子

さなきたにしめりかちなる旅ころも
　なほぬらせさやさみたれのふる　縣子玉枝子

さなきたにかわくひまなき旅まくら
　いさゝぬれゆく夜半のさみたれ　宇佐美まつ子

くさまくら露にはなれし身なからも
　堪へかねけりなさみたれのころ　奥村英子

けふもまた空かきくらしさみたれの
　はれぬをわふるたひのやさかな　伊藤田富久子

さみたれのはれぬ思ひなかされつゝ
　たひのころもはひちまさりけり　中島さく子

さみたれのかさやさりしてふる里の
　さもにあひけりわれたひにして　山口すみ子

けふもまたふるさみたれに袖ぬれて
　おなしやさりになかめくらしつ　高石登代子

なほいく日降りなはかりの旅ころも
　くちやはつへきさみたれのころ　登山功子

さみたれにふりこめられし旅のやさ
　今日もわひしくゝらしけるかな　北島操子

たゝひさりやさる旅こそわひしけれ
　こゝろもはれぬさみたれのそら　北島松子

六月廿日兼題

某瀑布に遊ぶ記

人　福井縣　田中たちい子

むしあつき、蟬の聲は、いとゞ苦しげに、庭の木

立に、きこゆるのみ。軒端にかけたる風鈴も、風なくてならず。いと堪へがたさに、日頃好める文さへもえよまでありしに、ゆくりなくも、心あひの友より、某瀑布に物せん。いざもろともになど、文もて云ひおこせたり。いとうれしくて、さらばとあはたゞしく出で立つ。さて、道の程、いとけはしければ、互に、はげましはげまされつゝ、汗ぬぐひ、坂路をたどり行に、暫しへて、雷の様なる音遠くに聞ゆ。すはや、近き所にもあらんかと、皆々いさみにいさみ、行けども〳〵同じやうなる道のみにて、たゞ松杉などのみ見ゆ。かくて、みな、あまりに疲れ果てゝ、しばしやすらひ、遥かあなたを仰ぎ見れば、あなうれしや。遥か向ひに、白き布をさらしたる如くに見ゆれば、皆々よろこび。勇み、唱歌など謡ひゆきゆけばやうやく瀑のもとへとは着きぬ。やがて、岩根のこゞしき所に腰打ちかけ、見上ぐるに、瀧は天より一くだりに落つるが如く、其の長さは、いくほどかあらん。音は、數千の雷一時に落つるが如く、互に語り合ふ言の葉さへえわかず。下よりは水烟たちのぼり、石つばのあたりは、何ともえもわかず。そゞろに、肌のいとゞ寒くなるまゝに、わらはの如き弱き心には、神氣もうとしくなり、手わなゝきて、ほとほと物忘れしぬれば、感ぜし事もいと多かれど、口つぐみてえ云はずなりにしかば、家に歸りて、たゞ、其の見しまゝを、あら〳〵かきつゞりしになん。

人

石川縣金澤市早道町六十一番地 赤倉かね子

我やどより、南一里ばかりに、一筋の瀧あり。去る五月廿日、我友垣と共に、母なる人にともなはれ、やう〳〵にたどりゆきぬ。こゝの眺めいとをかし。後は山に、前は、また、犀川とて名も高き大河にて、岸のやなぎの影きよく、彼方此方に、小き舟を漕ぎ行くもあり。山の彼方に、どう〳〵とひゞく瀧の音のすさまじさ、彼の名高きぬのびきの瀧も、かくやと覺ゆ。瀧の此方にて、小女の高き聲して唱歌を唱ふるもあり。これも遊ひの一むれならむ。かしこにはしり、こゝにつどひ、心ゆくまゝに遊びたはふれて、家路の空もうちわするゝころ、母君のよび給ふにおどろきて、あかぬけしきに別をつげ、犀川の下流に、夕日のうつろふ様など眺めつゝ、歸るさのたのしさ行きいつかれさへわすれはてぬ。かくて、家につきしは、日はすでに、山の端にかくれたるころなりき。

八

相摸國小田原　大谷津峯子

あら金の土もさくてふ葉月の某日、朝風の、いとすが／＼しき頃、家を出で、親しき友垣三人と、湯本なる玉だれの瀧に遊ぶ。園内いと廣く、くさぐさの木どゝ生ひ繁り、心地よき事いはん方なし。み池の中に躍る鯉も、いと樂しげに遊ぶめり。ややありて、瀧のほとりに至るに、時ならぬ霧雨の降りかゝりて夏としも覺えず、いとすが／＼しく、げにいかめしうそびえたる巖に、さながら、水晶のすだれかけたらんやうにて、岩間よりほとばしり出る水の、碎けて玉となる樣、えも云はれず。折ふし、旅の人ならむ、二人、瀧にうたれつゝありけり。淸らかにすめる水の、鏡の如くなるに、試に掬ひ上ぐるに、いみじうも冷し。友かきの一人、われらも戯に、此中に五分間立たばやといはるゝに、三人して、冷さを忍びつゝ立ち居しが、妾は、遂に得たえで上りぬ。暫く茶店にいこひ、再園内をすゞろありきつゝ、家づとにもとて寫眞など求めてかへりぬ。

（以下原稿到着順）

中郷瑞子

きら／＼と照る日は、なさけさいふことを知らざるか。暑さに苦しむ踏ろびさに、うしや、涼しき風を吞みて吹かせもあへず。余

なもさからす光もて、聞ゆる人ないり殺さむず計りの勢に、居所もなく、いかゞはせむと思ふ折しも、日頃親しきみよ子の君め、ふりはへ訪ないひしに、先づ、此の暑さを知らぬ所やあらむかと尋ぬれば、されよ。妾も、御身と塔坂山のふもとなる杜の瀧に遊ばましさて、かくはおさづれしぞさ宣ひしかば、日も、また、正午にひまあれば、いざ、今より行かむさしつらへて、もろともに家をばあさに、おぼつかなくも、街道を廻るに、さらでも暑き此の日の中に、布子一ト重の傘をたよりに、燃焼たる道の砂をほこしつゝ、一ト時あまり行く程に、つゞらたりなる細道にかゝりしがいさゞ險しきに、胸も、いさしくるしけれど、虎穴に入らずむばと何さやらむを思ひ浮べて、かたみにはげまし、玉なす汗をしぼりあへず、昇り行く程に、瀧の音の木の間を縫ひて聞ゆるに、いさみつゝ、やう／＼、そのさころに着きぬ。見上ぐれば、思ひしにもまさりて、あな壯大の景色やな。屛風立てたらむやうなるいさ高きより漲りおつる琥珀の水、岩にかまれて白玉さちり、霧さみだれて降りしきり、千すじの白糸亂れ下るは、天女がさらす羽衣か。山姫が織り出したる白布か。有爲の調の音たてゝ、底の玉くづかき亂し、ま白きさばりを寄せてはかへす、其の樣は、げに、その名に負へる杜の宮居奥深く浮けき玉のうてなの上に、うましき「エンゼミヲン」の舞ひ出てしかさあやしまる。龍のわだかまり、虎のうそぶき、獅のおごれるごさくさま／＼のめづらかなる岩いしの中を、しづ／＼さぬひて流るゝしほらしさ　まいて、水面の如くすきさほり、はらばひにおほひかゝれる老松の葉、一さはもみださず寫しつゝ、幽かの聲して流るゝ上に、緑の裂のしたゝらむ計りの夏木立、日さへ遮りて、肌すくう風そよ吹きて夏もなげなる其の涼しさ、浮世を遠くかけへだてし此の仙境のすぐれし景色には、名たるゝ畫工も筆を焼かむ。敷島の道に深きみやびな

も、アゝさばかり歌も得出でざるべし。あまりの勝れし景色に、暑さも、さみにわすれはて、分れて流るゝ、いさゝ川に足ひたしつゝ、珍らかなる草なぞ摘むほさに、日あし、やうやうのびゆくにおごろき、さらばさ共に、のこりなしきをむげにすて、もさ來し道に立ち出づるに 梢をわたる松風は、無絃の調をかなでつゝ、我らが歌ふ唱歌に和して、歸りの人を慰さめ顔なる、まことにゆかしき限りここそ。たそがれごき家につき、夕涼の台の上に、團扇片手に、今日のことゞも妹に語り聞かすに、み空の星も光さゐて、我等の話しを聞かまほしきさまなり。

佐々有鄰子

此のころ二人三人の友どちうちつどひ、二十一代和歌集の講會を催しけるに、妾かよむべきものは、拾遺和歌集。卷第九。雜下の卷なりき。紀貫之が。春秋におもひみだれてわきかねつ時につけつゝうつるこゝろは。さいふ歌より、四十八首にあたれる歌のはしがきに、淸原元輔肥後守に侍けるさき、かのくにのつゞみのたきさいふところを見にまかりたりけるに、ことやうなる法師のよみ侍ける、おとにきくつゞみの瀧をうちみればたゞ山河のなるにぞありけるさ詠下せば、次席に侍りし春子さいへるが、此の國に生れし身にして、鼓の瀧みぬこそ口をしけれさつぶやくを、前席の藤子少女が 打みまほしさ口すさみぬ。そはよきことに侍れは明日つさめてよりさ、滿場賛成せり。在明の月影ふみて 鎌ごぎさいふ坂路さして、歩行より出立し人々は、昨日贊成の人の他にも、一人二人は増しゝなるべし。躑躅山吹をりしりかほに花さきかゝる九十九折の路をのほりて、金峰山さいふ山の中腹より、赤坂路を下れば、靈巌洞さいふにいたりぬ。しばしやすらへば、こゝなん楡垣鳳が信仰せしさいふ觀世音を安置あり。ことやうなる法師ならねご住僧あり。鼓の瀧に今日ものし侍るに、いづこの路よりせばよかりなんかさ問つれば、住僧ほゝ笑て、元輔ぬしならぬ讀たちの、路ふみまよひたまはんことの心にかゝればさて、鳩杖ひきて、柴門を出で、後の山さして導きぬ。山路をたごること數丁にして、石ふみたてり。苔深くむして、文字の彫刻淺ゝして見わかれつるを、僧の指さして、これは、淸原の君に歌よみかけし、ことやうなる法師の 鼓の瀧の歌を彫れるなりさ教へられぬ。こゝより、すべるやうにしてしばしゆけば、瀧の上の巖につきぬ。春の末つかたになれば、谷川の水いさきよらかに、落瀧岩角にふれて、音するさま、實に、山かぜにしらべあはする鼓かさことゝなされて、打つれたちし友かきの、耳かたふけたるぞをかしき。導の僧は、瀧の下津瀬を渡りて、河さいふ里に立ちさりぬれば、秋をわかちてもさ來し山路よりかへるさて、

春風にしらふる鼓の瀧のおさは
耳をすましてなるにぞありける

鎌田ふみ子

おのれ、去にし日、學び家を出しより、友もなく、いさつれづれに暮し居たりしが、今日は、いさも長閑けき日なれば、日頃のうきをはらさんさ、春に浮るゝ蝴蝶になりて、何づくかの花たつねんさ思ひ立ち、こゝかしこ眺め居りしが、あなたより、なつかしや。同じ學び家の友垣數人はるばる來りで、菜摘布をたづればやさ云ふ。妾、未た見し事なければ、喜びいさみて、父母の許を得、直に家を出でぬ。みちすがら、別れてよりの事など問ひつ問はれつ歩みしが、いたる所に、太りたる老木細き若木など、咲き揃ひ、そよ吹く風に、芳ばしき匂ひを送りつゝ、ゐもいはずおかし。行く事一里ばかりにて某村に達す。又歩む事數丁の間は深山きはめて物さびしき處を過ぎ、又見しらぬ草木にふれ、又は山水を賞しつゝ、かばかり遠き道も、知らずしらずの間に志す處に

着す　先づ晝飯を食し、それより、打揃ひて瀧見の處に行きぬ。此瀧はあまり大なりと云にあらず。其の音も、格別甚しからざれば、近う寄りて仰ぎ見る。山上には種々の老木おひ茂り、其の高さは　天をも凌ぐとが思はれ、水は誠に天より落る心地すれど、幅せまき爲め、恰も、天より一すぢの白布を流したる如く地下に下る。其の下るや、石面に水砕け、色白き雨となり霧となりて、四方に飛び散る有様は、何にたとへん樣もなし。あたりの草木は青々として、恰も仙人界に入りし心地　。眺めはいまだあかざれど、管り樹の長き春の日も、はや西にかたむきしかば、名殘なしくも歸るさの道につき、皆々別れて家に歸りぬ。此一日の遊行にて日頃のうさもはれ渡り、神氣誠にさわやかになり、ふしどに入らんと、せしも今日見し事の忘れがたければ、いさゝか筆をとりて後日の爲めとなす。

矢作きく子

妾終日讀書しけるに、某友來りて觀瀑を促す。欣諾明朝を約す。早黎家を出で、山間を行くこと四里許にして古口村に至る。最上川の流れに添ひて行くことわづかに四拾八瀧の觀あるを聞きて、漸次に觀瀑しつゝ草なぎ村に達す。漸く響々の段々たるを聞く。以て四拾八瀧最一の白糸瀧の遠からざるを知る。舟を雇って其地に至る。果して見る。絶壁數仞、衝激震撼、泡沫飛散して驟雨の至るが如し。其の壯狀名の如くにして以て筆すべからず。時に三伏の天なるを覺ゑず心胸洗ふが如く、妾等快と云ふこと數回、時に群鳥啞々として歸を促す。即ち、滿身涼を負ひて古口村に至り、車を雇うて家に歸り、燈下に餘興の一分を記す。

松井りう子

余、偶々、友人と共に、日光山の中に至り、華厳瀑布を見る。直下數千丈　之を望むに雲際より落つるが如く、數千の素練を空中より垂るゝが如く、之に近けば、其の水の巌石に當り、相激し轟々として響を發するもの、恰も數百の雷霆一時に山獄を劈くが如く、盛夏正午と雖も、人の心魂をして、俱に冷かならしむ。元より、本邦に一大瀑布の一と聞きしは、更にも然りと覺ゆ。余、初めて、日光山に登りし時は、既に風雨の至るかと驚きけり。愉と稱し、快と呼び、實に、天然の壯觀と云ふは、之なるべしとて歸れり。

評に曰、前のも是も意は聞ゑたれど、彼の作文五百題五千題などいへる明治初年に出版せられたる、作文書の例題の拔書めきていとうるさし。抑この漢文直譯躰の文体は、卑しく正しからぬ体にて、さしも盛に用ゐたりし男性の間にてだに、今は、稀に見るばかりになれり。女性の、今猶、これを用ゐるにいたりては、むしろ、意外の感あり。たゞ、書かれて送られし其の劣のいとほしさに、すてもかねつれど、これよりは、滑稽綱安藤氏の作文雜話、その他、この頃のよき人の物せられし作文參考書等を繙きて、女性にふさはしくて、見苦しからぬ体をかきならはしめむことを望む。（記者）

黒田はま子

さいつころ、我が郡内なる白糸の瀧に遊べり。誠に、我が郡第一の瀧なり。幼きより聞きわたりしには似もやらず、そのさますぐれて異なりき其の瀧の全体の趣を替へ云はゞ、天女の布をさらすが如しともいふべく。而して、瀧の落つる處には、幾尺なるか底もあらぬ程の淵あり。其の兩側には、大木の杉多く繁りて、遠方より之を望めば、瀧は杉の間より出づるが如し。恰も、白雲林の間に隱見するやうにて、其の壯觀云ひ盡すべからず。

金津ふみ子

炎熱熱すが如く、流汗淋漓、恰も、身は釜中に在るが如く、煩悶

轉々たる此、親しき友の我が、門を訪ふて今日の日曜を幸ひに神路山の大瀧に遊ばんといふ。欣然之を諾し、手をたずさへて門を出で、五十鈴川の上流を經て羊腸たる小路を登る事數丁にして、路きんど途たえたり。此處にて暫く休らひ、杖を再び取りて、谷ぞひ道をたどり、小川の丸木橋を渡りて行く程に、かすかに瀧の音聞ゆたり。是に於て、各勇を起して歩を進む。上りつ、下りつ、岩坂を行く事數丁にして、漸く瀑下に達す。嗚呼、千丈の瀑布は、轟然として雷の吼ゆるが如く、潭中の巖勢、開張晴洲珠をそゝぎ水を吹き空に騰つて飄蕩す。峨々たる山谷に瀑布のありて、其の岸々流れて、五十鈴川に出づるといふ。古杉老松の間より みむす、恰も素練をかくるに似たり。此の神路の山より新樹空につらなり杜鵑血に泣くの妙趣自然の山影瀑影眞に奇絶又怪絶といふべし。茲に恒子といへる友の歌ひて

わすれじな君と手に手をとりかはし
　共に神路のたきを見しこと

我れもまた、

いつまでもながめはつきし神路山
　大瀧のわたりすゞしきこころ

と、とかくする間に、日は西山に傾きぬれば、いざ歸らんとて女子のかよはき足にて、故道をたどり、家にと歸りしは宇治橋のわたり電燈のつきし頃なりき。

岩まより落ちくる瀧の白糸は
　むすばで見るも涼しかりけり

成方



樂園

吉野記行（其の三）

下田義天類

十八日（承前）花のやうすはいかに。吉野の花季けよくさぐり得たりやあどあるじに問へば。すこし過つらむかとおやぶまれ侍り。吉野は大かたあらし山の花とそのをりいくらもたがはざるけあり。あらし山はおとつひよりちりそめたり。今日あたりは大かた散りはてつらむと思ひやられ侍り。あらし山の花ちりはてたる後に吉野へゆきてかの地の花み侍るよしかねてきこしめしおはするげありしがさはあらじとか承り侍り。このごろかしこ

のこと能く知れるものにまた聞きあはせつるにかしこの大かたはあらし山とさまではおくれさきだゝざるよしなれば先つ日棚橋ぬしとも申し合せてハナサルとの電報をうたせておどろかし參らせたるにて侍り。きのふよしのよりもどりし人のものがたりに下の花は早ちりはてたり。中の花今見頃なるべしといへり。棚橋刀自も心許なからせ給ひつゝこゝにて猶待せ給へりなど安彦早苗等がものがたるほどに棚橋刀自も奥なるはなちいでより出でおはして御聲をきゝつけたればまづはおちゐ侍り。さぞかしつかれさせ給ひぬらむ。都をばいつ立せ給ひしかとまめやかにかたらはせ給ふ。朝いひしたゝめて行くべき道のほどなど問ひ糺して然らばこれよりたい越に吉野へ向はむ。さるまうけせよなど安彦早苗等にあつらへて用意せさす。安彦が早くそなへおきたる吉野町なる東南院への

添書あり。花時はかの町なるはたごやどもに善からぬえせわざするも多くかつは人多く立ちこみぬる時は宿るべき所も侍らぬこと侍れば早く愛知なる柴田良造ぬしの許へいひやりてかの人よりの添書をこひ置きたり。先つとし安彦がかの地へものせし時にも柴田氏の添書をもてゆきて彼の寺にやどかりにき。いともの深き寺にて宿屋にものせむよりは興ある所なり。彼の地へいたらせ給ひて若よろしき宿も侍らざらむ折のそなへにせさせ給へ旅つゝみの内へ入れ置き侍らむ。滊車の路すぢは此の圖にあり。道のほとりの名たゝる所々のことは此の書にこまやかなり。

滊車のわりびき切符もとゝのへ置きたり。さゝへひさごもこの内になどいたらぬ隈なきこゝろもちゐによろづのことといふがまに〳〵聞きしたゝむるあひだに車來たりといふ。さらばとてこゝをいで

たらたるは午前の十時すぐる頃にもやありけむ。午前十一時七條より奈良鐵道へ乗込みたり。汽車の雑踏いふばかりなし。袖つらねたる棚橋ぬしのものいふ聲すらきゝ取り難き程なり。此の程に道中記さぐりみむと思ひなりて京善要誌などひも解く。伏見の停車場は知らぬ間に過ぎて汽車のとゞろきとたえたるに驚き見れば桃山の停車場なりけり。その名にちなみて植ゑたるにか。桃の古株こゝら立ちならべり。皆土際より伐りたふしたり。きり株の後よりかづ〳〵若芽を出し其の若芽どもに一ッ二ッづゝ薄いろの珊瑚に似たる蕾をつゞりたるいひしらずあはれなり。彼の樹のさかりなりしほどはゆきかふ人のまなさしをもうばひけむをと思ひおこさるゝにかたはらの畑のくろに花あふひの若芽あを〳〵と立ちのびたるさへあり。

おひつかむものならなくに桃の花
　　匂ふもあはれきりしふる根に

そゞろにむかしのこと思ひいだされてあらぬことをまで書き續くるあひだに汽車は木幡をさしてひたすゝみにすゝみゆきぬ。木幡宇治など過ぐる間右に左に茶園いと多く立ちつゞけり。世に名高き宇治の茶園は即これなり。芽たちもまたいとくきたゝぬは寒き所なればにやあらむ。肥料の能くゆきわたればにやあらむ。横濱の一番船はけふあすの程に出すべき頃ほひなるを猶ひとむかしばかりの日數を經ざれば新茶は得がたかるべきさましたり。かつて聞く茶に何むかしといふ名の多かるは彼岸より廿一日目にあたる頃摘みそむ爲故に廿一日の三字をあはせて昔ととなへさて初つみを初昔といひそれより次の廿一日目に二番芽を摘みたるを大昔といひしより何むかしくれの昔などいふ名の多くなれるなりと聞きし

が彼岸よりかぞふればけふはひとむかしを過ぎたる日數なり。さるをまだ摘みとるべき芽だちに伸びたらぬはいかなるゆゑにかあるらむ。瘦地の茶は芽たち早く肥地のは芽たち遲く肥料を多く施す時はその芽榮えいよ〳〵遲しとか聞ゆればさるゆゑにもやなど思ひやる。亞米利加送りの茶は早きをもてよしとするゆゑに靜岡三重などの暖國よりいだすを常とすれどもその質はきはめて劣等のものなり。本場の茶はその質はよろしかれども多く內地へひさぎて外國へいだすことをめあてとせざるかたむきありとかある人に聞きたることのあるはまことにや。はたして然らばいと口惜しきわざなるべし。國の內外によりて需用者のこのみもおのづからことなる所あるべけれど亞米利加人なりとて質のよきはおのづからよしと見分くるもの多かるべければよき質のものを多くひと國へおくりたらむにはよき名もおのづからたちぬべし。さてその誠のよろしき味をさとらず早きをこのむ彼の國人のならはしも自然あらたまるべし。つまる所供求額多からざる爲に內地の需用者に供するに足らはで輸出すべき品ものをばつくりいださぬにもやとぞおしはかられぬる。

彼の多かりし人々の大方木幡の停車場にて下車したり。黃蘗山へまうでむとする人々なりけむかし。このあひだ、こはた山、大藏の池、橘の小島の崎、など歌枕も多く宇治のわきいらつこの御陵、平等院の芝が扇などいにしへしのぶ所々も多かれど汽車の旅路はまゝならざればいかゞはせむ。せめてもの心やりにとて棚橋ぬしの望遠鏡をかり得てながめわたすうちに宇治川をも越えつ。

ものゝふのいのちと越へしうぢ川を
車ながらにわたる御代かな

後悔

ゆり子

庭のをしへを　よそにして
まなびの道を　たどらむと
みめぐみふかき　たらちねの
たもとはなれて　たゞひとり
千里のそらの　旅ごろも
かさぬる春も　程すぎて
かりのたよりも　しがてなる
うれへにしづむ　をとめあり

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

わがふるさとを　しのびねの
その有明の　ほとゝぎす
かすかになのる　一聲を
人はうれしと　きくらめど
なみだくらぶる　我が身には
はらわたをたつ　おもひして
千々にこゝろの　みだれつゝ
あやめもわかぬ　物おもひ

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

みどり色そふ　夏こだち
枝もしみゝに　さかえきて
たちよる影は　多けれど
我をおほはん　人ぞなき
かきくらしふる　さみだれに
しのぶの露の　まさりつゝ
しづむなげきの　かずそひて
あやめもわかぬ　物おもひ

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

みひとつの　いかになりなむ

樂　園

見(み)るものも　さくもなげきの
　　種(たね)としげれば

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

なげきの種(たね)を　まきそへて
　みのなるはてを　おもふより
今(いま)をさかりと　咲(さ)きにはふ
　やどりの庭(には)の　かきつばた
みぎはにしげる　花(はな)あやめ
　むらさき深(ふか)き　この花(はな)の
色(いろ)にこゝろを　うつしてぞ
　うれへの春(はる)は　へだてゝむ

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ゆかりの色(いろ)の　ゆかしさに
　むかし男(をとこ)の　そのかみも
そゞろにおもひ　わたされて



たびのアつ橋　あらねども
中々ものゝ　こひしきは
これもうれへの　くさはひか
しこかきつばた　花あやめ
あやめもわかぬ　物おもひ

＊　＊　＊　＊　＊

かねてより　かくと知りせば
たらちねの　をしへの庭は
いでざらましを

去年の今夜

彦峯生

（一）

東京市牛込區何町とさすがに、町名を與へられて

は有るが、坐にして稲田も見え、畠にはたらく農夫の影さへ見える、餘程閑靜な地といへば、大概、土地がらの想像もつくだらう。

そこに、質素な家構で、表の門標には、たゞ青山とばかり書いてある。聞けば、あはれや、彼の二十七八年戰役に、名譽の戰死を遂げられた、青山參謀中佐の未亡人が、三人の遺子を養育てゝ居らるゝのださうだ。

でも、それでは、あんまり彼子が、可憐いさうで御坐います。

何事の起つたのだらう。未亡人は、無理に隱さうとして居るが、睫毛の間には、露の樣に爭そはれぬ證據が、心の切なさを傳へて居る。

あに、可憐いそうどころか。結句、どんな仕合にあるか知れませぬ。飛んだ學者の生意氣女は、世間の姑の嫌物です。

年の頃は、未亡人とは二十から上も違つて居るだらう。頭には、早や、白髪も見えて、たしか五十五六、六十に近い。而して、どこやらに氣味のよからぬ相のある人である。

未亡人は、猶、なにか口重げに言はうと爲て居た時、玄關の障子と間の襖子とを一時に開けたと思ふ程、威勢よく、七歳ばかりの愛らしい兒が、つと入つて來たが、突然、

御母さん御母さん、姉さんは、落第だつてね。

未亡人は、遂に、ほろりと膝の上をぬらしたのを、あわてさま拭きながら、其の顔も上げないで、

御あいさつも爲ないで。何といふ御行儀ですか。

と、何時になくきめつけられたので、にはかに、行儀正しく、御客人に一禮し、直に、また、威勢よく、次室、即ち、姉の勉强室に入つて往た。

未亡人は、其の方を見るやうな、見ないやうな。しかしながら、しばらくは無言であるので、御客人も、頗る手持不沙汰なので、

イヤ、また、近日來ませう。よく御考へなさるがよい。

と、そこ〳〵に歸つた後は、下女のお鍋が、於米を洗ぎながらお隣のおさんと、垣根ごしに何かおしやべりをして居るのが、聞えるばかりで有つた。

（二）

三人の遺子といふのは、長男は、武男というて十八歳、昨年幼年士官學校へ入校し、次は、靜子というて十六歳。これも昨年某女學校へ入學して、日々本郷の遠方まで通學して居る。末が次郎といふので、これは、今年から小學校へ行かうといふのである。

靜子は、十三の時に小學校を卒業したが、其の後は、とかく病氣がちなので、學校へも行かなかつ

たが、もう身體も健全になり、殊に、少しおくれては居るがこれからの少女は、普通學問もなければといふので、昨年、その女學校の入學試驗に及第して、三年生になつたのである、しかも、氣の毒なことには、その秋の初頃から、未亡人が、何とやらいふ病氣で、永い間、病蓐に居られたので、靜子は、學校から歸つて後は、夜ふくるまで、いつも、その介抱看護に、總べての事をわすれて居た。中佐の兄で、この東京に住んで居る某といふ人もあるが、これは、壯いから、貨殖の事にばかり心をかたむけて、子供の教育などいふことには、とんと、頓着しない人である。

未亡人の里方では、先年、北海道に移住して、今は、東京に、便になるべき人は居ないといふ、ことである。

（三）



例刻より、はやう晩餐を終うて、未亡人は、直に、心地病いというて寢まれ、次郎も、しばらく、玩具の軍刀を振りまはして、お鍋に戰を挑んで居つたが、間もなく是も寢てしまふ。お鍋も、もう、そろ〳〵寢仕度をするらしい。

靜子は、ひとり机に對つて、書くともなく讀むともなく、たゞ、額をなで、眼のあたりを拭ひ、或は、袂の先をかみしめなどして、煩悶して居る。

母樣が、自己の病氣ゆゑに、お前にまで不面目な思をさせてと、勿體ない御詫言の何の心におこたりさへ無かつたなら。皆、自分の過失であるのに。もし、こんな事で、また、御健康が惡うでもなつたら。あゝ、勿體ない勿體ない。

また、伯父樣が、折惡う御出になつて、例の通り退校を御すゝめなさる。斯うなつては、何と言られても詮方はなし。それに、丁度、知つてる華族樣に人を尋ねて居るから、そこに上げて、行儀見習さした方がよいッて。

あの、御隣の御うれしさうな御話は、優等の賞與を御貰ひなさつたのだもの。お何歲だらう。十二。十三で、やッぱり、もう三年生だは。最前、次郎さんが、私の落第のことを母樣に言つてたが、多分、お隣の鈴子さんが、言つたのだ。御自分は御嬉しからうけれど……

あゝ、何やかや、遂には愚痴もでたり、口惜しかつたり。たゞ、自分が、平素の不勉强ゆゑと、われと我が心を慰さめとし、靜めやうとしても、あひに〳〵、今日學校でのつらかつたことなど、くりかへしかへし思ひだされて涙が出るばかりで、心は、ます〳〵、亂れて行くばかりである。

雑報



○天恩海岳

●聖恩枯骨に及ぶ　今上陛下の御仁德に富ませらるゝは普く、億兆臣民の欽仰止む能ざる處なるが、陛下には、先頃岡澤侍從武官長を御前に召させられ、曩に北清の野に戰ひたる、帝國軍隊引揚の期も迫れるに付、彼地に於て陣沒したる文武官の勳功を後世に貽すべく、就ては、陣沒せしものゝ寫眞を始め、武具、其他、苟くも當時の狀況を想見するに足るべき遺品をあつめ、宮中に飾り置き、時に臨みて其の忠勇を思ひ出す料にせばやと、思ばさるゝ旨を傳へ給ひしにぞ。侍從武官長も、聖恩の有難さに頓に御答へ申上ぐる辭もなく、御前に伏して、暫しは感涙に咽ぶのみなりしが、やがて、謹みて、聖旨を承り、御前を退出し、早速其の手續に及びたりと云ふ。地下の將士等、聖恩の海嶽無量なるに感泣すべく、かゝる、帝をいたゞける我々億兆の蒼生誰か奉公殉國の誠を効さざるものなけんや。

●東宮殿下の御巡航　皇太殿下には、去にし三日横須賀御發艦にて、近海御巡航の御豫定なりしも、雨天の爲め御順延相成りしが、愈々五日午前九時二十分葉山御用邸御出門、同五十九分逗子發列車にて、横須賀に行啓、同所より小艇に召し、高山太夫、高辻侍從長、村木武官長等を隨へさせ、同十時三十五分有栖川宮威仁親王殿下と共に、軍艦磐手に乘御、同十一時を以て御發艦、午後一時卅分御豫定通り、館山に御着相成り頗る盛大なる、

官民の奉迎を受させられし由。同艦は、英國より到着後日深からず。其構造最も新式の一等巡洋艦なり。艦長は、海軍大佐山田彦八氏にして、一等巡洋艦出雲、及水雷驅逐艇雷の二隻は、護衛艦として、磐手に、随行せりとぞ。而して、皇太子殿下には、御豫定の如く十一日午前八時館山御發艦、同十時三十分横須賀に御歸着あらせられたれば、井上鎮守府長官、新井港務部長、松永艦政部長を始め造船廠長、機關學校長等は奉迎の爲め小蒸汽にて御乘艦に到り、拜謁を賜ひ、殿下には間もなく御上陸、中山太夫、高辻侍從長、村木武官長以下の供奉員を隨へさせ、同十一時十一分發列車にて、有栖川宮威仁親王殿下と、御同車にて、葉山へ向はせられ、同廿五分逗子驛御着、直ちに御用邸に入らせられたるが、鎮守府將校、各艦長、練習所長、要塞砲兵將校數十名は、横須賀停車場に奉迎したる由。

●●●●●優渥なる御詞　去にし十二日午前十一時半、山内書記官をして、此の程來遊のワルデルゼー元帥を、芝離宮に訪せられたるが、をりふし、元帥には、陸士官學校、幼年學校、巡視中幼年學校ありしを以て、同書記官は、暫時歸館を待合せ、同五十分頃元帥の歸館せる時、親しく長途の旅行にて、甚しき疲勞はなきや、昨夜睡眠は如何になど、實に有り難き御尋の旨を傳へられしに、元帥は、陛下優渥の恩命に感激し、日本國の好風光に接し、身心共に一層健康に覺えまつる。陛下優渥の御尋、恐懼感激の外なしとの意を奉答したるにより、山内書記官は、直に徳大寺侍從長を經て、復奏に及びたりとも承はりぬ。

因に、同元帥には、此の日正午十二時隨行士官五名を隨へ、獨國特命全權公使ワルレー伯同伴にて、

參內せり。三宮式部長の先導により鳳凰間に於て、天皇陛下に謁見、引續き香川皇宮太夫の先導にて、皇后陛下に謁見し畢て、西溜の間に退き、同三十分午餐御催の爲め、兩陛下豐明殿に成らせられ。小松大宮伏見宮兩殿下、其他十餘名と共に、陪食被仰付られたり。當日元帥は禮服にあらざる、職位相當の略服を着したるが右は嚮に、北淸事件のせつ、儀鸞殿燒失の爲め、正服一切を燒失し、新調の暇なかりし爲めにて、特に、陛下の御許容を蒙り、當日の參內を果したる次第なりと、略服にて參內せしは伯が嚆矢なりといふ。恐れ多きことにこそ。

○表彰錄

●無上の光榮　今回、皇孫御降誕の砌、妃殿下の御產の御介抱申上げたる、我日本赤十字社の看護婦三名の中、田中のぶ子、高田やを子の事は前號の紙上に揭げしが、茲には、加藤まさ子のことを記さん。

まさ子は、京都市上京區聖護院町、百番戶加藤機外の長女にて、慶應元年十二月七日の生れなり。父の機外は、流石に大君の宮居し玉ひし京都の地に人となりしことゝて、勤王の志、人に勝れて深かりしが、維新の變遷と共に、家道漸く衰へしかば、まさ子が妙齡になりし頃、昔の緣故をたどりて、中山從一位の局慶子の方の御許へ女中にとて遣はしぬ。斯くてまさ子は、此處へ明治二十三年まで仕へ居りしが、故ありて園權典侍祥子の許へ移り、こゝに仕へてありしが、二十五年の十月に至り、我赤十字社にて第五回看護婦の募集ありしかば、まさ子は之に應じて、試驗を受けたるに、首尾よく及第したりしかば、權典侍の許を辭して、同社

の病院へ入り、看護の業を修めたるが、二十八年十月に至りて卒業したり。是より先き、二十七年清國との戰爭起るや、まさ子は同年十月、未だ修業中なりしに係らず。採用せられて、救護事務に從ふこと丶なり、同社救護員看護婦を申附けられ、同年十二月十九日まで、東京にて、清國の捕虜を看護したるが、翌二十八年に至り、再び採用せられて、一月二十日より六月十日迄、東京陸軍病院へ至りて、我が負傷軍人を看護したり。夫より同社病院へ歸りて、相變らず勤務しをりしに、翌二十九年四月十六日に至り同社病院二等看護婦を申附けられ、上給俸を給せらる丶こと丶なりぬ。然るに、同年六月に至り岩手縣に海嘯の災ありしかば、まさ子は同月二十二日、同社救護員として同地へ派遣を命せられ、即日當地を出發して、同縣宮古町の救護所に赴き、不幸なる被害者を看護して八月十五日歸京したり。（未完、富士）

●孝行車　こは、前號に報じたる、高崎彰善會長の談話にして、遠山いね子女史が筆記せしつゞきなり。いはく、

恰度其の時は、皇孫殿下の御降誕あらせられた當時で、誠とに目出度事であるから、兩陛下、兩殿下の尊影を飾り、祝酒を供へて、家内の者一同下輩の者共にも、祝酒を戴かせて、其の飾り付けを爲してある所で、好時期であるからと云つて、孝子及び、其母幷に宿屋の主人を其席に案内して、尊影を拜せしめ神酒を戴かせた所が、實に感泣して嬉んで斯う云ふ結構な時に來合せたのは、どふ云ふ因縁かと云つて、落涙した。夫れから今日は先づ卿等の孝行を嬉んで、天子樣が明治二十三年に仰せ出された勅語の中に父母に孝にと云ふ事が一番眞先に書いてある、夫れを能く行ひ遂げた人

であるから、今日は上座に請ずるから、遠慮なく通る樣にと云つて老母の手をとり強ひて布團の上に乘せて、娘が學校で習つた割烹が如何やら出來るから、料理屋からは態と取らずして、宅で娘に調にさせて御馳走をした。而うして此の善行にあやからんせんとの心にて、給仕も悉く私の嫁恒子、娘松子、三男茂雄にいたさせた。お相伴は私と、彰善會主事長藤井善言、延原正孝の兩氏と長男元彦であつた。其上に恰度先日　主上から私の病氣が全治つたものですから、鰹と日の出の松のめでたい形のお菓子を下されたが、夫れを戴いたのか、殘つて居りましたから、夫れを遣り、其外二三の品物も遣り、夫れから扇子に歌共書いた物を贈りましたら非常によろこびました。其上に彰善會に定めてある善行者に與ふる所の徽章に賞状を添へて贈つた其徽章を與へる時も、御尊影の前で與へて、私の宅の男女の使召をも、皆椽側に集めて、見せました所が皆落涙して感心いたしました、夫れで充分歡を盡して歸る時は日が暮れて居りました。辭してから又車夫の仕度に懸つて、而うして、饅頭笠を被つて、左樣ならと云て出て行く時を見て、皆玄關の外に出て送りまして、男女共に涕泣して別れた。(未完)

○教の栞

●皇孫殿下祝賀會に於て

こは、去にし廿日西日本女學校長が、同校職員生徒、其の他來賓を合せて、無慮五百餘名を小石川植物園内に會し、おごそかに祝賀會を擧行し、其の席上に於て、演述せられたる大要なり。　記者

本日、皆さんに、こゝへ御出でを願たのは、我が皇孫殿下御降誕の祝賀會を開き、聊か我等臣民の微衷を表し、而して、忠君愛國の一斑を御話申

して、生徒諸子の訓誡とし、我が日本女學校の主義に悖らざる、淑女賢母とならしめ、以て　鴻恩の萬一に報いたいと云ふ、赤心から此處を拜借しました處が、本日は、意外な好天氣で、出席の方方も多く、かゝる盛大なる祝宴を開くことの出來ましたのは、澤之助誠に欽喜に堪へません。……實は、只今拜觀して來ました、後樂園内で宴會を催し、御話も致したいと思ひましたが、皆さんも御存じでせう、同園は拜觀すら中々御許のない處で御座りますから、左樣な勝手の事は、出來ません、依てこゝで開會しましたわけであります、付ては、種々御話申し度事が澤山ありますが、今日は、時間がありませんから、少々御話をして置くつもりで御座ります。

さて、人間が萬物の靈長たると云ふ以上は、何か他の物より長じた處がなければなりません。殊に、萬國無比の皇統を仰ぎまつりつゝある、我々國民は、何か歐米各國の人々より、秀でた所がなければ、決して日本人と申す事は出來ません。其の秀でるとは、何を申しますかと云ふと、即ち我國特有の大和魂であります、若し此の大和魂が無かつたならば、如何に顏付が立派でも、衣服が美麗でも、金銀寶石が澤山あつても、かゝるものは、決して役にたちません、然るに生徒諸子の身體には皆立派な大和魂があります、それは唯今、田島、安藤二教師が奉誦致しました、皆さんの作つた奉祝の歌によつてよく分つて居ります。誠に立派な歌であります、其の歌の美的とか、或は詩的とか云ふ樣な事は、論ずるに足りません。即ち精神上立派な歌を、日尚淺いのに、皆さんの手に出來たのは、實に澤之助感心致しました。一首として、誠のあふれて居らぬ歌は御座りません、是でこそ、

日本女學校の生徒、否日本人として、耻かしくはありません。……

皆さんは、既に歴史を習つて知て居る筈ですが、我國中古皇室の御衰微は如何でありましたか、誠に、御殿はくずれ、雨はもり、御衣はけがれ、剰へ御即位の御大典を擧げ給ふ費用さへ、御乏しく、二年も三年も御延びになつた事があるではありませんか、嗚呼一天萬乘の至尊にまし〳〵て、かゝる悲境に陷いらせ奉つたるは、畢竟誰れの罪でありませうか、申す迄もなく、頼朝以來武門の權を擅にし、加ふるに當時の臣民たる者は、大和魂の大義を誤り、只祿を受くる主人の爲には水火をも辭せず、一命を擲うつと云ふ事は、知つて居ても最大切なる天皇に對する誠、即ち純忠と云ふ事を知らなかつたは、實に殘念の事ではありませんか、去りながら多量の水分を含んだ雲が、空をつつみて、曇天となるとも、又水分が飛散すれば、晴天となるは常に皆さんも見て居る所で御座りませう。其の如く一度は逆臣の爲に御衰運に至らせられても、今日の如き赫々たる旭日の登るが如く、東洋の一大强國として、世界に雄飛するに至りましたのは、申す迄もなく、今上陛下の御威德ではありますが、其の基づく所は、即ち南朝の忠臣、楠、新田等の誠忠より起つた者であります。されど、楠公父子は、湊川に、四條畷に、新田公は、北越に忠死せられましたが、決して其の魂は消滅しません、彼の楠公の如き七世生れかはりても、逆賊を亡すと云ひ、小楠公の如き、腕白盛りの小供遊びにも、偽逆賊を亡ばし、或は、尊氏の首を取ると云ひ、かゝる勃々たる忠誠も、かへつて逆賊尊氏等十五代の蔽ふ所となりましたが、幾程も無く、楠、新田の忠誠を受けて出で、大に勤王の

大義をとなへたのが、織田公であります。しかし、忠臣由來敵多く、其の臣光秀の爲に、弑せられたが、公の志は、決して消えず其れから、豊臣秀吉が、光秀を亡ぼして、天下を治めましたけれども惜しいかな、愛妾淀君に惑はされて、遂に家庭が修まらず、爲めに僅か二代で亡びました。すると女と云ふ者は、誠に大切な者で、昔しから家を亡し、國を失ふたのも、多くは女から起つたのであります、此の淀君と云ふ人は、非常な美人で、正妻淺野氏の容貌は、とても及ばなかつたと云ふ事ですが、其の心は、丸で反比例でよくいひます、外面如菩薩、内心如夜叉と云ふ風であつたのです、皆さんもかう云ふ風では、いくら立派な貌つきでも、心がこの樣では、いけません、夫と少しく話しが變りますが、德川秀忠の如きも、姑息の愛に迷て、長子家光を疎んじ、弟國松をして、家なつがせんとしましたが、幸に春日局のあつた爲に、德川は十五代まで續いたのであります、此の事に就ては、又、茶話會の節にでも、話しませう。とんだ話しが橫道に入りましたが、武門が權を擅にし、諸大名の多き、恰も星の如く、去れど一人として忠君の大義に通ずる者なく、德川氏の如き、新田の末裔を以て、將軍となりましたが、尙ほ純忠の至誠なく、私をいとなみつゝあるにも拘らず、其の一族には、楠、新田諸公らの精神を受け繼ぎたる光圀卿の如き人がありました、こゝが卽ち、靈魂不滅の所で、例令其の肉身は消え失せても、其の魂は働いて居ります。其の譯は他日に讓りて本日は話しません。さて其の光圀公が、唯今拜觀して參いつた、後樂園を作られた次第の大意を少し述べてをきます。尤も其の詳しい事は、いづれ各受持敎員から敎しへてあげます樣に致させま

す。其れから光圀公の精神のある所を申しますと即ち京都で、陛下の宮殿より少しも純忠至誠の心がはありません。故に後樂園を作つたも、いたづらに遊宴にふけるのみでなく、天下の憂に先立つてうれひ、天下の樂に後れて樂しむと云ふ所より、名を附け、又園内には、東海道五十三次の名所を寫し、遊ぶうちにも、當時天皇のまします京都を忘れず、常に君を思ふ志を顯はしたのでありま す、最も、此の頃は、御所へ登るには、東海道を登つたからであります。彼の有名なる、大日本史の出來た基いも、實に後樂園にて編著にかゝられましたので、其の他古儀舊典を明にし、或は、湊川に楠氏の碑を建て、其の忠誠を顯はし、又は、人をいましむるに、將軍は只我が宗家のみ 君は即ち天皇なりと申して、大義を說き示したは、當時義公一人よりほかにはありませんでした、其れも其の筈で、若しかゝる事を他の人が申したならば、直ちに首がなかつた者であります。又、元旦には必ず禮服を着用し、京都の方へ向つて、敬禮を必ずしたといふ事であります。……德川の三家と云へば、當時非常に勢力の有つた者で、殊に其の中の水戸へ、南朝忠臣の志が反射したので、光圀公より九代の後ちの烈公の如きも、大いに忠君の大義を與へました、豈只水戸のみでなく日本國中へ、至誠の精神が輝き渡りましたから、今日の如き、國家の隆盛を見る事が出來る樣になりまして、若し左無くば、支那邊ではなく、埃及、印度の如き非運に陷いつたかも分りません、故に精神と云ふ者は、一番大切な者でありますが、其の精神、……顧れば北清事件の時の如き、世界各國の兵が集た中でも、露國の如きは、云ふに忍びない惡事を働きましたが、我が兵の如きは、正々堂

堂として、誠に立派なものでした、其の立派な兵士のある國はと申しますと恥かしい事ですが、下等社會の船乘などになりますと、禮をすることとさへ知りませぬ、斯かる人達は、外國の人が亂暴すると大きな違ひはありません。其れは何故かと申すと、實に教育によるので兵士の中には、かかる下等社界からでる人も少なくありません、其の人々がかく立派になると云ふは、皆教育の御蔭であります、しますと、教育ほど恐ろしい者は御座りません。それで、あるから皆さんは、教育を完全に受けて、純忠至誠の精神をあなたがた五百人の頭に記憶してもらいたい、爲めに、特に今日玆で開會して御話しをした釋で御座ります。それであるから、皆さんは、光圀公の樣に立派な庭園を造つたり、或は、小楠公の樣に、竹馬に戯つて敵を追ひ拂ふまねをせんでもよろしいが、皆さんもこゝ十五六年たてば、子をうまぬ人は無いでありませうから、どうか、淀君や、秀忠の妻のやうにはならぬ樣、今から忠君愛國の至誠を忘れない樣に、何事も、都て、楠、新田諸公等の心ざしにもとらない樣に心かけて、貰ひたいのであります。切に、澤之助が皆さんに、御願ひ致す譯であります。又、歌を作るにも、花がきれいだとか、蝶々が飛んで居るとか、云ふ樣な事ばかりでは役に立ちませんから、精神をこめて、詠んだ歌でなければ、いけません、まだ色々御話したい事が澤山御座りますが、今日は是だけにして置きます。要は、只生徒諸子が、外形の美をさけて、内心の誠を發揮し、以て日本の婦人として、恥かしくない人になつて、貰ひたいので御座ります。

（速記、筆記）

●全國各女學校卒業生（第四回）

●鳥取高等女學校の卒業式に於て、校長及び書記官の演辭、卒業生の族籍氏名、其の他、生徒の祝詞、謝詞は、次の如し。

演辭

維明治卅四年三月廿日知事閣下始メ貴賓ノ來臨ヲ請ヒ爰ニ本校第四回卒業證書授與ノ式ヲ擧グ實ニ本校ノ榮トスル所ナリ抑モ本校設立以來閲歷既ニ四星霜其間高等女學校令ノ發布アリテ設備ノ完成ヲ督責セラルヽト雖モ尙十分其ノ主旨ニ副フコト能ハズ遺憾何ゾ盡キン然ルニ今其ノ成蹟ノ稍觀ル可キヲ致スハ教官ノ盡力ト生徒ノ勵勉ト相待ツテ然ルニ由ラズンバアラザルナリ今此ノ式ニ方リテ諸賓來臨ノ辱キヲ謝シ教官諸君ノ盡勞ヲ慰シ而シテ卒業生諸子ノ榮ヲ賀スルト共ニ將來操行ヲ愼ミ業ヲ勵ミ皇國女子ノ品性ヲ全ウスルアラムコトヲ望ム且ツ本校將ニ縣立ニ移サレントス修業生諸子一層奮勵シテ縣立高等女學校生徒タルノマツアランコトヲ期ス

鳥取高等女學校々長　宮崎貞藏

演詞

本日鳥取高等女學校第四回卒業證書授與式ニ臨ミ諸子ノ榮譽ヲ荷フヲ見ルハ本官ノ深ク欣喜スル所ナリ惟フニ社會風習ノ良否ハ女子言行ノ如何ニ關スルコト多シ諸子ハ多年研鑽ノ效ヲ積ミ爰ニ業ヲ卒ヘ將ニ世ニ立ントス諸子ガ社會ニ對スル任務重且ツ大ナリトイフベシ冀クハ諸子倍々淑德ヲ修養シ以テ斯ノ任務ヲ全フセンコトヲ

明治三十四年三月二十日

鳥取縣知事代理

鳥取縣書記官從五位　薄　定吉

●本科卒業生

士族　山角靜子
平民　濱田春
士族　村尾させ
士族　氷野みつ
士族　五藤篤子
平民　中尾のぶ
士族　野間よれ
平民　岩越みれ
士族　小竹まき
士族　三浦てる
士族　砂川すみ
士族　和田よしね
士族　阿本幸
士族　武田こう
士族　奥田ゆき
士族　安岡つれ
士族　葛葉春
士族　村上みき
平民　吉村もと
士族　朝倉かつ
平民　石田ひろ

●隨意科卒業

士族　伊吹すゑ
士族　杉村いく

◉技藝專修科卒業

平民　岡崎はま
平民　齋江そよ
士族　若原さき
平民　岡部すゞ
士族　四宮よしの
平民　小谷しげ
平民　大村みつ
平民　菊一さよ
士族　人見しま
平民　金澤さき
士族　麻井しづ
士族　藤田あやめ
士族　原田こさ
士族　吉村みつ
士族　星野すが

◉補習科卒業

士族　原田蔦枝
士族　津田ぬひ
平民　井尻小松
士族　杉田靜子
士族　羽原ふみ
士族　岡野さし
士族　馬場かつ
士族　宮崎つね
士族　平田梅野
士族　種木千代野
士族　小林ひさ
士族　繁本しづ
士族　大倉政子
平民　森みち

（以上）

祝辭

野も山も霞みこめたるやよひのけふしも我鳥取高等女學校卒業證書授與式を擧げさせられたるさきかた〳〵の御前にこの名譽あるあかしのふみいたゞき給へる姉君たちのよろこびや如何ならん實の根の長き年月いさも懇なる師の君たちの御教のまに〳〵文の林にわけ入りつゝ朝な夕な雪に螢にいそしみたまひしいさほの光今こゝにあらはれて定めの業をへさせたまひ色香めでたき櫻の花をかざして世にいで給はんさすあはれなほこのうへつとめはげみたまひ繁榮ののぼる朝日の如く進み行く大御代になほ一しほの光りをそへ給はんことをいのりまつるになん
つら〳〵思ひめぐらせば幾年の春秋姉君さしたひまゐらせしを今こゝに袂をわかたんさすがにあふはわかれのはじめとしおへばせんすべもなしたゞこれよりはよしや八重山八潮路隔つとも今にかわらぬ御心もて久松山の萬代かけて正しきかたに導きたまへとせちにこひまつるのみいまこの式にあたりて思ふ事の萬が一も得いはずたゞこの盛典にあづかり思ひあまれるひとふしを生徒一同にかわりて聞えあぐるになむ

明治三拾四年三月二十日

鳥取高等女學校生徒總代
宮崎花

謝辭

開けゆく大御代の惠の露にうるほひて學びの庭におりたちしはきのふさのみ思ひ侍りしに年浪のながれはやさだめの業を卒へぬ誠や今妾等四年の春秋此學びの園生に遊びつゝ校長の君を始め奉り師の君達のこまやかなる御惠の露をうけてやう〳〵大御代の民草ともはそめんとて今日しもいさおごそかなる式をあげさせ給ひやんごとなきかた〳〵の御前に榮ある卒業の

あかしふみをたまはりぬるうれしさよ今更に謝しまつるべきこ
との葉も侍らず何はれ雲井にそびゆるふじがねよりもいや高く
そこひもしらぬわたつみよりもいや深き御恩を如何にしてか報
いまつらんさても教の業にかぎりしあれどけふこの庭をたちは
なるさていまゝでうけし御恩をいつの世にか忘れ侍らんさはれ
今日よりはかゝる貴き師の君達の御許をはなるゝのみか蛍の光
のながきさしつきもろさもにはらからさもたのみて光りのどけ
き春の日もあはれ身にしむ秋の夜もかたみになぐさめられつな
ぐさめつ幾久しくさかすむ夜のおぼろげならずちかひてし友が
きにも別れむかはんきしもしら波の風ふきすさむ菅湯原にこぎ
いで八頭の白雲隔つらんさ思へばかなしさ心細さいはん方なし
されはさここしへに此学びの庭さ師の君達さを我家さの父母さも
たのみ奉らんをあはれさなんきこし給へかし此後はたゞ一すじ
にかしこき　勅語の大御むねにしたがひまつり朝な夕な諭し給
ひし御教を拱かぢさたのみて学びしまにく〳〵いよく〳〵行なつゝ
しみ業をはげみて此恩の露ばかりも報い奉つらんさ思ふ心の一
すじに花も實もなきことの葉をもかへり見ず同じ卒業の人にか
はりて謝しまつるになんあなかしこ

明治卅四年三月二十日

鳥取高等女學校卒業生總代

山角しづ

●石川縣高等女學校●●●●●●●卒業生の氏名族籍は、即ち、

●卒業生

石川縣士族	岩倉一野
仝	伊藤行
仝	林陸
仝	端綾
仝平民	高川宗
仝士族	河崎文
仝	河合カメ
仝	加藤小吉
仝	田原美喜
仝平民	津田三枝
東京府士族	村上はま
富山縣士族	上田松樹
三重縣士族	太田松嶼
石川縣士族	久保従
福岡縣士族	山本滋代
石川縣士族	松田富美
仝平民	松島茂
仝士族	松井薫
仝	松島静井
仝平民	瀬島アイ
北海道士族	小島ふく

石川縣士族　後藤松代
仝　近藤靜
高知縣士族　江川文
富山縣平民　扇澤さゝ
石川縣平民　中村璣
仝　島靜江

以上、授與式當日は、客員殆んど二百名、別室に於て、生徒の成績品を陳列し、實習、應用旁、挿花、點茶などして、客を待ちたりと云ふ。其の優等生へ縣廳より、賞狀を與へられたる寫、左の如し。

石川縣金澤市高等女學校卒業生　山本滋代

在學中品行方正學業優等に付特に褒賞す

明治三十四年三月二十五日　石川縣

●●●●●●**愛媛高等女學校**　卒業式は、去にし三月三十一日にして、先づ、職員、及創立委員等と共に、紀念の撮影をなし終りて、式場に入る。來賓の主なるもの本部知事、相良參事官、寺尾視學官を始め、凡そ四十余名と、其の他を合すれば、實に二百九十有五名の盛會なりき。而して渡部校長の學事報告、即ち、

在籍生	三一七	本科　一九三	専科　一二四
合格生	二八九	本科　一八五	専科　一一三
內 卒業生	四一	本科　二二	専科　一九

に續きて、證書、及褒狀賞品を授與し、畢りて、訓告ありたり。其の大要は次の如し。

卿等修業及卒業生に對する訓諭通告は既に幾たびか繰め幾たびか申れぬ將又何をか加へん只我今此席に臨み一事の言はでやむべからざるものあり抑も本校の設立は遠く明治二十四年にして爾來十年の久しき校運中ころ傾き命脈將に絶ほなんとせし事あまたゝび其際常に焦心苦慮の勞を煩はしゝは即今日こゝに列せらるゝ十數の委員諸氏ならざるはなかりき今や一躍縣立の榮を荷ひ私立の本校はこゝに閉づと雖も卿等は永く其本を記し恩を報いんことを忘れざるべし蓋しよく本校の歷史を記し本校の

慈た記するものは即ち平日余が特め且申れたる訓諭を守り良生徒なれはなり今の希望こゝに繋く

と、俯仰感慨の趣、満坐ために関たりし。而して、本部知事は、おもむろに立ち、曰く、

諸子よ余は今校長より本校歴史の概要を聞き感動止む能はざるなり思ふに諸子も亦その如けむ殊に訓諭の辭の如き簡明にして遺すなし更に蛇足を添くを欲せず只思ふ諸子が最終の目的は那邊にありさゝはゞ必ず良妻賢母と答ふるなるべし良妻賢母の字言ひ易くして實は行ひ難し而して一國の消長盛衰皆源をこゝに發す希くは時々刻々常に此語を標榜として智を研き徳を修め少しも背戻するなからん事を終りに臨んで一言す今日此盛典に列し諸子の業成り學終りたるを見るは縣下女子教育のために余の大に喜ぶ所なり

次に卒業生總代答辭

おもひみれは我等曩に螢にいそしみ勉むといへど拙く鈍き身の業の進みもはかゆかざるにはやも五年の定まる學びを終へて今日こゝにめでたきむしろに列なるを得る事ひとへに師の君達のいや深きいや高き御恵みによらざるはなしされどここは何世のつれの事なり我等が本校に於けるは其最終の卒業生なりとて日頃いたく惠みいつくしみ給ひしのみならず今又校長をはじめやんごとなき君のいとも懇なるいとも厚き御教へをうくおぼつかなき身もいかで發憤勉勵いや深きいや重き御恵みの萬一に報い奉らでやは謹みて答へまつる

明治三十四年三月三十一日

愛媛縣高等女學校卒業生總代

森野節子

午後三時半式全く終るや、卒業生一同茶菓を侑めて、職員、創立委員等を招き、献芹の忱を致さむと、仍ち別室に入り、懇談欵話情趣殊を欺く、興半ばにして、職員より福引を寄附す、滑稽突梯、頤を解くもの多く和々たる笑聲の裡く、席を撤したるは、正に五時半、公會堂樓上風暖にして、玻璃窓外、夕陽榮花に落ちて、うはるしき頃なりき。即ち、卒業生の氏名は、

●本　科

山根　ヒサ	藤野　セツ	田中　フサ	泉　サキ
平野　シヅ	新居田ヒデ	影浦　コト	川井　シズ
芝　トシ	池田　サイ	岡田　クナ	西山ヨシカ
影浦　ヒサ	安平カツエ	城　壽子	岡井ツクモ
近藤キシエ	山田　シゲ	野村　トク	渡部モリノ
仲田　セイ	[illegible]田　[illegible]		

●技藝専修科

長井ツヤ　口洗スミ　河合セキ　佐伯シツカ
三浦ウメ　曾井道代　曾一サヨ　大道寺ツヤ
曾根トキハ　福島マサヨ　池田テル　西山茂
植田シモ　玉井シナ　本庄シゲ　田中道江
村上ノブゴ　（以上）

●●●●●●●●●●●●

●高知縣高等女學校卒業式は、三月廿六日午前九時に擧行せられました。來賓には、縣知事代理植木參事官、安藝縣會議長を始め朝野紳士卒業生父兄、本校舊卒業生等總員數十名で、それから校長の式辭、知事代理、及、安藝縣會議長、岡村本校敎頭などの祝詞と、卒業生の謝詞がありまして、式後別室に於て、來賓、卒業生に茶菓の饗應をなし、了て、校内運動場に於て、職員卒業生一同、紀念のため採影せられたさうです。即ち、卒業生の氏名、及、謝詞を擧くれば左の如くです。

●本科卒業生（イロハ順）

今村瀧　伊吹英　原田正猪
濱田壽於　濱田富士枝　西岡求巳
西野照喜　土居登勢　門脇金喜
川谷登起　加賀野井久壽榮　横田清猪
横山秋生　田所耕　高村鹿衛
熊野初惠　永吉知愛　中山珠枝
上田龍　宇田繁代　猪野美惠
國澤千鶴　久保田信惠　濱內岸江
町田登馬　松田ユキ　征島衛
近藤清　寺田繁代　齋藤繁枝
齋藤久　澤村嘉女滋　坂本幸衛
坂本羅　佐竹茂枝　北村愈治
木村登代　水野信　明神好
志和春江　島村芳　下村理
東山龜壽　森木民　隅田居鶴

●補修科修了生

乾八重　池鶴　濱田靜壽
十市八重輝　千頭圓　小川喜代
小栗揖　小島龜鶴　小島粂
和田晃壽　川田丑衛　川北淨
横田都瓊　棚橋茂鶴　中村龜壽
中内里衛　中内茂壽衛　中山小千代
植田眞豬　植田壽代　山脇熊惠

山脇學治　山脇　榮　山本兎文
前田早智　小松美登里　寺村幸阿
志和松　島村藤尾　森脇忠衛
森澤廣

因に、本校現在生徒數は、本科二百二十五名と、補習科三十名で、合計三百五十五名だそうです。それから、創立は明治二十年七月で、爾來卒業生を出だしましたことは本科で、二百七十二名、補習科で六十九名、合計三百四十一名と云ふ事です。

謝辭

春かすみたなびく野邊になしへ草つみさらばやさいり立ちしは昨日今日かさ思ふ間にはやーさせなすさはて定めの業もやうくになし終りぬされば今日しもしるし玉ふさていさもはれある式をぞあげられけるみ其席の端に列りてゆるし文賜はるだにうれしきにやんとなき方々の御言の葉をさへ下し玉ひしは身にあまる譽にこそあなうれしき哉よろこばしきかな去年にもまさる春のけしきに汀の柳も打なびきつゝめる花もぼゝゑみて物おのづから我等の身を祝すやうなりあはれこのうれしさにつきてしのばるゝ我師の君の御恵よ菅の根のながき月日も一日の如しよろづに御心そへさせられいさけなき子の數へ方はぐゝみ方のかずくもいされもごろに授けられ我等のために明けては行の至らざる節もいましめられ暮れては才の及ばぬを補はむさ千々に御心なやませられしかのみならず身の健かならむことをさへはかられてたらちねの親にもまさる御恵の露いかでかうる匠ひ奉らざるへきいかでか忘れまつるべきあはれ汀の青柳はみどりの糸の末ながくたかき御恩をわするなよさにやあらむあはれ匠ゝゑみたる櫻の花はわれにおさらぬ香もて深き御恩に答へ奉れさにやあらむよし我等この庭をはなるさもいかで心のこゞまらざるへきたゞこれよりはひたすらに大君の御勅にしたがひまつり師の君の御數をよく守りつゝ二葉の若草はぐゝみて國の光をかゞやかすべきよき民草を生ひしげらしめたさへなき御恵の千々の一をも報いまつらむさ思ふ心のかずくもつたなき筆にはつくしかぬれたゞーことをかいつゞりてかくは謝し奉るになむ　あなかしこ

明治三十四年三月廿六日

高知縣高等女學校補習科卒業生總代

横田都瑠

謝辭

いさもたふさき大御代のみ恵により學びの道の月に日にひらけゆきうちひさす都はさらにもいはずあまさかるひな迄もゆ

きわたりて物まなびするやうになりぬる事こそかしこけれ妾等この學びの庭に入りたちてよりいつしかに四年の月日もすぎゆきてけふしも卒業の時となり其證さづけ給ふ式を行はせられやんごとなき方々ののぞみ玉ひ殊にねもごろなる御言の葉さへ給はりぬるはいともうれしき事にこそ實に数ならぬ妾等けふ御榮をかふむる事ひとへに校長の君をはじめまゐらせ師の君達の深き御教へによるなりといともくかたじけなしあはれかゝるみ惠をいかにしてむくいまつらむたゞ學びのそのをはなるともいやはげみにはげみて数への君の御言にしたがひ朝な夕なにかへりみていよゝ身をつゝしみ女のわざをいそしみゆかむのみげに海山もおよばぬ御恩の千々の一をだにと拙さを思はで同じ學びの友がきにかはりて謝辭の一言をのぶるになむ　あなかしこ

明治三十四年三月廿六日

高知縣高等女學校　本科卒業生惣代

隅田居鶴

○池塘芳草

●華伯の來朝

獨の華元帥が、我が皇土に來遊したる、其の目的いづれにあるか、去にし十二日報知子は、次の如く傳たり。即ち、いはく、

●尋常觀光の爲めに非ず。ワルデルゼー元帥が來朝されしは、本邦觀光の爲めと沙汰せられ居れるが、元帥の來朝は、別に重き意味に出でたるものにて、事は實に、元帥の列國兵の總司令官と爲りたる以爲の根本に關連せる次第あり。

●列國連合と總指揮官。連合軍に總指揮官を置けることは、其當時に於ても、兎角の議論もありしが、理窟は扨て置き、事實上、共同の動作を試むる場合には、連合軍全隊を統一して、之が區處を定むる總指揮官無かるべからず。左れば華元帥任命以前に於ても、列國軍の參謀會議に於て、最故參の先任武官が、議長と爲り、全連合軍を區處する例ありしが、連合軍が兵數を增し部隊增大すると共に、益々統一の要あり、連合軍司令部を組織す

る必要を見るに至りしが、從來國際連合上の慣例に依れば、最多數の兵士を出せる邦國の司令官が、總指揮と爲るの例にして、當時最多數の出兵を爲せしは、帝國なれば、帝國の司令官が總指揮官爲るの順序なりしも、露國始め、白皙軍は、到底之を肯諾すべくもあらず、然るに帝國に亞ぎて兵數多かりしは、露國なれば、露國將官總指揮を握らんづる形勢と爲りしなり。

●帝國の用意。帝國は、形勢右の如くなると共に、清國前後處分の大局上より、見るも、此際大に考慮すべきものありと爲し、時の外相青木子は、

華元帥之肖像



英國諸國の交際官に謀りて、折角斡旋する所あり。獨逸皇帝は、ワルデルゼー伯に向つて、出軍を命じ、日英兩國の肯諾を經て、連合軍の司令官を華元帥に委せらるゝに至りしなりと。

●露國と華伯。華元帥本國を辭するに臨み、獨逸皇帝は特に出征軍に向ひ、『華元帥が列國兵を指揮するの一事は、實に隣友露國皇帝の賛助に出でたり。』と、演說して親諭ありしが、之より先き、獨帝が露帝に御會見ありし節、元帥派遣の御內意を露帝に洩らされしに、露帝は『其儀然るべし』と

の御答ありしより、右獨帝の親諭を見るに至りし次第なり。然るに、露國は指揮權の豫期前記の如くなるを以て華元帥の着任するや、列國に卒先して、撤兵を發議する等の動作に出でしが、我聖明なる天皇陛下には、少しも違疑遊ばせられず、畏くも兵馬大權の一部を割きて、暫く之を華元帥に假し給ひしなり。

●元帥の感謝。　事情右の如く、華元帥が全連合軍統率の大任を負ふに至りしは、帝國の用意に出でしこと多きを以て、元帥は、深く我天皇陛下の叡旨に感激し、今回の來朝は、親しく天皇陛下に拜謁して、其銘肝敬謝の衷心を奏上せん爲めに出でし事にて、其意味極めて深し、左れば、京都にて、故服部海軍中佐の墓前に花輪を供し、誠心を以て、追弔の意を表せし事の如きも、一時中佐の遺骸を獨國軍艦に引き取りたる緣故あるのみか、『中佐は、世界の爲めに、先登第一の榮死を遂げ、中佐の血は、人道を世界に扶植する最先の源泉なり。』とて、華元帥は、深く銘肝する所あり。其の衷心を洩らせし次第にて、親善なる日獨の國際上、元帥の來朝は、重大なる一紀元を劃するものなりと。某外交通は、機敏の幾部を語れりとぞ。

●華元帥故服部中佐を弔慰す●●●●●●●●●　憶ひ起すだに、いと悲しき極みなるは、去年のこの月、はしなくも、北清の一帶、天地妖氛に包まれ、先づ太沽俄然として戰雲の掩ふところとなるや、世界列國皆軍を、こゝに集め、各强を示しつゝありし軍伍の中にもことに花々しき功名を顯したるは、我が帝國の海軍にて、先登第一の威武ひろく宇内にとどろきたるも、故海軍中佐服部勇吉其の人の、身命を敵彈になげうち、一死國家に報いたる忠勇にこそ起因すらめ。實に中佐の戰歿は、月の十七日

將に東方の一天紅を帶び、曉風地を拂ふて冷かなりし頃、名譽の戰死をぞとげたる。されば、嘗、聯合列國軍の司令長官として、東征したる獨逸の老元帥ワルデルゼー將軍は、去にし八日神戸上陸に先だち、あらかじめ、我國在留獨逸公使に通報し、而して、更に、神戸駐在の同領事をして、特に中佐の墓所を取調べしめ、當日出迎の爲下神したる、公使館附武官陸軍騎兵中尉フオン、リッテル男をして、見るもすゞしき白蓮花に色よき、米利堅齒朶、薫り高き薔薇、マゲレットの花のかずかずを調せしめ、斗大の花輪に造上げて、獨逸國旗に緣める三色のリボンを、裝飾して、其の翌日東上の途、之を携持せしめて京都に入り、リッテル男を名代として、直に紀伊郡堀内村字堀内伏見桃山なる故中佐の墓前に就き、之を手向けて、拜展の高意を寄せしめられたりと。故中佐の一週年も間近きをりかゝる、元帥の心禁を享くる英靈いかばかりか、地下に喜び謝するなるらん。

抑、元帥の供花は、一獨逸武將の寄せしに止まらずして、故中佐は、實に世界的に弔慰せられたりといふも、不可なかるべし。あはれ、健きものゝふの香はしき情こそ、世にも慕はしかりけれ。

さて、華伯の厚意は、我々も大いに謝するところなるが、殊に默しがたきとて、其の後、下谷區車坂町の親戚なる築山海軍中佐の許に寄寓し居らるる、同中佐の未亡人服部もと子は、元帥の着京したるを聞くや、直に芝離宮に至り、刺を通じて、右答禮の爲め來訪したる事を述べたれば、伊藤式部職主事より、同元帥に、其の趣を通ぜしに、將軍は、婦人の事なれば、聊か遠慮あるも、當人さへ差支なくば、面會せんとの事なりしより、夫人を一室に導き、親しく會見せりと。夫人は、故中

佐の戰死したる時にも、獨國政府、及び軍隊より厚遇を恭ふしたるは、今に忘れざる處なるに、今回復た、態々使を遣はされし、亡夫の靈を弔はれし事、答禮の辭もなく、誠にありがたき旨を述べしに、元帥は之に答へて、故中佐の戰死は誠に痛惜の極みなれども、軍人の名譽として我々の永く敬ふ處なり。又、之に花環を贈りしが如きは、我々軍人たる者の義務にて、謝禮に與る程の事にあらずと述べ、尚未亡人の現在に付、年齡、住所及び遺子の有無等につき、種々談話したる後、夫人は禮をなして、退出したりけり。當日伊藤式部主事は終始通譯をなせしが、談話の事柄に感動せられて、時々通譯に甚へぬ程なりしと。因に同夫人は、明治三年の生れにて本年は、三十二歲なるが、故中佐の遺子は、一人もあらざるよし。

●大橋乙羽氏逝く　寫眞機械を友として、瓢然我山紫水明の間に逍遥するのみを以て快しとせず、遠く海外に遊びて、普く歐山米水を跋渉し、歸朝後天才の詩筆を揮ひ、以て大に好評を博し、前途有望の敏腕家たりしが、うらむらくは、才士多病のたとへにもれず、いくばくもなく病痾の犯す處となり、久しく大學醫院に治療せしも、藥石効なく、遂に、不歸の人となれり。享年三十三、嗚呼をしむべきかな。（横井曲水）

●●●●●●●

●故松岡明義氏十年祭　來る二十二日、日本橋區濱町日本倶樂部に於て故實及禮節の大家たりし松岡三世明義翁の十年祭を執行せらるゝ由、其の順序は、

祭式　（餘興）

男禮　年頭禮　對談

女禮　路頭禮　立禮婚禮式

包物結物　技藝品陳列

庖丁式

等にして、祭主は當代の松岡止波子女史、祭式係は門人大谷秀賓、幹事は石井泰次郎氏等にして、明義氏門人、及知己、諸名家の賛助を得て、其の祭式を執行するに至りたるなりと。

○口繪に付きて

●夏けしき　こは、畫伯南寛明氏の特に丹精を凝らしたる處、其の技の高妙なる其の畫の精趣なる、今や若楓のみどり濃やかに、茂れる木の下蔭の流れ水きよく、初鮎の二つ三つ四つ遊べる樣の、何にとなう床かしく、水にくちたる汀の杙のいと、をかしく斜めなるに、翡翠の處得顔にとまりたるも愛らし。

あはれ、夏けしきの涼しさ、流石に荒木門下の高足の筆として、恥づべきにあらずかし。

●群芳　嘗て報じたる如く、福岡縣柳河高等女學校より、特に、寄贈せられたる、生徒諸子の成蹟品にて、いづれも麗はしく、あはれ、諸子の筆のかんばしさ。讀者諸媛いかに。

●小楠公の母　は、今更いふまでもなき事ながら、實に本朝婦女の龜鑑なり。されば、本誌前號を以て、豫告したる如く、正三位子爵黒田清綱翁が、特に諸媛の爲めに仍ち、この歌を詠じ、以て、諸孃をして、かゝる賢母にあさしめよとの、いとも親切なる御心より玉はりたる揮毫なれば、徒らに翁が和歌の目出度と、其の筆の流麗なるとのみ見て、すごしたまひぞ。（超舟漁史）

尙、温厚篤實なる翁につきては、告ぐべき事、多々あれど、今回は記事非常に輻輳し、更に四頁を増したれど記すべき餘地なく、因て次號に讓りぬ。

〇次號豫告

揮毫　　賴山陽

山陽は近世の一大史家にして、勤王愛國の志士なることは、世人の既に能く知る處なり。又、特得遒健なる、其の書に至りては、普く賞する處、記者が辯ずるを須ざるなり。頃日其の手翰を得たれば、敢て諸媛に呈せんと欲す。

涼味　　高橋松亭

こは、松亭子が大に意を注ぎたる處、其の技の如何に高妙なるかは、諸媛の既に知り玉ふところなれば、特更に茲にいはず。

谷子爵夫人　　田島生

同人田島氏、過日來病に犯され、爲に稿を續ぐ能はず、二回までも休載したるは、記者の大に謝する處なり。氏の病漸く快方に向いたれば、次號よりは、益々例の緻密なる筆を揮ひ、子爵夫人の直話をうつして、以て、遺憾なし。されば讀者諸媛を益する事、甚だ大なるを信ず、乞ふ活目してまて。

其の他、趣味津々。

女鑑歌文月次兼題

七月五日分
歌　遠露
文　轉地療養中の友に送る文
右六月廿四日〆切

七月廿日分
歌　松下泉
文　水邊納涼の記
右七月九日〆切

八月五日分
歌　閑居秋
文　暑中見舞の文
右七月廿四日〆切

八月廿日分
歌　曉虫
文　遣
右八月九日〆切

在獨逸醫學士 丸川秀雄先生
東京板橋病院長 守川南洋先生 著
日本藥學協會講師 山田修台先生 名

諸藥獨劑術

通俗衛生顧問

（全一冊三百頁（正價金九十五錢（郵税金六錢（）
○上製金字入○正價金壹圓三十錢○郵税金八錢○

著者獨逸にて研究の結果諸疾病の起因病狀を説き以て病を其起らざる前に防ぎ或は諸病の發す可き起因を撲滅し或は既に發したる病を療治する方法を病名に依て説明を加へ又其藥劑の調合仕方を詳記す總目錄郵券二錢要す

發行所 日本藥學協會

賣捌所 神田表神保町 修學堂書店
○東京堂○東海信文社○良明堂○中西屋○南江堂○目黒○丸善○大倉○服部○誠之堂○牛田屋○大坂丸善京都大黒屋名古屋三輪片野

婦人科山門ドクトル 宮田守治先生
中央看護婦會長 松本安子先生 著

男女生殖健全法

四六判全一冊○密畫數個入○正價金壹圓拾錢郵税 錢

本書は日新醫學の原理に依り之を詳説せる者にして先づ生殖器の解剖生理を説き且つ其疾病を述べ夫婦とは如何なる者なるや情交とは如何なる者なるやを解釋し情交に因する諸障害を論じ後に小兒養育の事を記載せり世の夫婦たり父母たる者必ず座右に備ふべき寶書也

○總目錄郵券四錢要す○發行所は中央看護婦會

賣捌所 京橋銀座二 服部書店
○修學堂○東京堂○林平○水野○目黒○小林○山本○丸善○中西屋○東海信文社○上田屋○其他

伯爵佐野常民君題字　子爵品川彌二郎君題字
子爵松平乘承君序文　華族女學校幹事淺岡一君序文
藤井亞溟著

明治の女傑 慈善の泰斗 瓜生岩

定價一册貳拾錢 郵税四錢 郵券代用一割増

世に慈善を以て名あるもの多からざるにあらず然れども婦女の身にして能く有髯の男子を凌ぎ之が旗幟を翻すものは甚少し

瓜生岩女は渺たる一婦の身を以て畢生七十餘年間一日の如く社會の爲に國家の爲に粉骨碎身し以て天下百世の龜鑑を垂れしもの岩女を推して當代の女傑と爲し慈善家の泰斗となす豈過稱ならんや本書は其畢生を叙せし者あり天下の人士讀め！一度本書を讀まば貪婦も猶廉に惰夫も猶起つべし請ふ本書を讀め！

發行所 日本赤十字發行所
東京京橋區南傳馬町一丁目七番地

女鑑

明治三十四年六月廿日發行

毎月二回五日廿日發行
第貳百參拾壹號

明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

東京築地株式會社國光社印刷部印刷